

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第86集

下津令遺跡1

(沖ノ下1地区・西尾崎1地区)

2014

公益財団法人 山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

防府市教育委員会

しも つ りょう い せき
下 津 令 遺 跡 1

(おき の した 沖ノ下1地区・にし お さき 西尾崎1地区)

2014

公益財団法人 山口県ひとつくり財団

山口県埋蔵文化財センター

防府市教育委員会

序

本書は、防府市大字台道地内に所在する下津令遺跡(沖ノ下1地区・西尾崎1地区)の発掘調査成果をまとめたものです。この調査は、農地整備事業下津令地区工事に先立ち、山口県山口農林事務所から委託を受けて、公益財団法人山口県ひとづくり財団が防府市教育委員会と共同で実施しました。

調査の結果、奈良時代や室町時代を中心とする集落跡、古墳時代の堅穴建物跡やカマドがみつかるなど、この地域の歴史を解明していく上で貴重な資料を得ることができました。

本書が、文化財保護に対する理解をより深める資料として、また教育活動や学術研究、郷土の歴史を学ぶ資料として広く活用されることを期待いたします。

最後に、発掘調査の実施並びに報告書作成にあたってご協力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成26年3月

公益財団法人 山口県ひとづくり財団
理 事 長 松 永 貞 昭

序

本書は、防府市大字台道下津令地区の農地整備事業に伴い、公益財団法人山口県ひとつくり財団と防府市教育委員会が協力して事前の発掘調査の記録をまとめたものです。

防府市は古代、周防国の中府が置かれ、周防の政治・経済・文化の中心として発展し、多くの歴史的遺産に恵まれているまちです。

防府市西部に位置する大道地区は、近年各所で農地整備事業が実施されています。それに伴う事前の発掘調査では、地域の文化財の歴史を探る上で多くの知見をもたらしています。

今回の調査では市内でも類例のない古墳時代の竪穴建物跡がみつかるなど大きな成果を挙げることが出来ました。

最後になりましたが、調査にあたっては地元下津令地区の皆様には深い御理解と御協力を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

平成 26 年 3 月

防府市教育委員会

教育長 杉山一茂

例　言

1 本書は平成 25 年度に実施した下津令遺跡(沖ノ下 1 地区・西尾崎 1 地区)(山口県防府市大字台道地内)の発掘調査報告書である。

2 調査は平成 25 年度に公益財団法人山口県ひとづくり財団が山口県山口農林事務所の委託〔契約名：農地整備事業(経営体育成型)下津令地区 平成 25 年度 埋蔵文化財発掘業務〕を受けて、防府市教育委員会と共同で実施したものである。

3 調査組織は次のとおりである。

調査主体 公益財団法人山口県ひとづくり財団・山口県埋蔵文化財センター
防府市教育員会

調査担当 文化財専門員 光 永 辰 男

文化財専門員 水 津 亜希子

調　　査　　員 大 重 優 花

埋蔵文化財係長 原 田 光 朗(防府市教育委員会)

4 調査にあたっては、山口県教育委員会、山口県山口農林事務所ならびに地元関係各位から協力・援助を得た。

5 本書の第 1 図は国土地理院発行の 5 万分の 1 地形図「防府」「小郡」を複製(縮小)使用した。第 2 図は山口県山口農林事務所提供的地図を元に作成した。

6 本書の方位は、遺跡周辺図、遺構配置図に関しては国土座標(世界測地系)の北で示し、個別遺構に関しては、磁北で示している。なお、掘立柱建物跡の棟方向に関しては、国土座標(世界測地系)の北を基準とする。また、標高は海拔高度(m)である。

7 本書で使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局(監修)『新版標準土色帳』Munsell 方式による。

8 図版中の遺構・遺物番号は、実測図の遺構・遺物番号と対応する。

9 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

S I : 竪穴建物跡 S B : 掘立柱建物跡 S D : 溝 S K : 土坑

S E : 井戸 S P : 柱穴 S X : 性格不明遺構

10 出土遺物実測図について、断面黒塗は須恵器を表す。

11 報告書作成の過程で、磁器については上田秀夫氏・徳留大輔氏・市来真澄氏(山口県立萩美術館・浦上記念館)に御教示を頂いた。

12 資料の鑑定・分析に関して、放射性炭素年代測定(AMS 測定)について、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、その成果を付編として掲載した。

13 本書の作成・執筆は、光永・水津・大重が共同で行い、編集は光永が行った。

本文目次

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査に至る経緯と調査の概要	3
III 沖ノ下1地区調査の成果	6
1 遺構	6
2 遺物	24
IV 西尾崎1地区調査の成果	37
1 遺構	37
2 遺物	47
V まとめ	51
付編 下津令遺跡発掘調査に伴う放射性炭素年代測定	53

挿図目次

第1図	下津令遺跡の位置と周辺の遺跡	1	第18図	出土遺物実測図(1)	25
第2図	遺跡周辺図	5	第19図	出土遺物実測図(2)	26
沖ノ下1地区			第20図	出土遺物実測図(3)	27
第3図	沖ノ下1地区遺構配置図	7・8	第21図	出土遺物実測図(4)	28
第4図	S I 101 実測図	9	第22図	出土遺物実測図(5)	30
第5図	S I 101 炉・S X 101・S I 102 ・S I 102 カマド実測図	10	第23図	出土遺物実測図(6)	31
第6図	S I 103・S X 102 実測図	11	西尾崎1地区		
第7図	S B 102・103・110 実測図	13	第25図	西尾崎1地区遺構配置図	38
第8図	S B 108・112 実測図	14	第26図	西尾崎1地区土層断面図	39
第9図	S B 115 実測図	15	第27図	S B 201・202 実測図	40
第10図	S K 113・123 実測図	16	第28図	S B 205・206・207 実測図	41
第11図	S K 131・134 実測図	17	第29図	S K 201・204・S D 207 実測図	42
第12図	S K 148・150・151 実測図	18	第30図	S P 2110(S B 201)・2063(S B 202) ・2048(S B 205)・2003 実測図	44
第13図	S E 101・S D 102 実測図	19	第31図	S P 2023・2030・2033・2092 ・2122 実測図	45
第14図	S D 108・109 実測図	20	第32図	S P 2124・2135 実測図	46
第15図	S P 1074(S B 110)・1072(S B 112) ・1001 実測図	21	第33図	出土遺物実測図(1)	48
第16図	S P 1017・1039・1041・1042 ・1052 実測図	22	第34図	出土遺物実測図(2)	49
第17図	S P 1056・1078 実測図	23			

表目次

沖ノ下1地区

第1表	掘立柱建物跡一覧表	23
第2表	出土土器・土製品観察一覧表	33
第3表	出土石器・石製品観察一覧表	36
第4表	出土金属製品観察一覧表	36

西尾崎1地区

第5表	掘立柱建物跡一覧表	46
第6表	出土土器・土製品観察一覧表	50

図版目次

沖ノ下 1 地区

- 図版 1 調査前遠景(北から)
調査区全景(東から)
図版 2 調査区近景
図版 3 S I 101 上層床面完掘(北東から)
S I 101 下層床面遺物出土状況(北東から)
図版 4 S I 101 炉 遺物出土状況(南東から)
S X 101 検出状況(東から)
図版 5 S I 102 遺物出土状況(南から)
S I 102 カマド 検出状況(西から)
図版 6 S I 103 完掘(南西から)
S X 102 検出状況(南西から)

図版 7 S B 102 完掘(南東から)

図版 8 S B 103 完掘(南東から)

図版 9 S B 115 完掘(東から)

図版 10 S K 113 遺物出土状況(北から)

図版 11 S D 108・109 遺物出土状況(南西から)

図版 12 S E 101 完掘(南から)

図版 13 S P 1074(S B 110) 遺物出土状況

S P 1072(S B 112) 遺物出土状況

S P 1017 遺物出土状況

S P 1039 遺物出土状況

S P 1041 遺物出土状況

S P 1042 遺物出土状況

S P 1056 遺物出土状況

S P 1078 遺物出土状況

図版14 出土遺物(1)

図版15 出土遺物(2)

図版16 出土遺物(3)

図版17 出土遺物(4)

図版18 出土遺物(5)

図版19 出土遺物(6)

図版20 出土遺物(7)

図版21 出土遺物(8)

図版22 出土遺物(9)

西尾崎 1 地区

図版23 調査前遠景(東から)

調査区全景(北から)

図版24 調査区全景

図版25 調査区北壁

調査区南壁

S B 201 完掘(西から)

図版26 S B 202 完掘(南から)

S B 205 完掘(東から)

図版27 S B 206 完掘(南から)

S B 207 完掘(西から)

S K 201 遺物出土状況(南から)

S K 204 遺物出土状況(東から)

図版28 S D 207 遺物出土状況(西から)

S P 2110(S B 201) 遺物出土状況

S P 2063(S B 202) 遺物出土状況

S P 2048(S B 205) 遺物出土状況

S P 2003 遺物出土状況

S P 2023 遺物出土状況

S P 2030 遺物出土状況

図版29 S P 2033 遺物出土状況

S P 2092 遺物出土状況

S P 2122 遺物出土状況

S P 2124 遺物出土状況

S P 2135 遺物出土状況

図版30 出土遺物(1)

図版31 出土遺物(2)

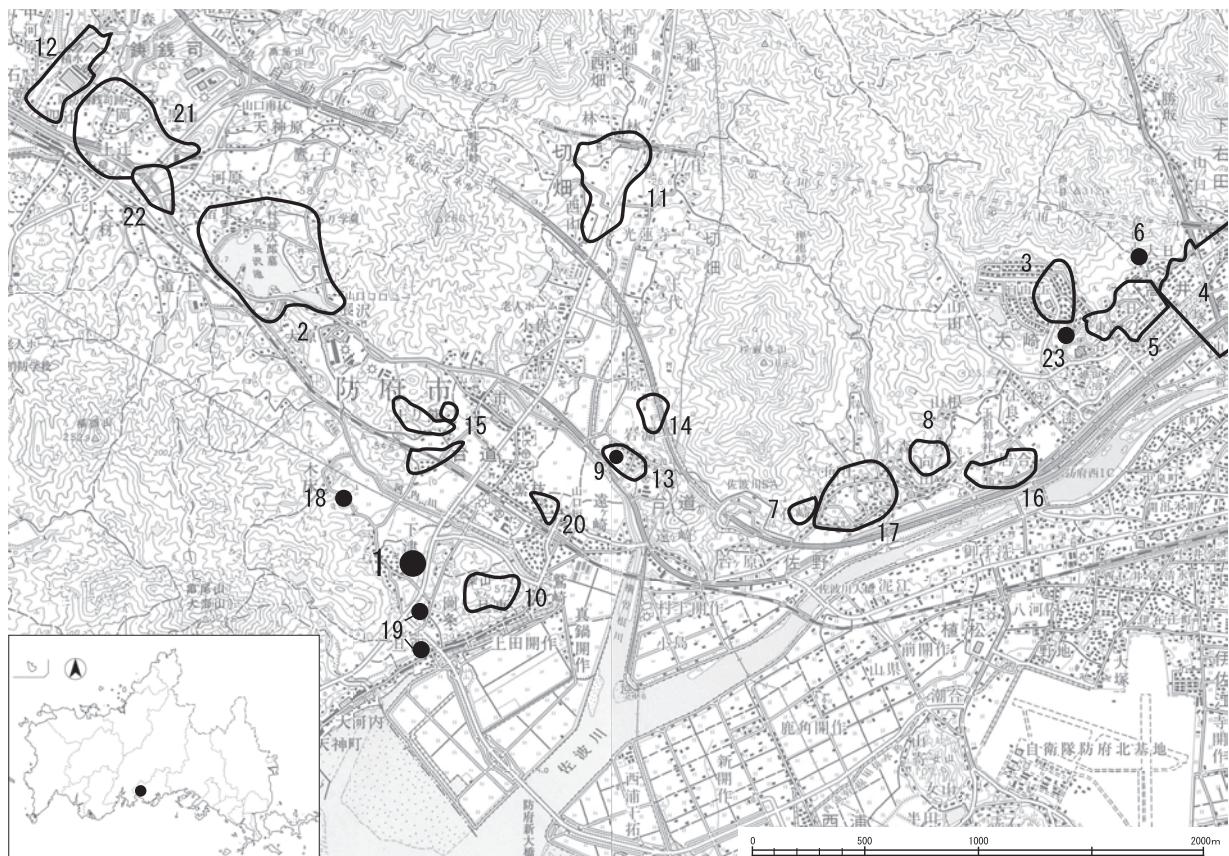
図版32 出土遺物(3)

I 遺跡の位置と環境

下津令遺跡(第1図-1)は、防府市大字台道地内に所在する。南に大海湾を臨む大道地区は、防府平野西端の右田ヶ岳より西側に位置し、東に楞嚴寺山、北に金山・花ヶ岳、西に亀尾山と三方を山に囲まれている。周囲の山々は主に花崗岩質で、風化生成した砂土を河内・横曾根川が流下堆積し沖積平野を形成した。当時の海岸線は「慶長国絵図控図周防国」(宇部市所蔵)をみると、大海湾が入り込み、遺跡の眼前に海が迫っていたことがうかがえる。「下津令」という地名は、「令」と付くため国衙領の系譜かと想定されているが、記録上の初出は室町時代である。応永9年(1402)「曾原左近将監幸範申状」や応永32年(1425)の小俣八幡宮棟札(亡失)の記述では、15世紀頃の下津令は小鯖を本郷とし、北は小俣から南は大海にかけての総名で、現在の下津令より広範囲を指していたとされる。

大道地区周辺では、長沢池遺跡(同2)をはじめ、旧石器・縄文時代に遡って人々の痕跡を確認できるが、明確な遺構は不明である。一方、佐波川下流右岸の奥正権寺遺跡(同3)では、縄文時代晚期の土坑から縄文土器が一括出土している。

大道地区周辺の弥生時代の状況は未だ不明確であるが、縄文時代晚期～近世の複合遺跡である下右田遺跡(同4)では、弥生時代後期の100棟近い堅穴建物跡を含む集落がみつかった。特に、直径約



1 下津令遺跡 2 長沢池遺跡 3 奥正権寺遺跡 4 下右田遺跡 5 大崎遺跡 6 大日古墳 7 佐野峠古墳群 8 向山古墳群
9 岩淵古墳 10 柴山古墳群 11 切畑南遺跡 12 周防鑄銭司遺跡 13 岩淵遺跡 14 原遺跡 15 上り熊遺跡
16 玉祖遺跡 17 佐野窯跡群 18 下山ノ口遺跡 19 旦六百人塚・旦二百人塚 20 台道繁枝砂丘遺跡 21 東禪寺・黒山遺跡
22 今宿遺跡 23 大崎岡古墳

第1図 下津令遺跡の位置と周辺の遺跡

10m を超える全国的にも大規模な竪穴建物跡や環溝の存在、北部九州・四国北西部・山陽東部など各地の要素をもつ土器の出土などから、瀬戸内西部の拠点集落の一つであると考えられている。隣接する大崎遺跡(同 5)では、弥生時代中期の竪穴建物跡や貯蔵穴などがみつかっている。

古墳時代前期になると、下右田遺跡の集落規模は縮小し、防府市域で前中期古墳がほとんどみられない状況と合致する。古墳時代後期以降、佐波川流域に次々に古墳や群集墳が築造される。国指定史跡の大日古墳(同 6)は、石室規格から畿内との強い結びつきをうかがわせる。一方、佐野峠古墳群(同 7)や向山古墳群(同 8)などの群集墳、単独墳の岩淵古墳(同 9)は、両袖式石室や竪穴系横口式石室の系譜をひく石室を有し、九州の影響を受けて展開した可能性が高い。このように、防府は北部九州と畿内の文化が複合する地域といえる。また、少なくとも 12 基の横穴式石室からなる柴山古墳群(同 10)は、大道地区における古墳時代後期的一大群集墳で、当時の墓制を考える上で重要な位置を占める。しかし、これらの古墳や群集墳に対応する当時の集落はまだみつかっていない。

大道地区で大規模な集落跡が確認されるのは古代以降である。大道地区北部に位置する切畠南遺跡(同 11)は、古代から中世の集落遺跡である。調査の結果、平安時代後半(11 世紀)の銅精錬工房と考えられる建物や精錬炉が検出され、同遺跡が銅生産に関わった工人集落の可能性が高いとされる。遺跡北西部に位置する金山を『続日本紀』の「達理山」にあて、金山で産出した銅を切畠で加工し、周防鋳銭司(同 12)に搬送したとする説もある。

大道地区周辺は、古代官道の中で最重要路線の山陽道が横断すると考えられている。中世中期以後になると、大内弘世の山口移鎮に伴い、山口道が整備された。また、地名の「大道」は、豊臣秀吉が文禄元年(1592)からの文禄・慶長の役で防府に宿泊した際、毛利輝元に命じて道路整備させたことからついたとの伝承がある。海上交通では、大海湾が山口方面への運搬物資の荷揚げ港として、瀬戸内諸港や東九州地域との交易拠点であった。このように、中世の下津令は交通の要所、もしくはその近辺に位置する場所であったため、市が置かれた。下津令の市は、近辺に岩淵遺跡(同 13)・原遺跡(同 14)といった瓦質土器生産地や塩田を控え、それに対応した商品を取り扱っていたとされている。

下津令遺跡周辺でも中世になると多くの遺跡が発見される。当時の下津令の一部と考えられる上り熊遺跡(同 15)は、中世主体の集落遺跡である。集落の最盛期と考えられる 15 世紀後半～16 世紀前半代には集落規模の拡大に伴い、大型建物を中核として掘立柱建物の棟方向や墓の頭位規制、土地の区画溝など、組織的統制のとれた集落が継続的に営まれた様子がうかがえる。下右田遺跡(同 4)は、中世村落遺跡としても重要である。平安時代末から室町時代の散村形態から集村形態への変遷が追え、文献資料の少ない中世農村の様相の復元が可能となった。玉祖遺跡(同 16)は特異な遺物が多い。これは、玉祖神社の祭祀や行事に関わる可能性がある。玉祖神社の神事に奉納される土器に佐野焼(同 17)があり、当地域で生産された瓦質土器の系譜を引くため、神事が中世まで遡る可能性があり、民俗学的にも重要である。

引用・参考文献

- 統防府市史刊行会『統防府市史』(1960) 防府市教育委員会『防府市史 上巻』(1956) 防府市史編纂委員会『防府市史 史料 I』(2000)
防府市史編纂委員会『防府市史 通史 I 原始・古代・中世』(2004) 防府市史編纂委員会『防府市史 資料 II 考古資料・文化財編』(2004)
山口県文書館『防長風土注進案』(1964) 山口県埋蔵文化財センター『岩淵遺跡』(2001) 山口県埋蔵文化財センター『原遺跡』(2001)
山口県埋蔵文化財センター『上り熊遺跡 I』(2008) 山口県埋蔵文化財センター『上り熊遺跡 II』(2009)
山口県埋蔵文化財センター『上り熊遺跡 III』(2010)

II 調査に至る経緯と調査の概要

山口県教育委員会では各種開発に伴う工事から埋蔵文化財を保護するため、関係機関と事前協議を行い、現状保存が困難な遺跡については記録保存を目的とした事前の発掘調査を実施している。防府市大字台道における農地整備事業(経営体育成型)下津令地区工事においても対象地内における埋蔵文化財の有無を確認するため、山口県教育委員会は平成22年に試掘調査を行った。調査の結果、土坑や柱穴等の遺構や土師器や須恵器等の遺物が見つかり、広範囲におよぶ集落跡が確認された。

これを受け、山口県教育委員会と事業主体である山口県山口農林事務所の協議の結果、埋蔵文化財包蔵地のうち、工事のため現状保存が困難な範囲約29,000m²を3カ年かけて発掘調査することとなった。初年度の平成25年度は、そのうちの沖ノ下地区とそこから北西へ約350m隔てた西尾崎地区の各一部、3,956m²を対象として、山口県山口農林事務所から委託を受けた山口県ひとつづくり財団と防府市教育委員会が発掘調査を実施することとなった。なお、調査区は今後の調査地区的拡大を考慮し、沖ノ下1地区、西尾崎1地区と呼ぶこととした。

現地調査を始めるにあたって、調査対象地区の現況確認や関連資料調査等を行った上で、山口県山口農林事務所、大道土地改良区等との打ち合わせを行うとともに、近隣の小・中学校、警察署、消防署、自治会等に調査期間中における安全確保のための理解と協力を要請した。

4月30日に重機による表土除去作業を沖ノ下1地区から開始し、5月8日には現地調査事務所を設置した。また5月9日には発掘作業員説明会を実施し、作業内容の確認や安全管理等について周知徹底を図った。

その後5月16日より作業員による本格的な遺構検出作業に入った。その結果、西尾崎1地区の一部(450m²)では当初の遺構面よりさらに15~25cm下層に遺構が確認されたため、上層遺構面完掘後の写真撮影、グリッド実測等による記録保存終了後、再度重機による表土除去を行うこととなった。6月3日からは遺構の実測図作成の基準となる国土座標杭を設置した。



重機による表土除去



遺構の掘り込み

6月下旬に始めた沖ノ下1地区の遺構掘り込み作業は、遺構密度が高く、遺物包含層の下から上下2段の床面をもつ堅穴建物がみつかるなど規模も比較的大きなものが多かったため、作業に時間を費やすこととなった。みつかった堅穴建物のうち1棟はカマドをもつ住居としては県内でももっとも古い時期のものとみられるため、これを検証する目的で当該遺構等の炭化物を採取し、放射性炭素年代測定を実施した。(鑑定結果については付編参照)。

7月下旬から8月にかけては連日猛暑に見舞われたが、調査は順調に進み、その進展に従い隨時調査員が各遺構の実測図作成および記録写真撮影等を行った。

調査期間中の8月28日には白石中学校2年生の職場体験学習を受け入れ、遺跡見学と発掘体験を行った。どの生徒も真剣に土器を探し、厳しい暑さの中懸命に作業に取り組んでいた。

9月初めは連日の雨天により作業を休止する日が続いたが、9月10日から西尾崎1地区の遺構掘り込み作業に入った。西尾崎1地区は小規模な遺構が多く、ほぼ予定通りに作業を進めることができた。上層遺構面の記録保存の終了した9月26日には再度重機による表土除去を行い、下層遺構面の遺構検出、遺構掘り込みを行った。

遺構の全容が判明した10月半ばに空中写真撮影・空中写真測量を予定していたが、季節外れの台風が10月に多く接近したこともあり、予定を延期し10月22日に実施した。

その後、それまでの調査で得られた成果を公開する目的で、10月26日に現地説明会を行った。説明会では遺跡の内部を公開するとともに出土品を展示し、調査員が解説した。地元の方々を中心に約80名の参加があり、盛会のうちに終了することができた。

10月31日をもって、最終的な図面の確認や補足作業、安全確保のための簡易な埋め戻し等を全て終え、さらに11月6日には調査事務所の撤去等を行い、5か月半におよぶ現地調査を無事終了した。

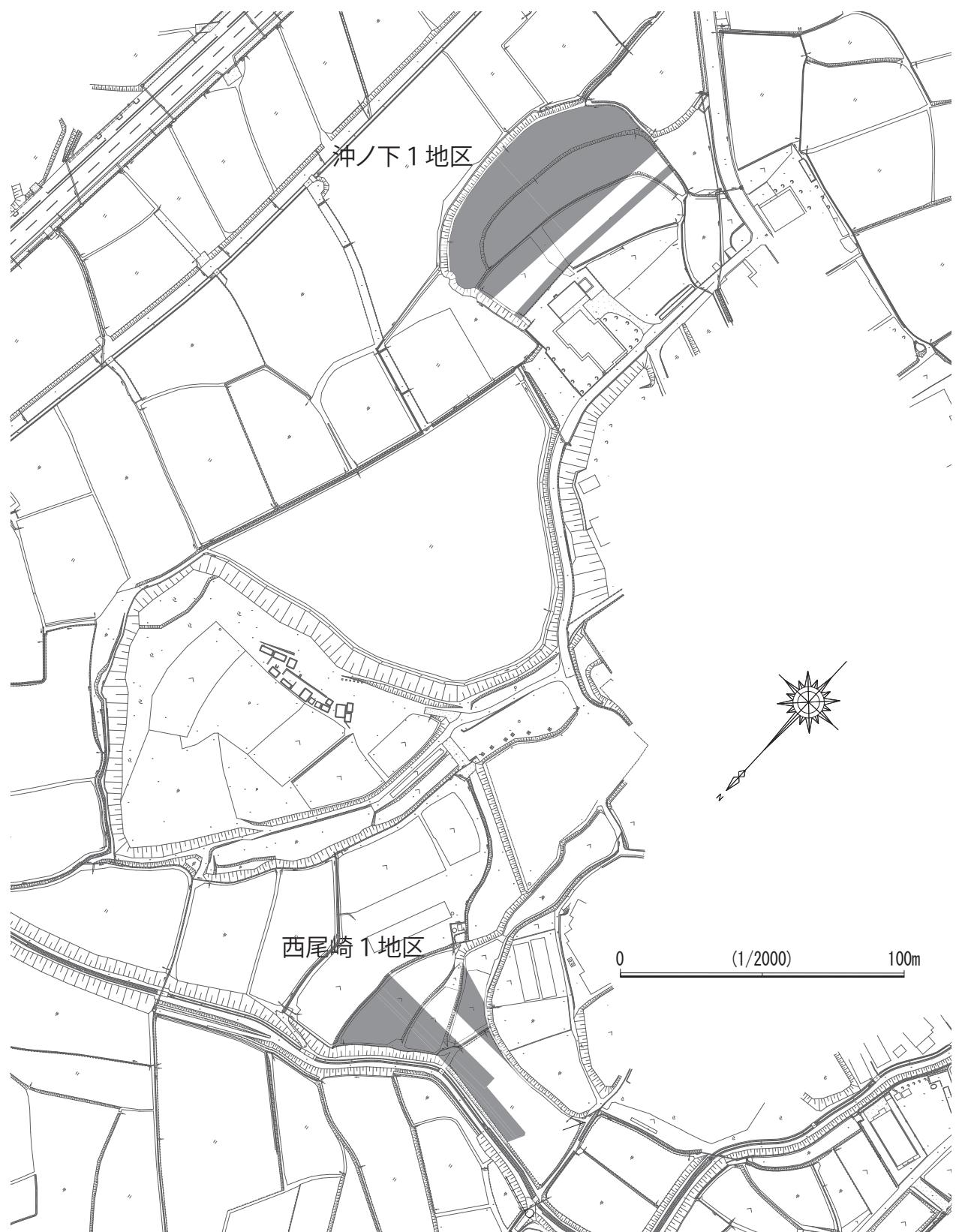
現地作業終了後はかねてから進めていた記録類の整理に本格的に着手し、調査資料の整理・検討を行い、出土遺物の実測図作成および写真撮影を行った。合わせて挿図・写真図版の作成、原稿執筆等の作業を続け、この報告書を刊行するに至った。



空中写真撮影・測量



現地説明会



第2図 遺跡周辺図

III 沖ノ下1地区調査の成果

1 遺構

沖ノ下地区は西側から緩やかに伸びる丘陵の先端部分、標高約4.4～5.6mに立地する。今回の調査では、堅穴建物跡3棟、掘立柱建物跡15棟、土坑23基、井戸1基、溝15条、性格不明遺構2基、柱穴約1090個を検出した。遺構の密度は調査区の西側が高く、標高が約1m低くなる東側は水田造成時に削平を受けたと考えられ、希薄となる。調査区南東部の一部を黒褐色粘質土の遺物包含層が覆い、その直下から2棟の堅穴建物跡が検出された。この遺物包含層からは、須恵器杯や土師器杯などが出士した。以下、主な遺構について取り上げる。

(1)堅穴建物跡

今回検出された堅穴建物跡3棟はいずれも南半部に位置し、平面形は方形である。屋外に周溝を伴う建物跡が1棟とカマドを付設する建物跡が1棟ある。

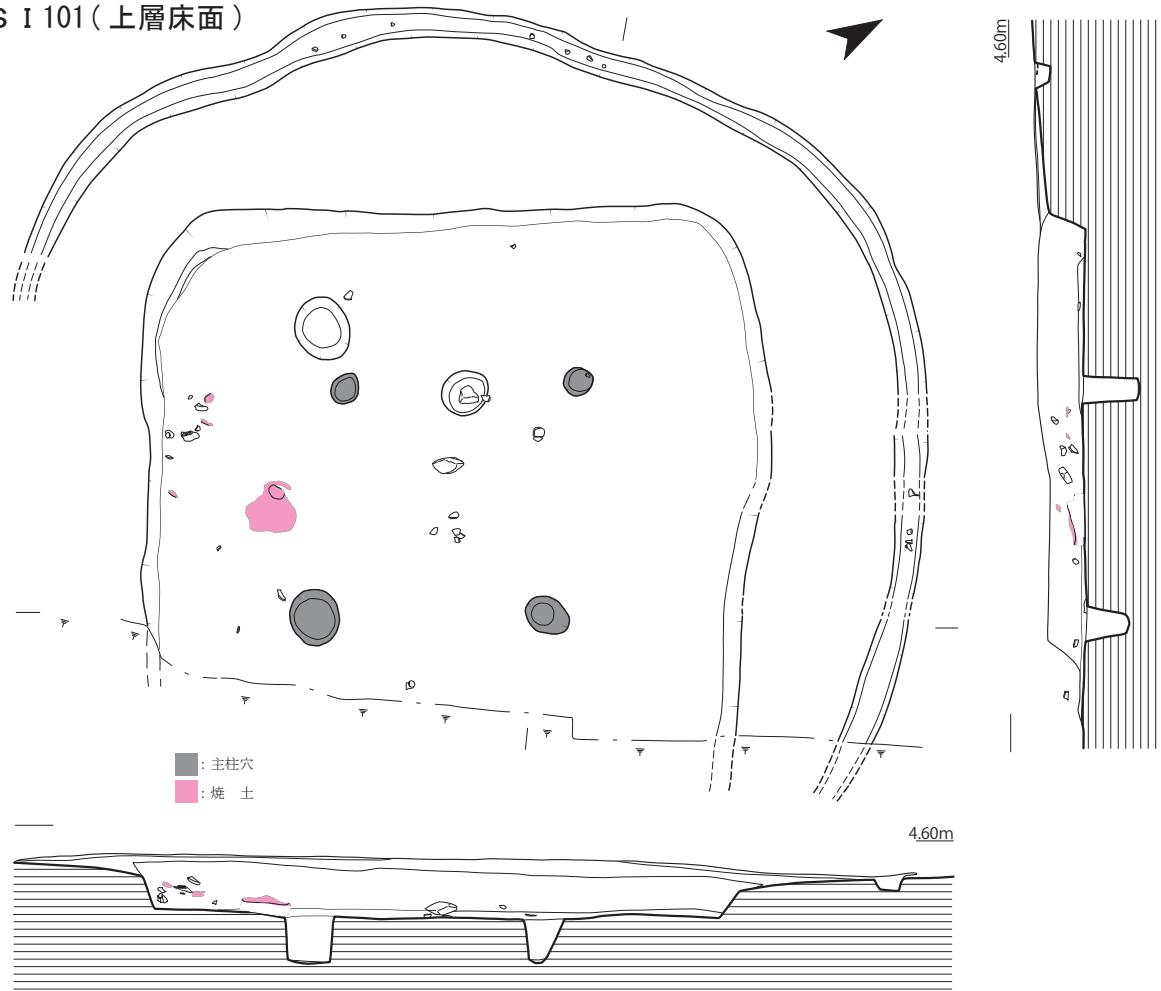
S I 101(第4図 図版3・4) 南東端部に位置する、屋外周溝をもつ方形の建物跡である。一边の長さは南北方向が4.9mであるが、東西方向は東側が削平されているため不明である。主柱穴は4本。柱穴の検出状況などから上下2面の床面を確認できた。北東側の残存する壁高は上層床面で22cm、下層床面はさらに21cm下がる。下層床面をもつ建物が廃絶された後、上層床面を40cm程度北東側へ拡張し、建物を再構築したと考えられる。出土遺物の特徴などからこの2つの建物の存立時期に大きな差はないと考えられる。残存する屋外周溝は幅9～15cm、深さ7～16cmで、南側では確認できなかった。建物中央に長軸82cm、短軸45cm、深さ16cmの炉があり、土師器甕(1・2)が出土した。また上層埋土中から土師器壺(3・12・17)、甕(10)、高杯(7)、鉢(8)、下層床面から土師器壺(4)、甕(11・14・15)、高杯(18)等が出土した。また屋外周溝から高杯(6)が出土した。出土遺物から古墳時代前期の建物と考えられる。

S X 101(第5図 図版4) S I 101内の南西側壁面付近に位置する性格不明遺構である。S X 101中央の直径約60cmの円内は橙色または黄褐色の埋土で覆われ、ほぼ遺物は含まれていなかった。その埋土上、下層床面より34cmの高さに直径35cm、厚さ1～2cmの明赤褐色の炭の混じる焼土が広がっていた。中央の円を取り囲むように幅4～11cm、高さ6～9cmの固く焼き締まった焼土があり、その焼土上を外側へ15～38cmの幅で炭がドーナツ状に覆っていた。遺構の使用目的は不明だが、S I 101の中央に炉があることや建物の存立した時期などからカマドとしての用途をもつものとは考えにくい。また南西側壁面間際まで燃焼の痕跡が残っていることを考えれば、建物としての機能終了後、上部構造物を撤去した上で燃焼させた可能性が高い。放射性炭素年代測定結果からはS I 101とほぼ同時期に存在した遺構である可能性を指摘されている。

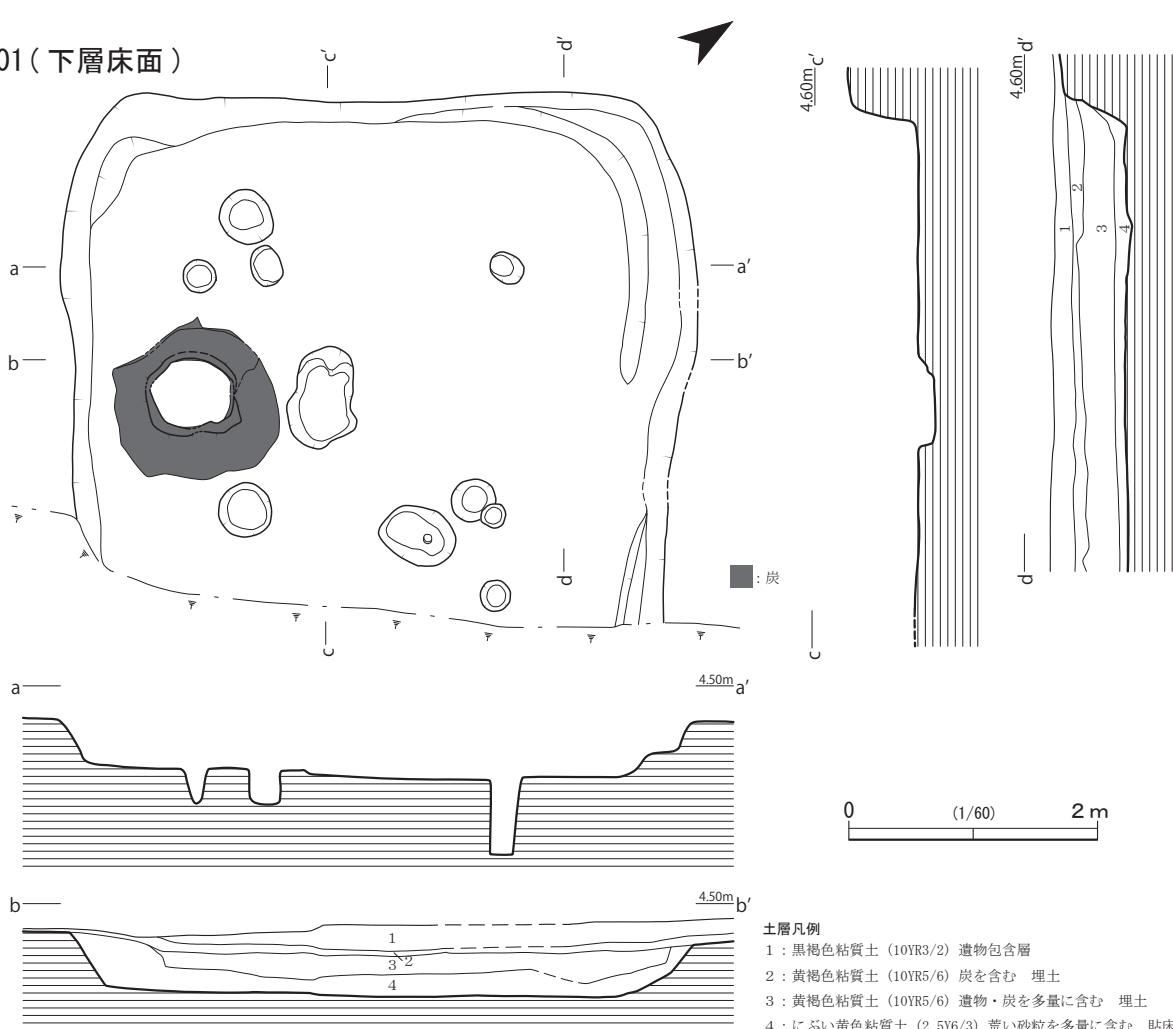
S I 102(第5図 図版5) 南部ほぼ中央に位置する、カマドをもつ方形の建物跡である。東西に4.5m、南北に3.6m、床面積16.2m²を測る。主柱穴は2本。残存壁高は西側で17cmである。壁下の周溝は確認できなかった。建物北側には屋外に1mを超えて伸びる煙道をもつカマドが設置されている。両袖部は赤褐色の粘質土で築かれ、燃焼部に沿って赤く焼け締まり、その焼土中から土師器甕(19)と支



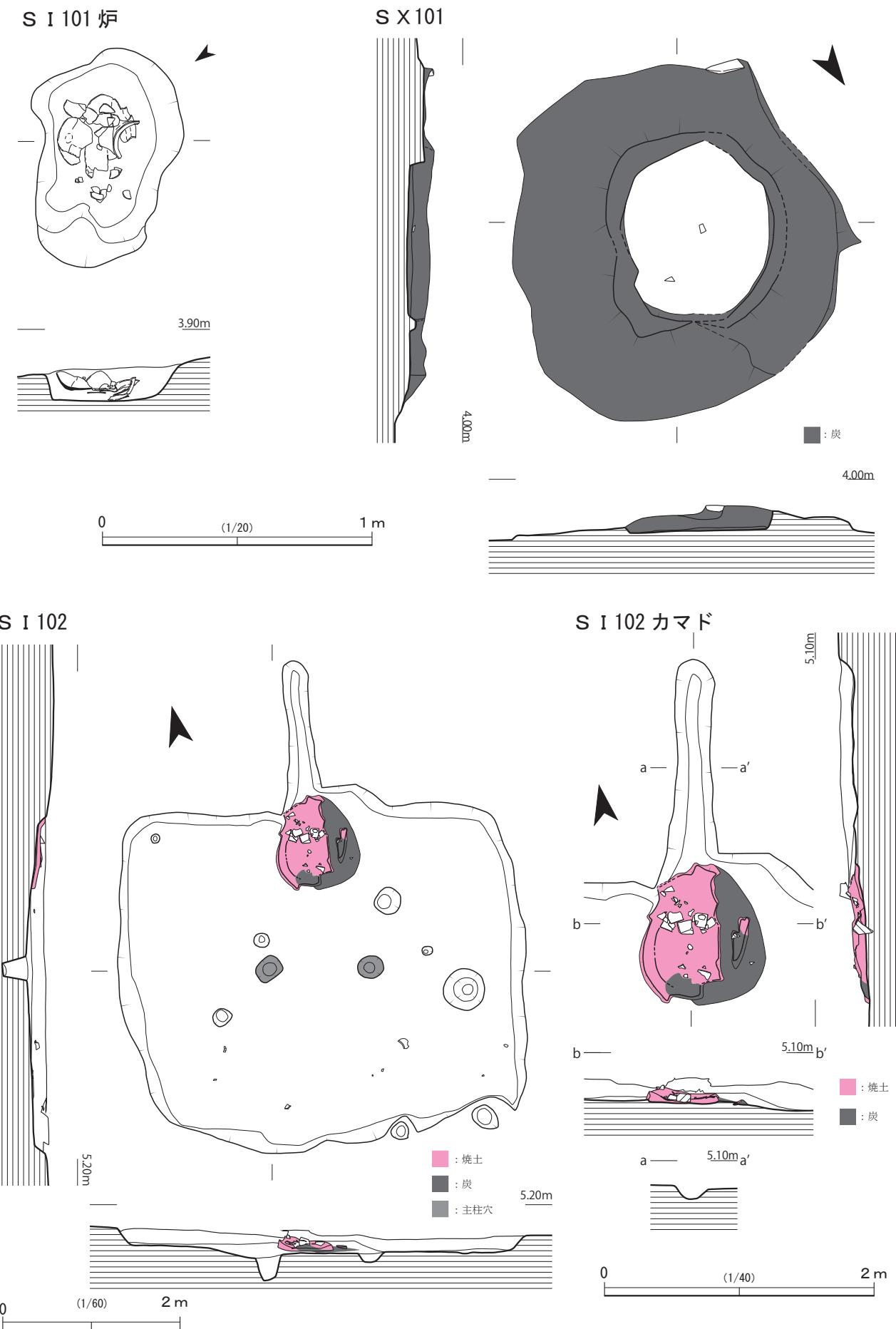
S I 101(上層床面)



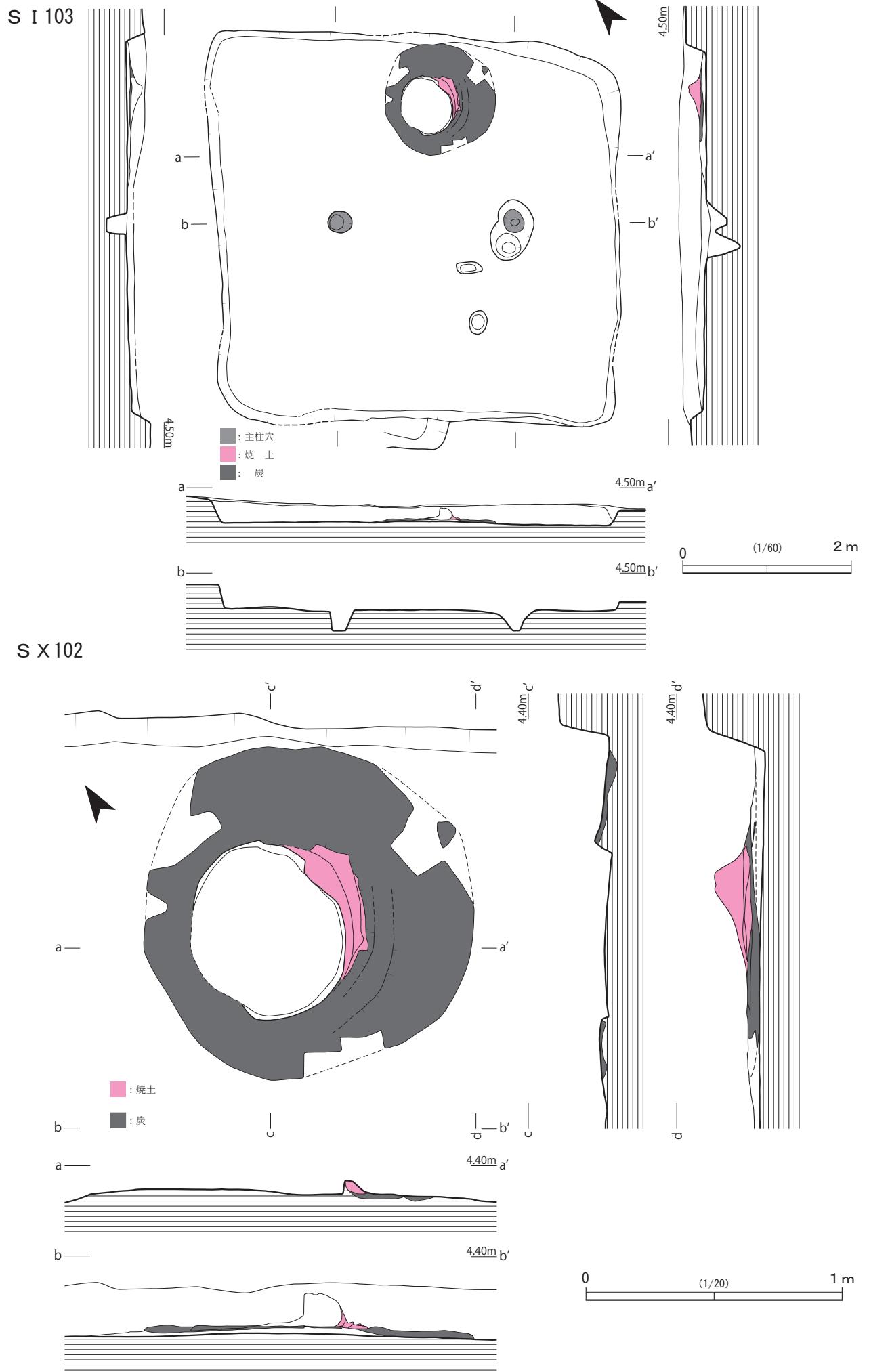
S I 101(下層床面)



第4図 S I 101実測図



第5図 S I 101炉・S X 101・S I 102・S I 102カマド実測図



第6図 S I 103・S X 102実測図

脚と思われる石が出土した。その他の出土遺物には土師器甕(20)、高杯(21)がある。出土遺物や放射性炭素年代測定結果から古墳時代中期の建物と考えられる。

S I 103(第6図 図版6) 南東端部に位置し、S I 101に隣接する方形の建物跡である。東西に4.7m、南北に4.5m、床面積21.2m²を測る。主柱穴は2本。炉跡や屋外周溝などは検出されなかった。残存壁高は北西側で29cmであり、南西側の壁の外側には凹みがあり、出入り口と考えられる。埋土は黄褐色や灰黄褐色の締まった粘質土で構成されている。出土遺物は多くなく、器台(22)、高杯(23・25)などである。出土遺物から、古墳時代前期の建物と考えられる。

S X 102(第6図 図版6) S I 103内の北東側壁面付近に位置する性格不明遺構である。遺構の形状や土層はS X 101とほぼ同じである。S X 102中央の直径約60cmの円内は遺物を含まない黄褐色の埋土で覆われる。その埋土上、床面より21cmの高さに直径26cm、厚さ1~2cmで炭の混じる明赤褐色の焼土が広がっていた。中央の円を取り囲むように底部の最大幅17cm、上部の幅8cm、最大高16cmの固く焼き締まった焼土があり、その焼土上は外側へ15~41cmの幅で炭がドーナツ状に覆っていた。S X 101と同様、炭は北東側壁面近くまで広がっていた。放射性炭素年代測定結果からはS I 103とほぼ同時期に存在した遺構である可能性を指摘されている。

(2)掘立柱建物跡

今回復元できた15棟の掘立柱建物跡の大部分は中央から西側に分布する。棟方向には規則性があり、南北を意識するものと東西を意識するものとに大別できる。

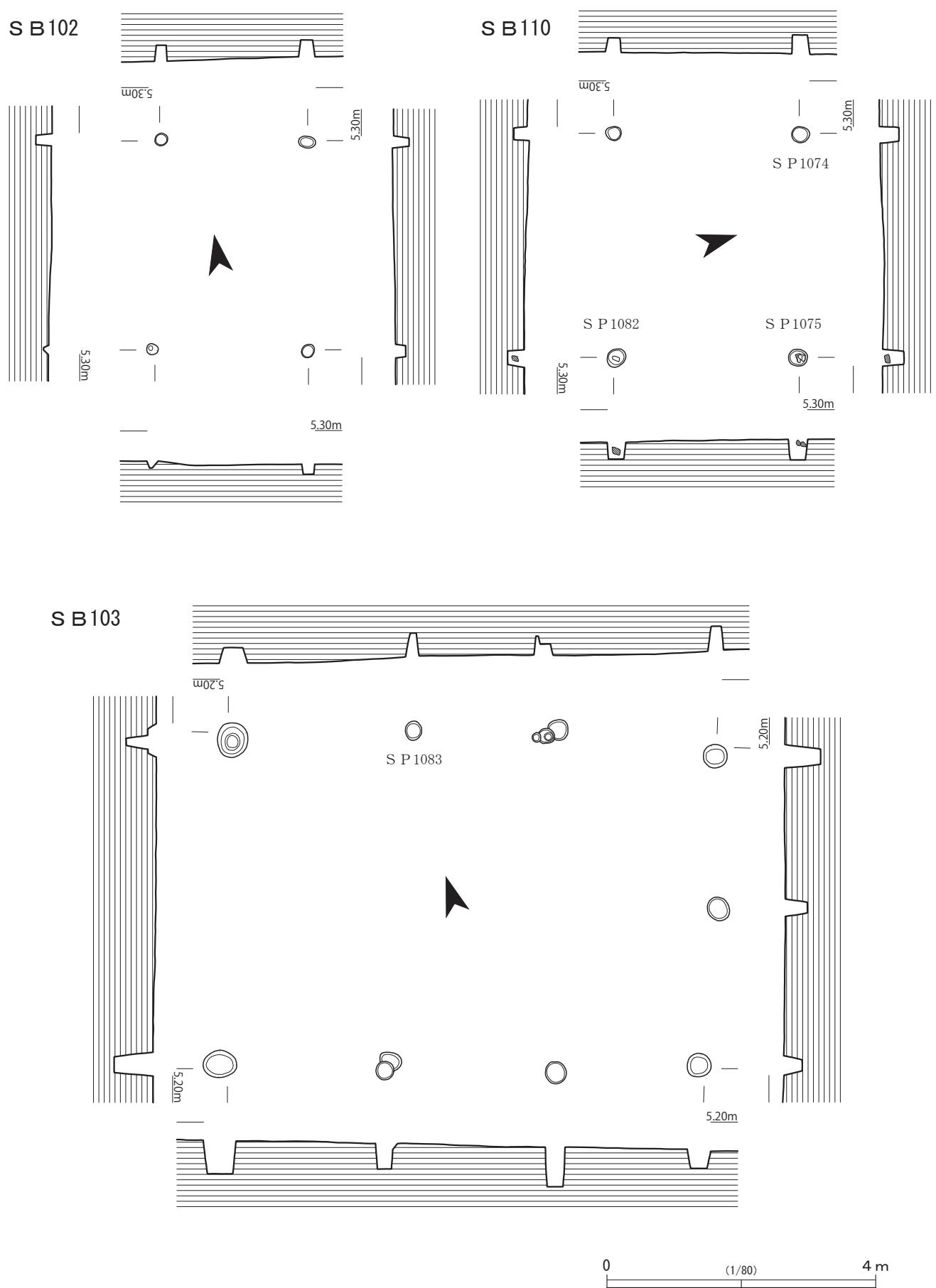
S B 102(第7図 図版7) 南部に位置する建物で、桁行1間(3.1m)×梁行1間(2.3m)、床面積7.13m²を測る。棟方向はN10°Eである。S B 101と重なり、棟方向もほぼ同じことから建て替えが行われた可能性がある。出土遺物はなく、建物の時期は不明である。

S B 103(第7図 図版8) 南部に位置する大型の建物で、S I 102とほぼ重なる。桁行3間(7.1m)×梁行2間(4.6m)、床面積32.66m²を測る。棟方向はN72°Wである。建物を構成するS P 1083から土師器皿(28)、銭貨(27)、また他の構成柱穴から瓦質土器等が出土した。出土遺物から中世後半の建物と考えられる。

S B 110(第7図 図版7) ほぼ中央に位置する建物で、桁行1間(3.3m)×梁行1間(2.7m)、床面積8.91m²を測る。棟方向はN73°Wである。建物を構成するS P 1074から瓦質土器足鍋(29)が出土した。またS P 1075・1082からは建物廃絶後に投棄されたとみられる石が出土した。出土遺物から中世後半の建物と考えられる。

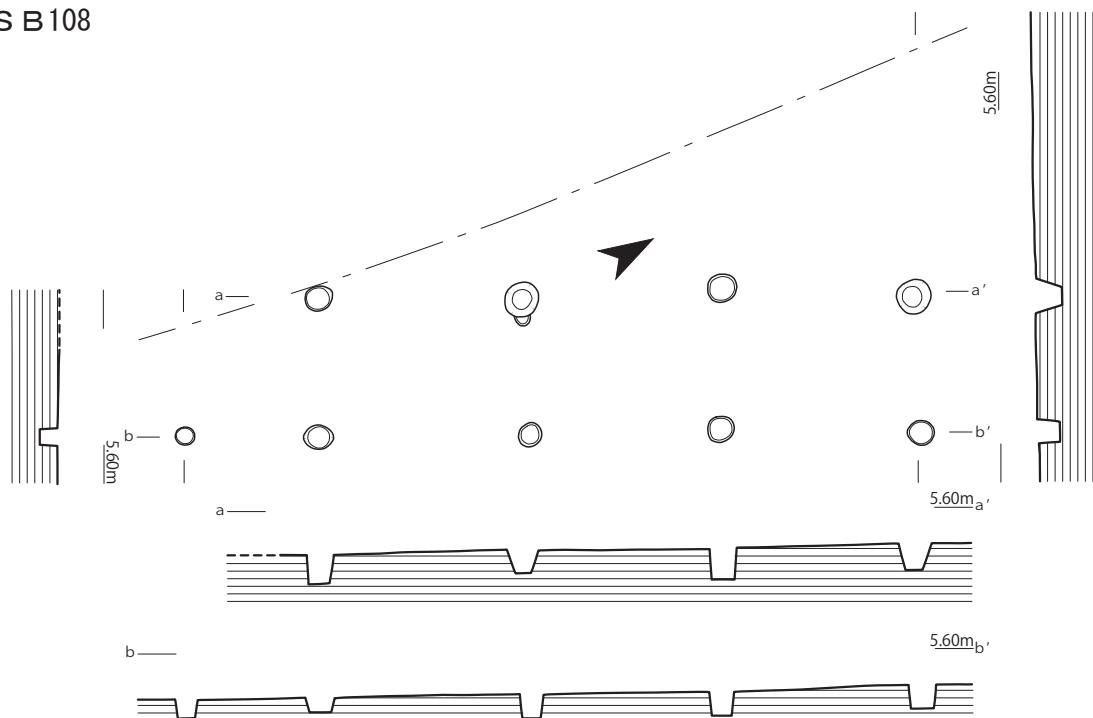
S B 108(第8図 図版8) 西部に位置する建物で、建物の北西側半分以上が調査区外のため、正確な規模は不明だが、桁行3間(6.4m)と考えられる。棟方向はN29°Eである。南西面に廂を付設していたと考えられる。構成柱穴から土師器・須恵器等が出土したが小片のため詳細な年代は不明である。

S B 112(第8図 図版9) 北部に位置する建物で、桁行2間(5.2m)×梁行2間(3.7m)、床面積19.24m²を測る建物である。棟方向はN77°W。東面に廂を付設していたと考えられる。構成柱穴S P 1072から瓦質土器足鍋(26)が出土した。また他の構成柱穴から土師器・鉄製品等が出土した。S P 1076からは自然石が検出され、根固めとして用いられた根石と考えられる。出土遺物から中世後半の建物と考えられる。

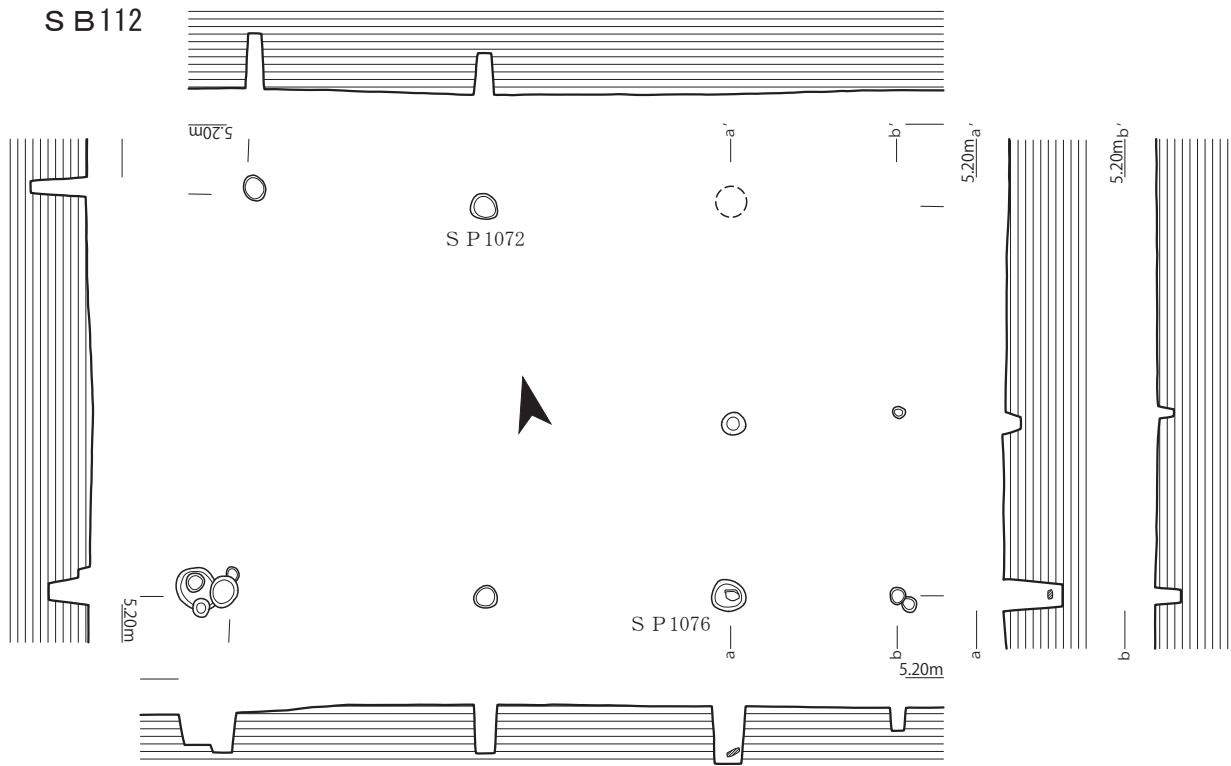


第7図 SB 102・103・110実測図

S B108

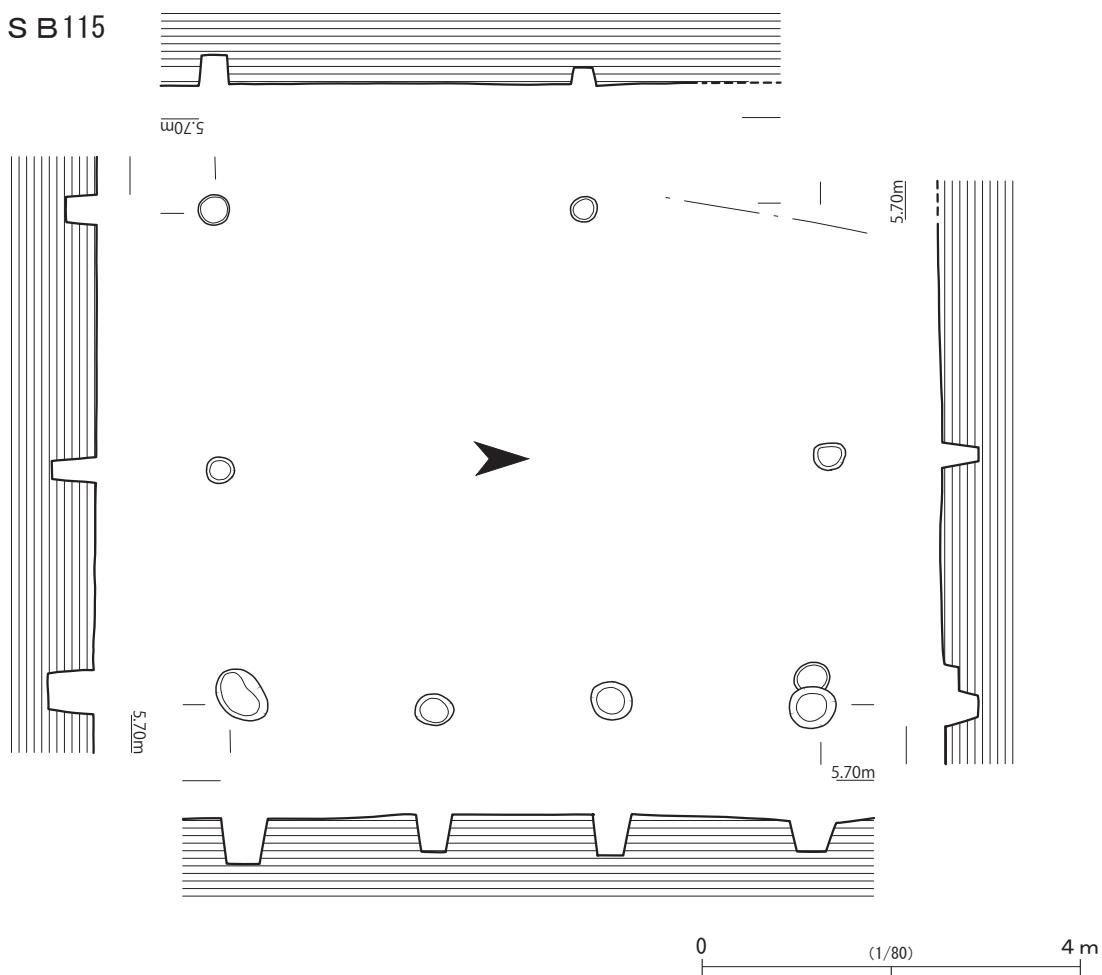


S B112



0 (1/80) 4 m

第8図 S B108・112実測図



第9図 SB115実測図

SB115(第9図 図版9) 北西部に位置する建物で、桁行3間(6.0m)×梁行2間(5.2m)、床面積31.20m²を測る大型の建物である。棟方向はN 1° Wである。構成柱穴 S P 1062から土師器が出土したが、小片のため詳細な年代は不明である。

(3) 土坑

23基の土坑が検出された。南部と東部に少なく、中央部や北西部に多い。深さが20～30cm程度のものが中心だが、北西部では比較的大型のものが多い。以下、主なものについて取り上げる。

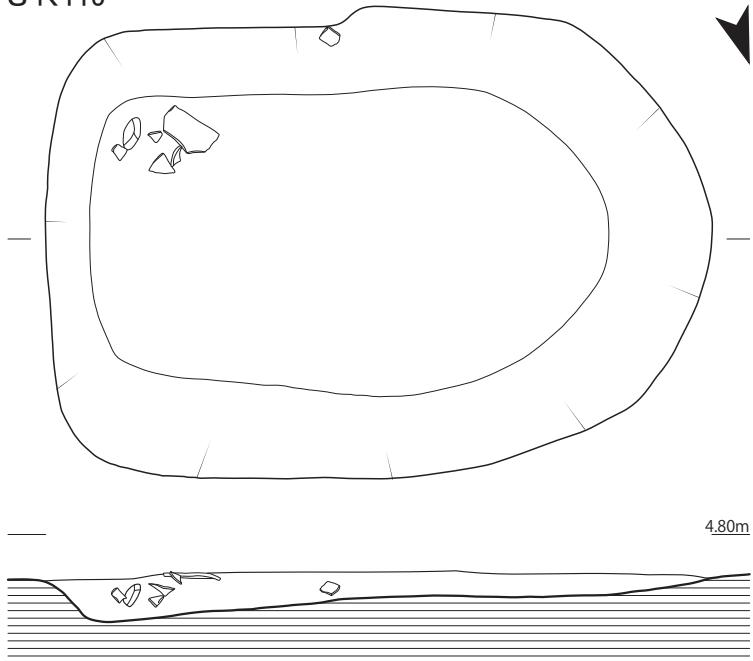
SK113(第10図 図版10) 中央部に位置し、平面形は不整長円形を呈する。規模は長軸175cm、短軸123cm、深さ11cmを測る。管状土錐(44)や瓦質土器が出土しており、これらの遺物から15世紀後半～16世紀前半の遺構であると考えられる。

SK123(第10図 図版9) 中央部やや北よりに位置し、平面形は方形を呈する。規模は長軸181cm、短軸167cm、深さ23cmを測る。埋土中から瓦質土器足鍋(37・38)、鉢(39)、擂鉢(40)が出土した。出土遺物から15世紀後半～16世紀に比定される。

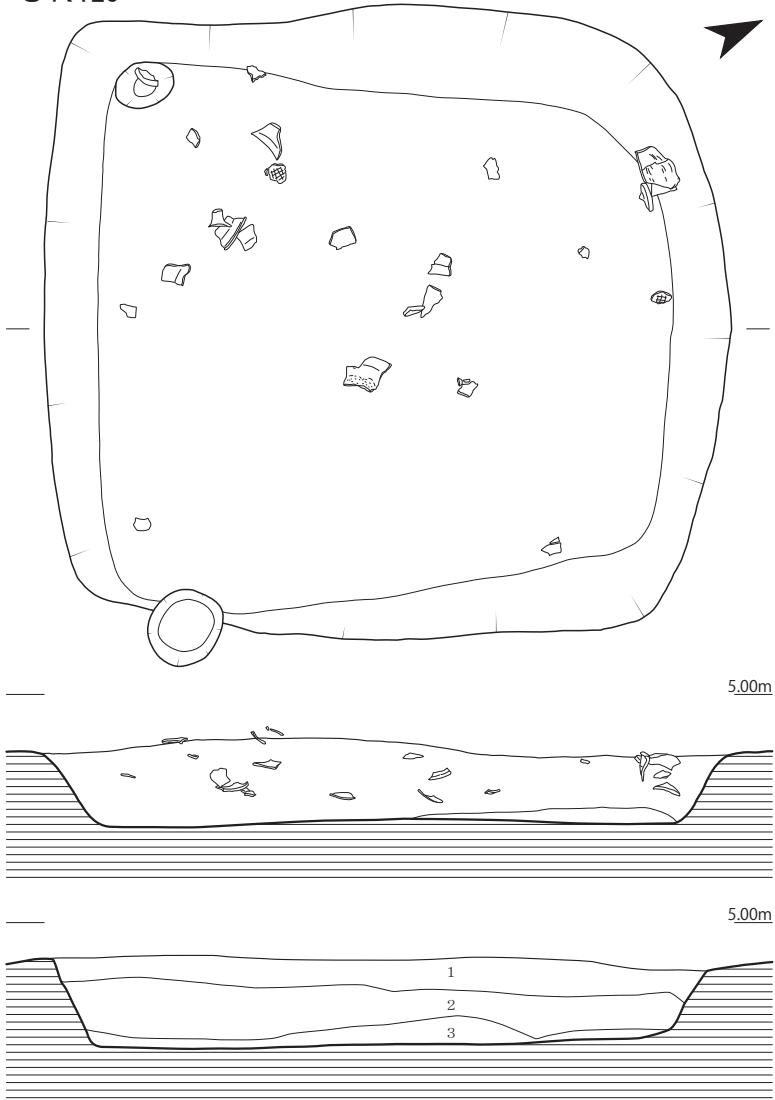
SK131(第11図 図版10) 北部に位置し、平面形は不整方形を呈する。規模は長軸178cm、短軸129cm、深さ27cmを測る。遺構の北半側に粘土層が認められ、投棄されたと見られる石が出土した。土師器、瓦質土器などの出土遺物から15世紀後半～16世紀前半に比定される。

SK134(第11図 図版10) 北東部に位置し、平面形は不整円形を呈する。規模は長軸416cm、短軸334

SK113



SK123

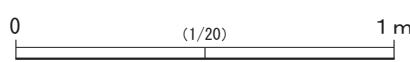


土層凡例

1：にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）マンガンを多量に含む

2：褐色粘質土（10YR4/6）マンガンを多量に含む

3：黄褐色粘質土（10YR5/8）



第10図 SK113・123実測図

cm、深さ68cmを測り、今回の調査で検出された29基の土坑の中では最大規模である。出土遺物として土師器、瓦質土器、須恵器があり、中世後半期の遺構であると考えられる。

SK148(第12図 図版10) 北部に位置し、平面形は不整円形を呈する。規模は長軸132cm、短軸103cm、深さ62cmを測る。SD108を切ることから、SD108よりも後出の遺構である。底面付近から一部に煤が付着した石が出土した。出土遺物から16世紀後半に比定される。

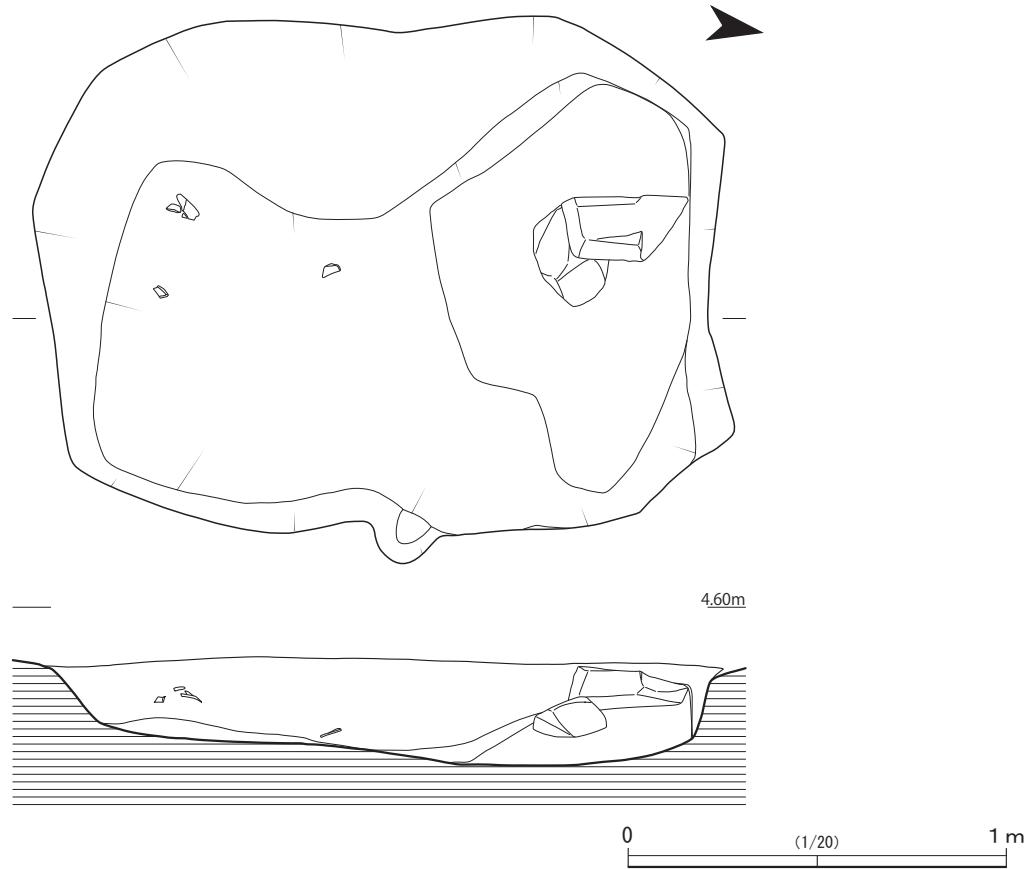
SK150(第12図 図版10) 南西部に位置し、平面形は不整円形を呈する。規模は長軸90cm、短軸63cm、深さ59cmを測る。埋土上位から瓦質土器足鍋(43)が出土した。出土遺物から16世紀後半の遺構であると考えられる。

SK151(第12図 図版10) 南西部に位置する。遺構の東側は調査区外にあるが、平面形は隅丸方形の遺構であると推定される。規模は短軸141cm、深さ23cmで、残存する長軸は147cmを測る。出土した遺物から判断して中世後半期のものと考えられる。

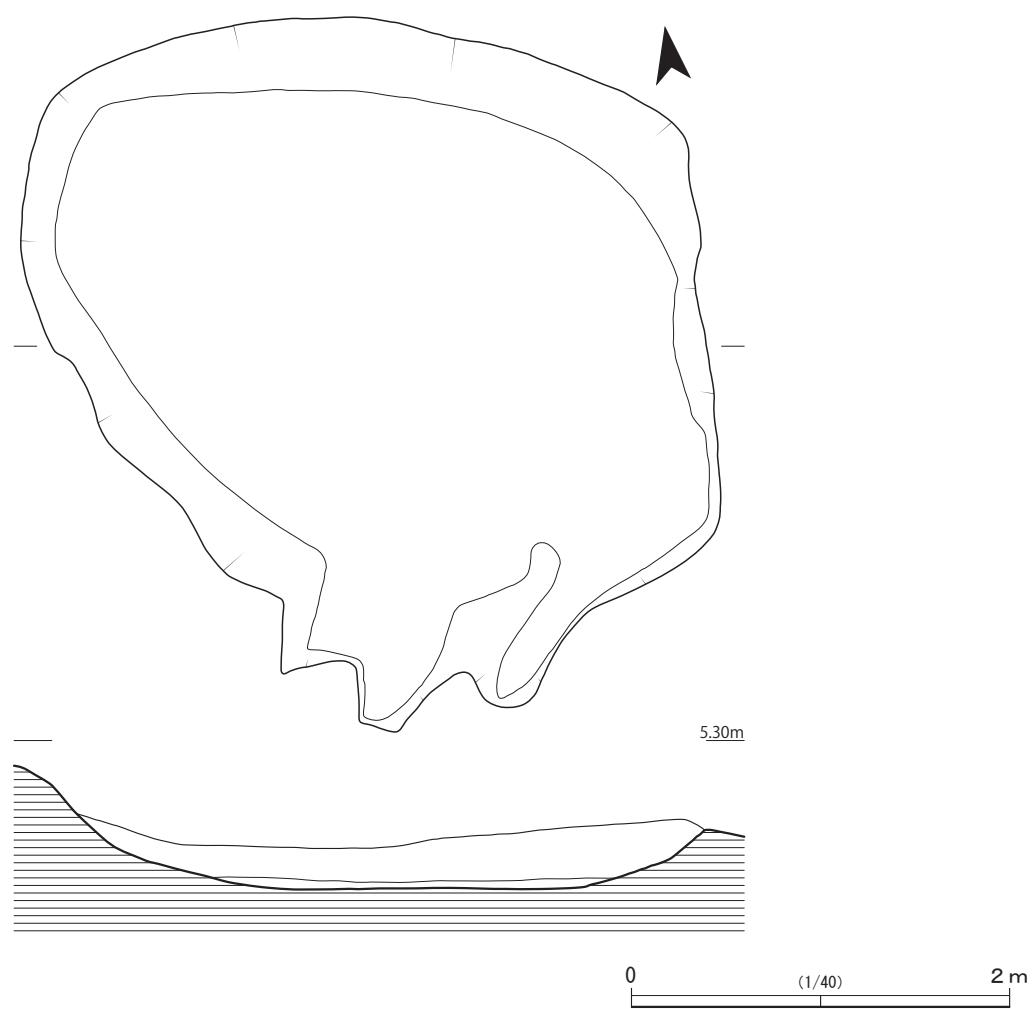
(4)井戸

SE101(第13図 図版12) 西部に位置する素掘りの井戸である。平面形は、長軸124cm、短軸110cmの橢円形を呈する。深さ148cmで湧水のため作業の安全上掘り込みを中止した。土層は7層に分けられ、木枠の痕跡などは認められない。出土遺物として瓦質土器鍋(46・50・51)、鉢(47)、火鉢(48・49)、石臼(52)があり、16世紀代に比定される。

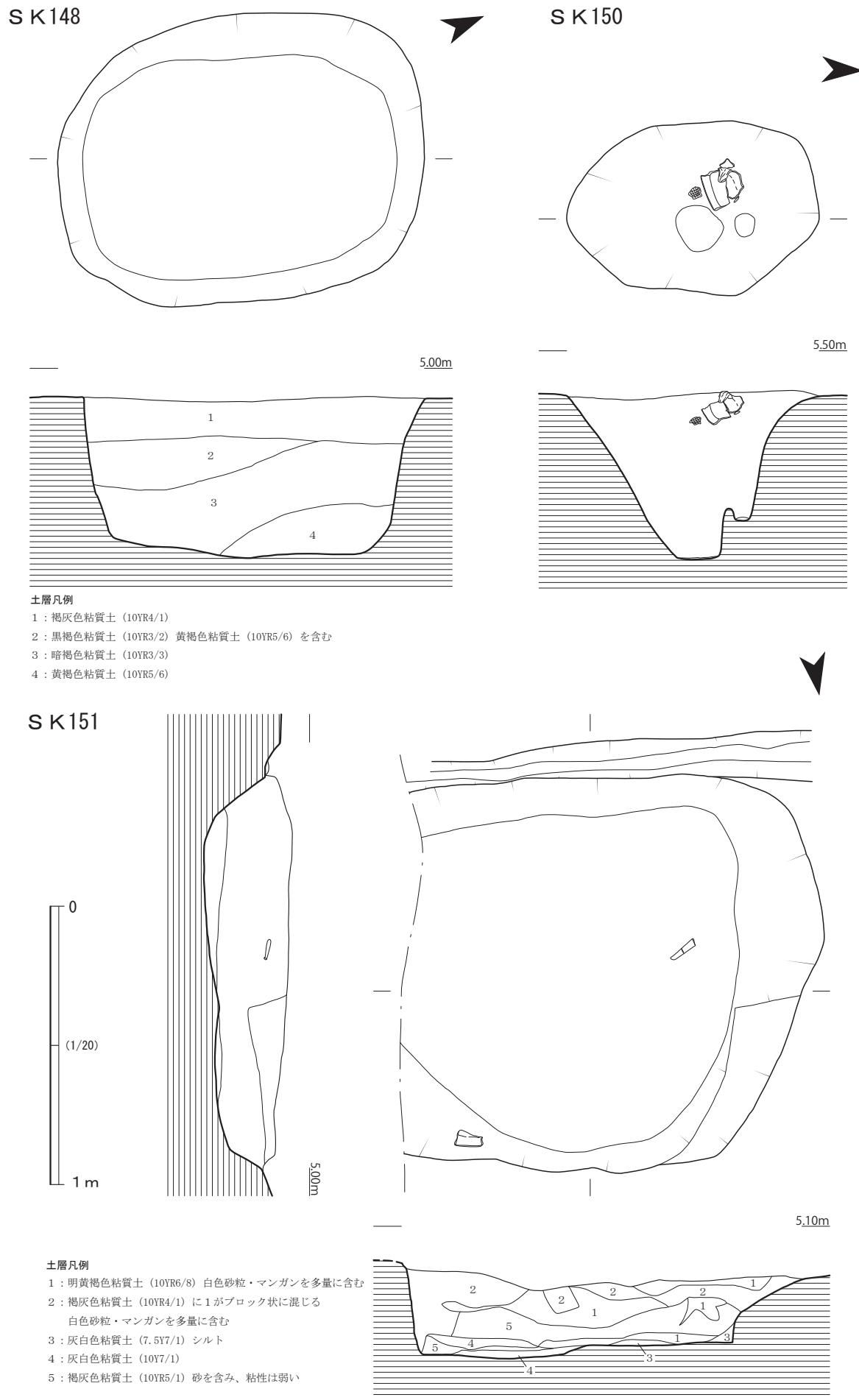
SK131



SK134



第11図 SK131・134実測図



第12図 SK 148・150・151実測図

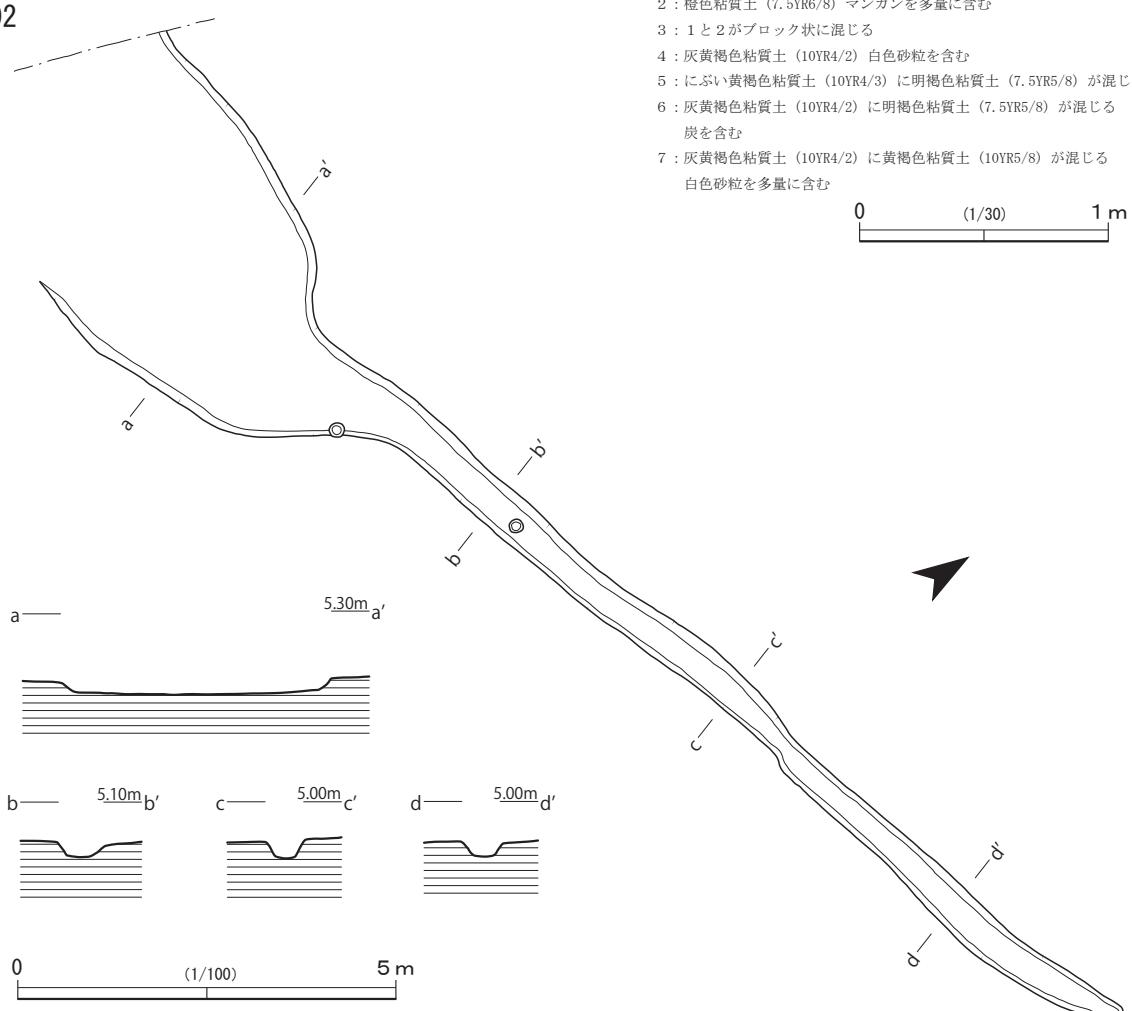
(5) 溝

15条の溝が検出された。溝が集中する中央部には、掘立柱建物跡が比較的多く確認されており、溝と当時の人々の生活との深い関わりが考えられる。

S D 102(第13図 図版10) 南部に位置し、西から東へ走行する。確認長は17.37m、幅0.52～3.49m、深さ11～20cmである。埋土中から瓦質土器足鍋(53)が出土した。出土遺物から15世紀代の遺構とみられる。

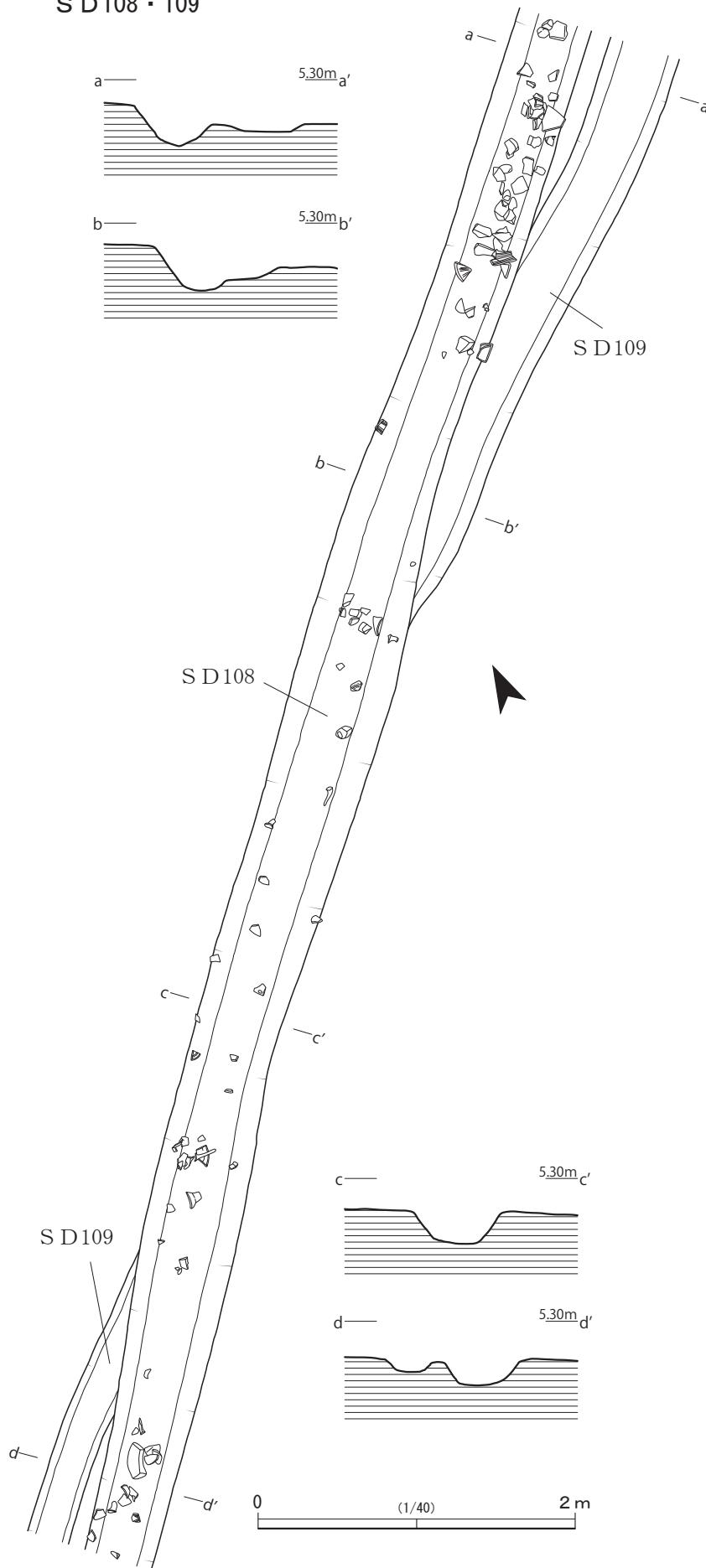
S D 108(第14図 図版11) 中央部を南北に縦断し、下流の北側で東に曲がって流れる溝である。確認長は約90m、幅37～55cm、深さ4～28cmである。埋土中から瓦質土器鍋(60・61・62・64・65・66・68・69)、足鍋(63・67・70・71・72)、擂鉢(73・74・75・76・77)、蓋(79)、湯釜(80)、甕(82)、鉢(85)、火鉢(86)、青磁碗(78)、管状土錘(81)、土師質土器甕(83)など瓦

S D 102



第13図 S E 101・S D 102実測図

S D 108・109



第14図 S D 108・109実測図

質土器を中心に多数の遺物が出土した。遺物は、溝の南側に集中し、暗褐色粘質土に黄褐色粘質土がブロック状に混じる埋土中から出土した。こうした出土遺物から16世紀後半～17世紀初頭の遺構とみられる。

S D 109(第14図 図版11) 中央部に位置し、S D 108にほぼ並行する形で南北に流れる。確認長は42.5m、幅29～43cm、深さ5～8cmである。S D 108に切られることからS D 108より先行する遺構である。埋土中から瓦質土器鍋(55)、擂鉢(56)、足鍋(57・58)が出土した。出土遺物から16世紀代の遺構であると考えられる。

(6)柱穴

検出された柱穴は1090個あまりで中央部に集中し、南部は比較的少ない。遺物が出土している柱穴は112個である。以下、主なものについて取り上げる。

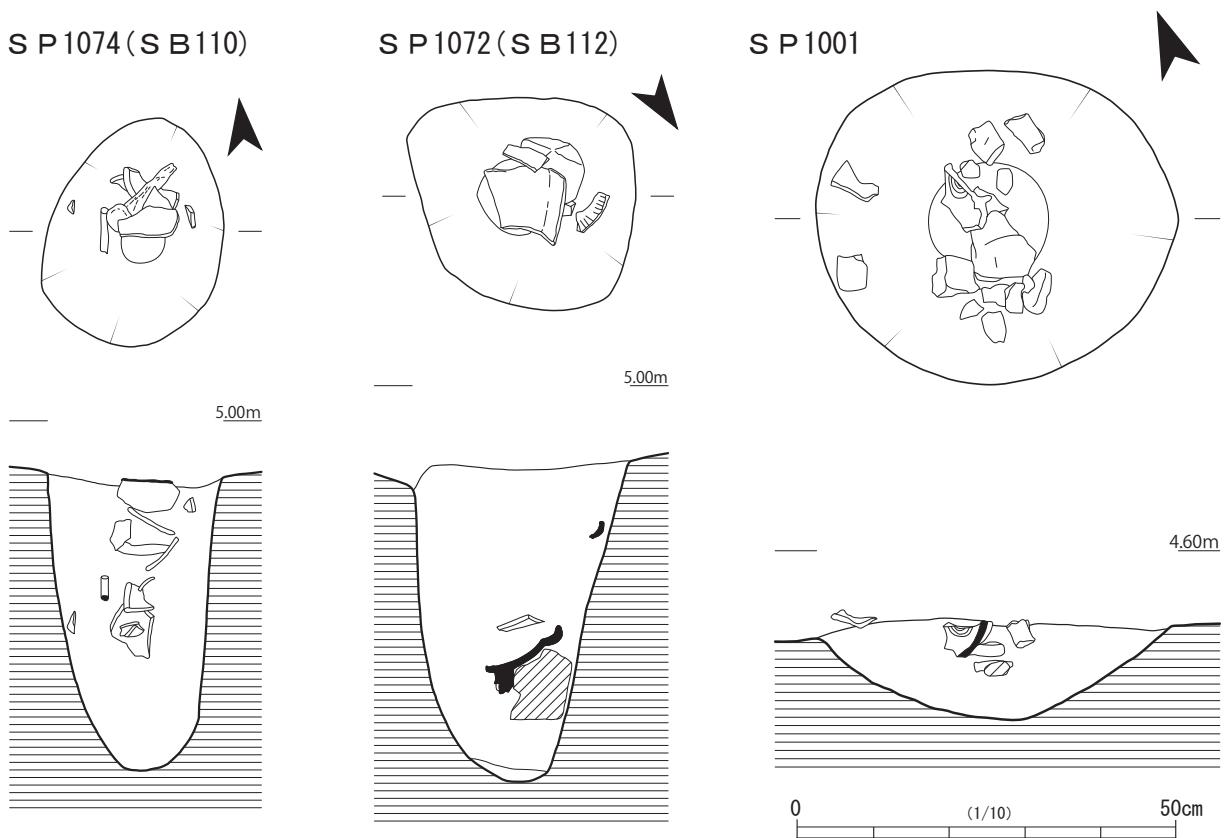
S P 1074(S B 110)(第15図 図版13)

中央部に位置し、S B 110を構成する柱穴の一つである。規模は径23～30cm、深さ38cmを測り、埋土上位で瓦質土器足鍋(29)が出土した。出土遺物から16世紀代の遺構とみられる。

S P 1072(S B 112)(第15図 図版13)

北部に位置し、S B 112を構成する柱穴の一つである。規模は径28～29cm、深さ41cmを測り、埋土中位で瓦質土器足鍋(26)が出土した。出土遺物から15世紀後半～16世紀に比定される。

S P 1001(第15図 図版12) 南部に位置し、規模は径38～44cm、深さ12cmを測る。埋土上位から青磁(88)、管状



第15図 SP 1074(SB 110)・1072(SB 112)・1001実測図

土錐(89)、土師器、瓦質土器などが出土した。出土遺物から15世紀後半～16世紀前半に比定される。

SP 1017(第16図 図版13) 中央部に位置し、規模は径15～17cm、深さ14cmを測る。検出面に近い位置で瓦質土器甕(90)が出土した。出土遺物から15世紀後半の遺構とみられる。

SP 1039(第16図 図版13) 中央部のSB 110内に位置し、規模は径17～20cm、深さ24cmを測る。埋土中位で瓦質土器片が出土した。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

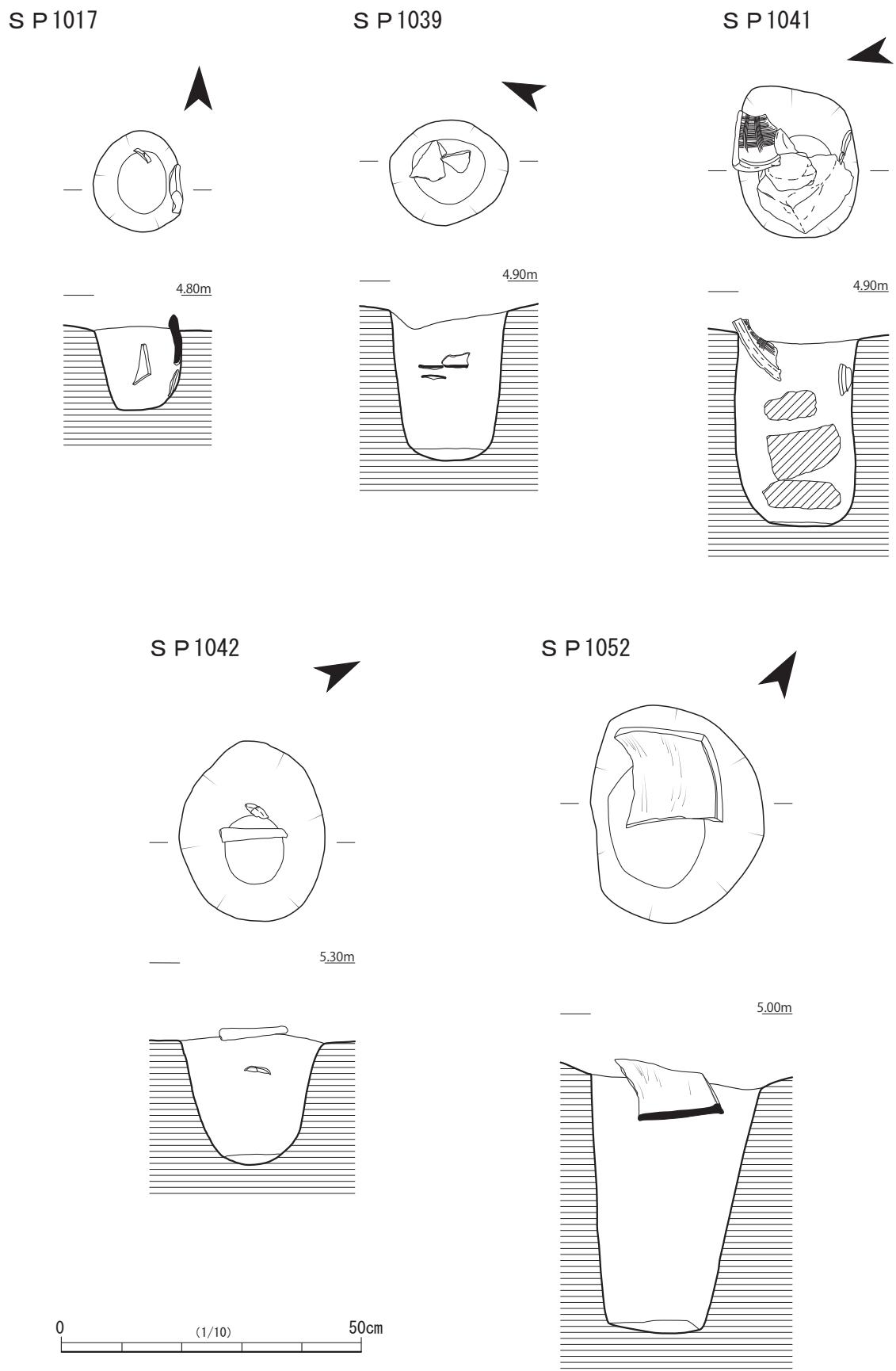
SP 1041(第16図 図版13) 中央部に位置し、規模は径19～25cm、深さ31cmを測る。検出面に近い位置で瓦質土器擂鉢(114)が出土した。出土遺物から17世紀初頭の遺構とみられる。

SP 1042(第16図 図版13) 中央部やや西よりに位置し、規模は径25～29cm、深さ22cmを測る。検出面に近い位置で瓦質土器足鍋、中位から土師器皿が出土した。出土遺物から中世後半期の遺構と考えられる。

SP 1052(第16図) 中央部に位置し、規模は径29～36cm、深さは43cmを測る。検出面に近い位置から瓦質土器甕(115)が出土した。出土遺物から16世紀後半～17世紀初頭に比定される。

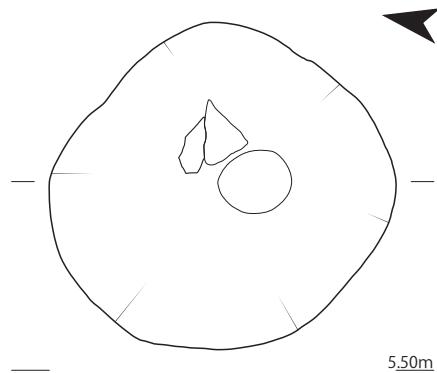
SP 1056(第17図 図版13) 西部に位置し、規模は43～46cm、深さ47cmを測る。埋土中から瓦質土器鍋(113)・土師質土器鉢(112)が出土した。出土遺物から15世紀後半～16世紀前半の遺構と考えられる。

SP 1078(第17図 図版13) SD 108の北側に位置し、平面形は橢円形を呈する。規模は径29～36cm、深さ15cmを測る。埋土中から陶器皿(87)が出土した。出土遺物から16世紀末～17世紀初頭の遺構であると考えられる。

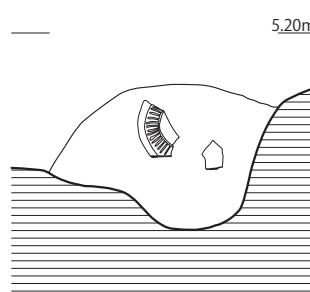
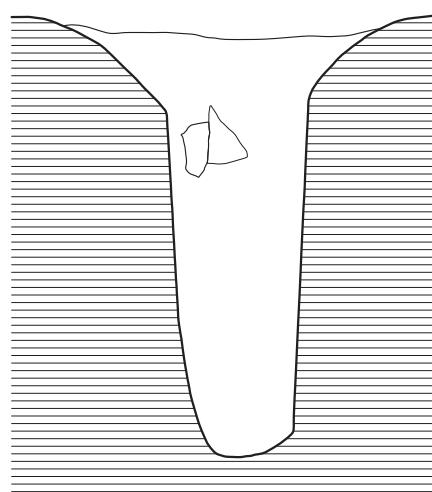
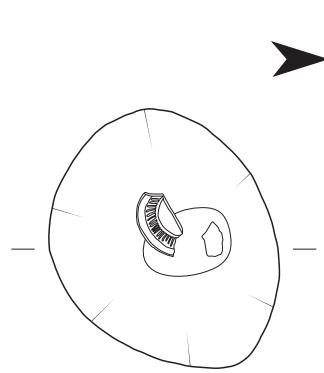


第16図 SP 1017・1039・1041・1042・1052実測図

S P 1056



S P 1078



第17図 S P 1056・1078実測図

第1表 掘立柱建物跡一覧表

規模・面積の()は残存規模

遺構番号	規模(間)	棟方向	柱間		面積 (m ²)	出土遺物	備考 (※: 調査区外へ続く可能性あり)
			桁 行	梁 行			
			建物の南東隅から (m)	建物の南東隅から (m)			
S B 101	1 × 1	N 24° E	3.7	2.3	8.51	土師器	
S B 102	1 × 1	N 10° E	3.1	2.3	7.13		
S B 103	3 × 2	N 72° W	7.1(2.1・2.5・2.5)	4.6(2.3・2.3)	32.66	土師器 瓦質土器 銭貨	中世後半
S B 104	1 × 1	N 22° E	3.4	2.3	7.82		
S B 105	1 × 1	N 31° E	3.8	2.3	8.74	瓦質土器	
S B 106	1 × 1	N 46° W	3.2	2.4	7.68		
S B 107	1 × 1	N 74° W	2.8	2.5	7.00		東面に廂(1.0 m)
S B 108	3 × (1)	N 29° E	6.4(2.2・2.1・2.1)	1.5	(9.60)	土師器 須恵器	南西面に廂(1.4 m) ※
S B 109	2 × 2	N 64° W	3.5(2.2・1.3)	3.0(1.6・1.4)	10.50		
S B 110	1 × 1	N 73° W	3.3	2.7	8.91	土師器 土師質土器 瓦質土器	中世後半
S B 111	(1) × 2	N 68° W	1.6	4.2(2.0・2.2)	(6.72)		※
S B 112	2 × 2	N 77° W	5.2(2.6・2.6)	* 3.7(1.8・1.9)	19.24	土師器 土師質土器 瓦質土器 鉄製品	東面に廂(1.8 m) * 遺構検出時柱穴の位置 による推定 中世後半
S B 113	2 × 1	N 77° W	4.0(2.2・1.8)	2.4	9.60		
S B 114	1 × 1	N 5° E	3.5	2.0	7.00		
S B 115	3 × 2	N 1° W	6.0(2.0・1.9・2.1)	5.2(2.5・2.7)	31.20	土師器	

2 遺物

沖ノ下1地区で出土した主な遺物は、土師器、瓦質土器、土錐で、このほかに中世の輸入銭や瀬戸美濃系の皿、縄文時代の石鏃などがある。特に、瓦質土器は溝からまとまって出土したため、良好な共伴資料を得ることができた。ここでは主な遺物について解説を加えたい。なお、各遺物の法量等については遺物観察表を参照いただきたい。

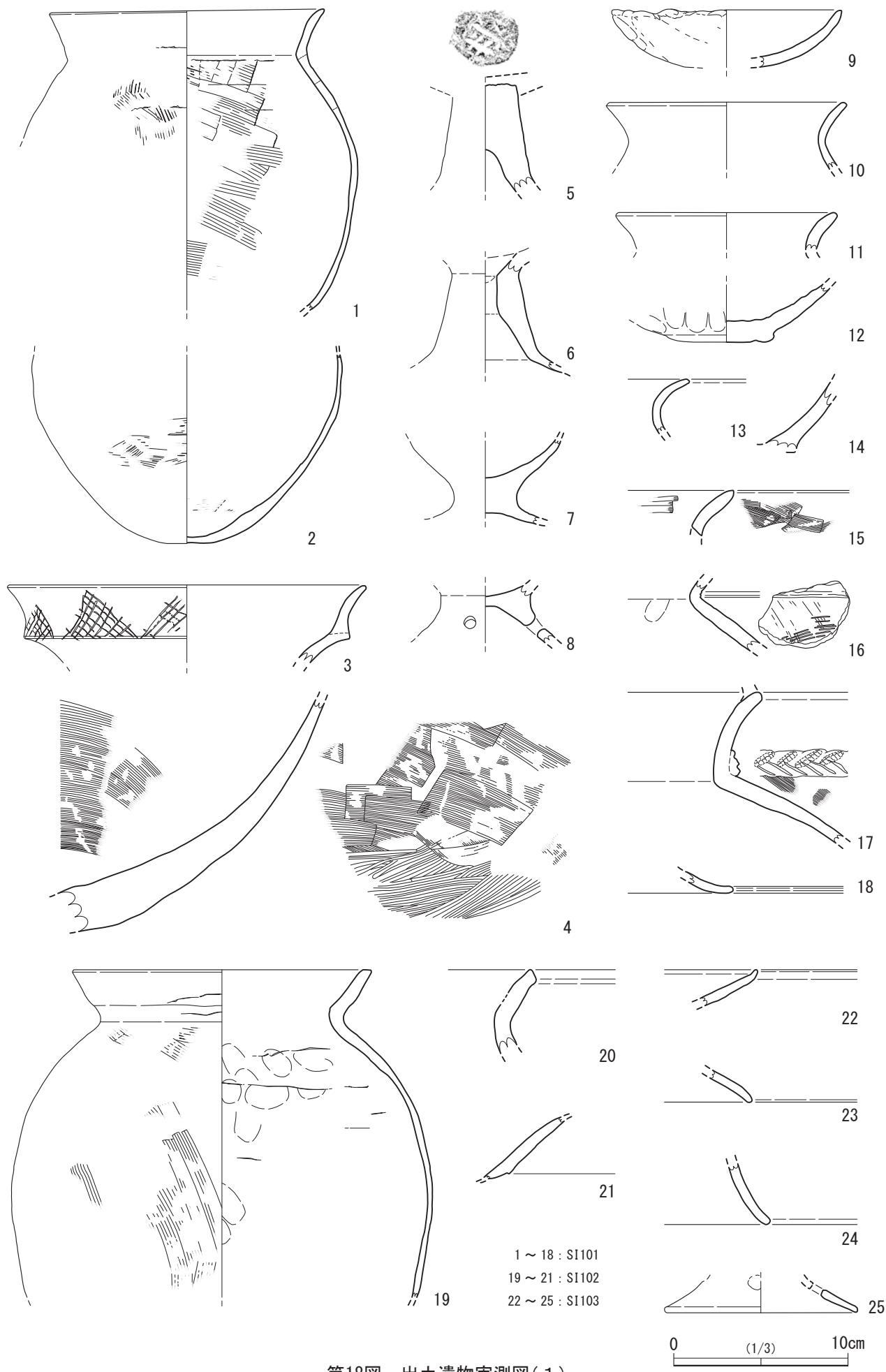
1～18はS I 101から出土した土師器群である。1と2は下層床面の中央炉と推定する穴から出土した甕で、同一個体とみられるが接合しない。肩にタタキと思われる痕跡がある。ハケ目方向は外面は下から上、内面は右から左である。粘土紐の細かい積み上げ痕が明瞭に残る。2の底部内面はコゲが円状に付着する。3は上層埋土中出土の複合口縁壺で、丁寧なヨコナデの後、ヘラ状工具で斜格子をもつ鋸歯文が施される。4は下層床面のほぼ中央から出土した壺の胴部～底部で、ハケ目とミガキ調整される。5～7は高杯で、5は脚頂部に杯部との接合を補助するためとみられるヘラ状工具による刻み目がある。精製器種の模倣と思われる。6は屋外周溝からの出土で、杯底部は充填式である。7は上層埋土中出土の山陰系低脚高杯。淡黄色の色調を呈し、軟質焼成である。8は上層埋土中出土の台付鉢で円孔透かしがある。9は椀もしくは高杯と思われる。10・11、13～16が甕、12・17が壺、18は高杯である。12は上層埋土中から出土。底部内外面が一部黒色化する。14は下層床面の北西部土器集中区より出土した。橙色の色調を呈し、軟質焼成。胎土に砂粒を多量に含む。15は他の出土土器と異なり、灰褐色系の色調を呈し、胎土に金雲母を含む。丁寧にヨコハケ調整される。16は頸部に3本の沈線が巡り、肩部をタタキの後ヨコハケ調整する。17は上層埋土中出土の複合口縁壺で、頸部に斜線文を組み合わせた突帯を貼付する。

19～21はS I 102出土の土師器である。19は甕で、胴部はカマド内から、口縁部は建物内から出土した。胴部に煤が付着しているため、カマドにかけられていたと思われる。ケズリ調整はなく、粘土紐の積み上げ痕が明瞭に残る。20は甕か複合口縁壺が剥離したものと思われる。21は高杯で淡黄色の色調を呈する。

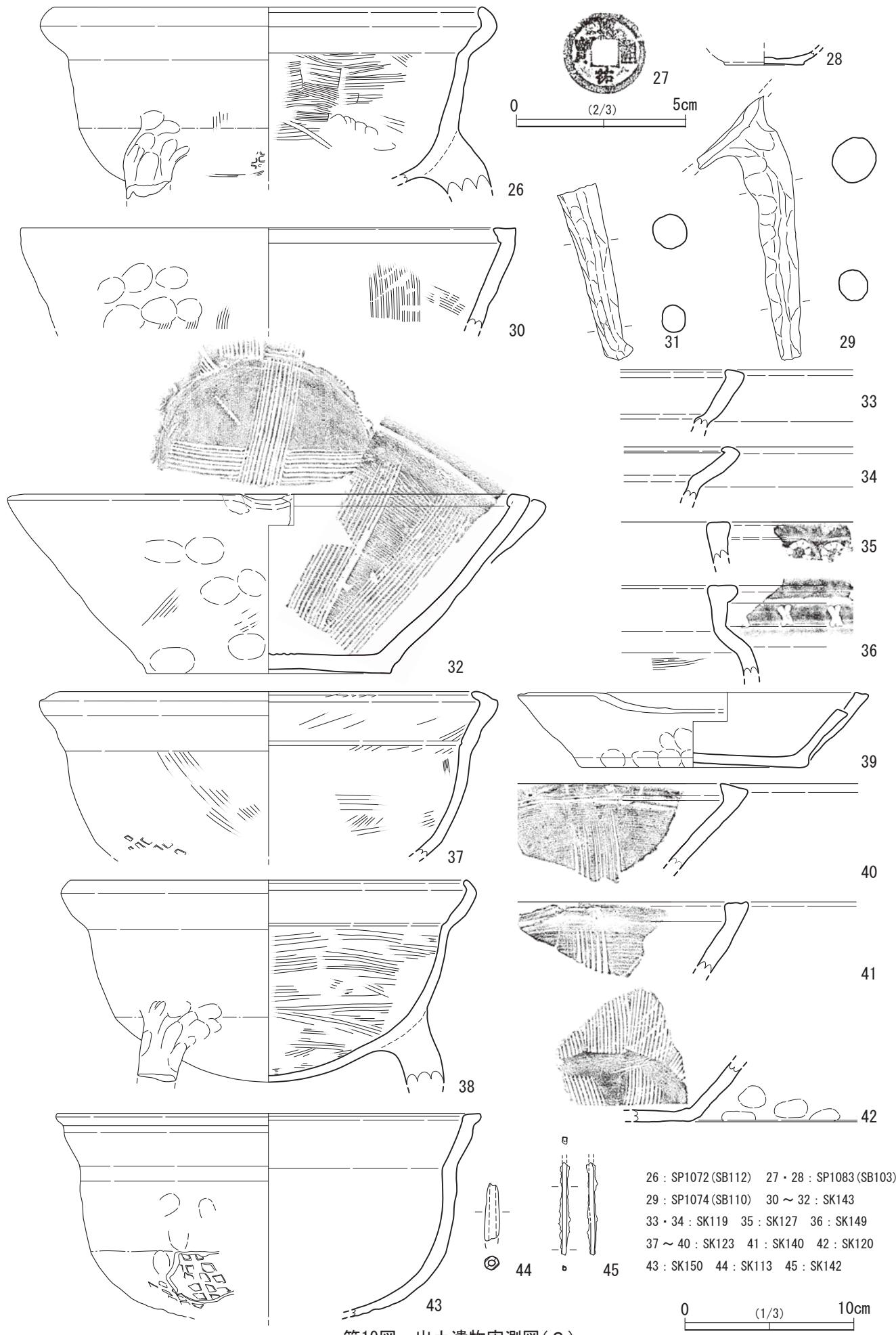
22～25はS I 103出土土師器である。22は畿内系精製小型器台である。23・25は高杯で25は円孔透かしがある。24は器台か高杯の脚部で、外面に丹が塗布される。

26～29は掘立柱建物の各柱穴から出土した遺物である。26はS B 112出土の瓦質土器の足鍋、27・28はS B 103出土の嘉祐通寶と土師器皿、29はS B 110出土の瓦質土器の足鍋の脚である。26は外面に煤が付着している。27は最初の文字は不明瞭だが、字体等から嘉祐通寶と判断した。嘉祐元年(1056)初鑄。28は底部に回転糸切りと板目圧痕が残る。白色系で器壁が薄い、いわゆる大内在来系土師器皿である。中世後期に比定される。

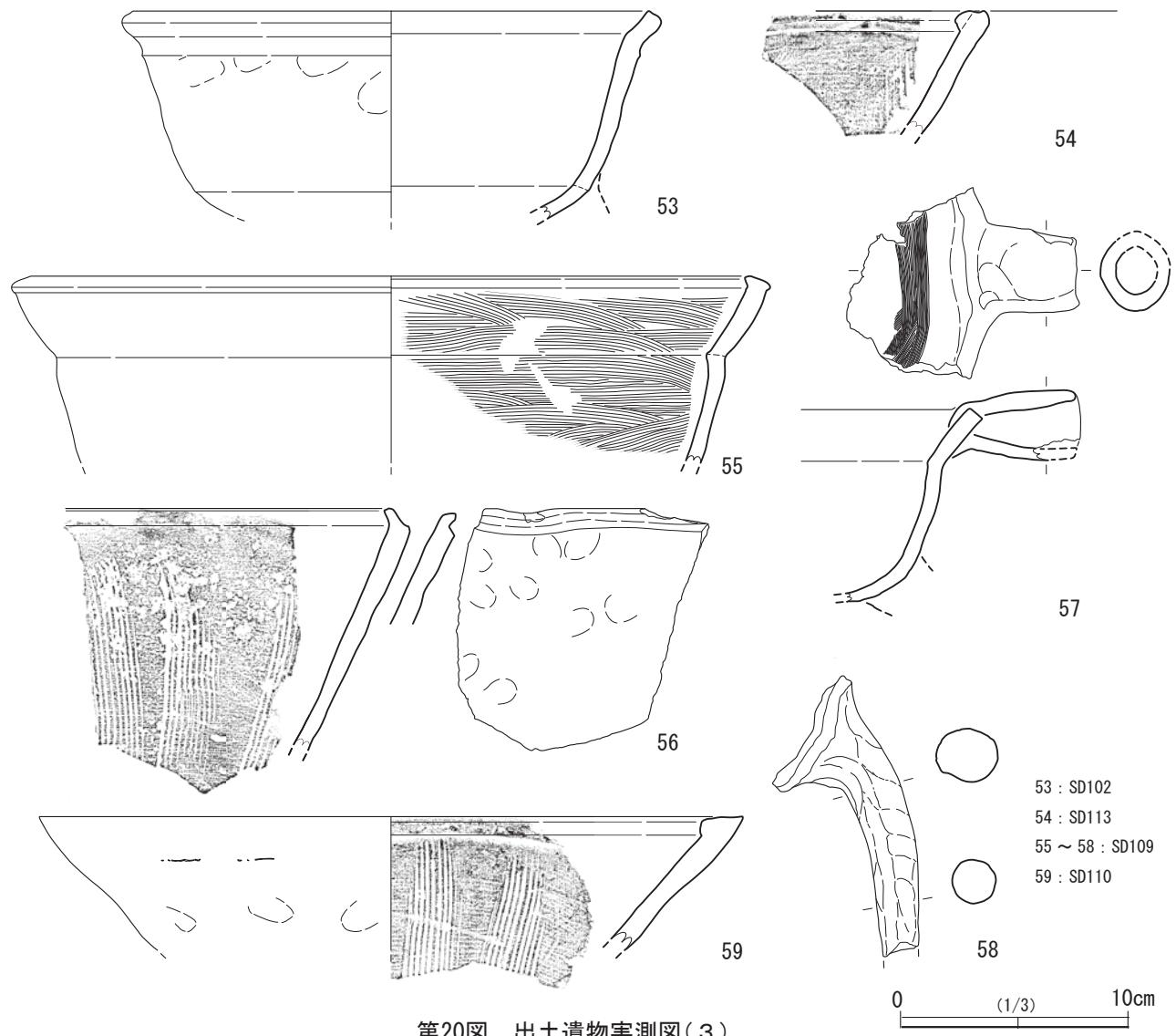
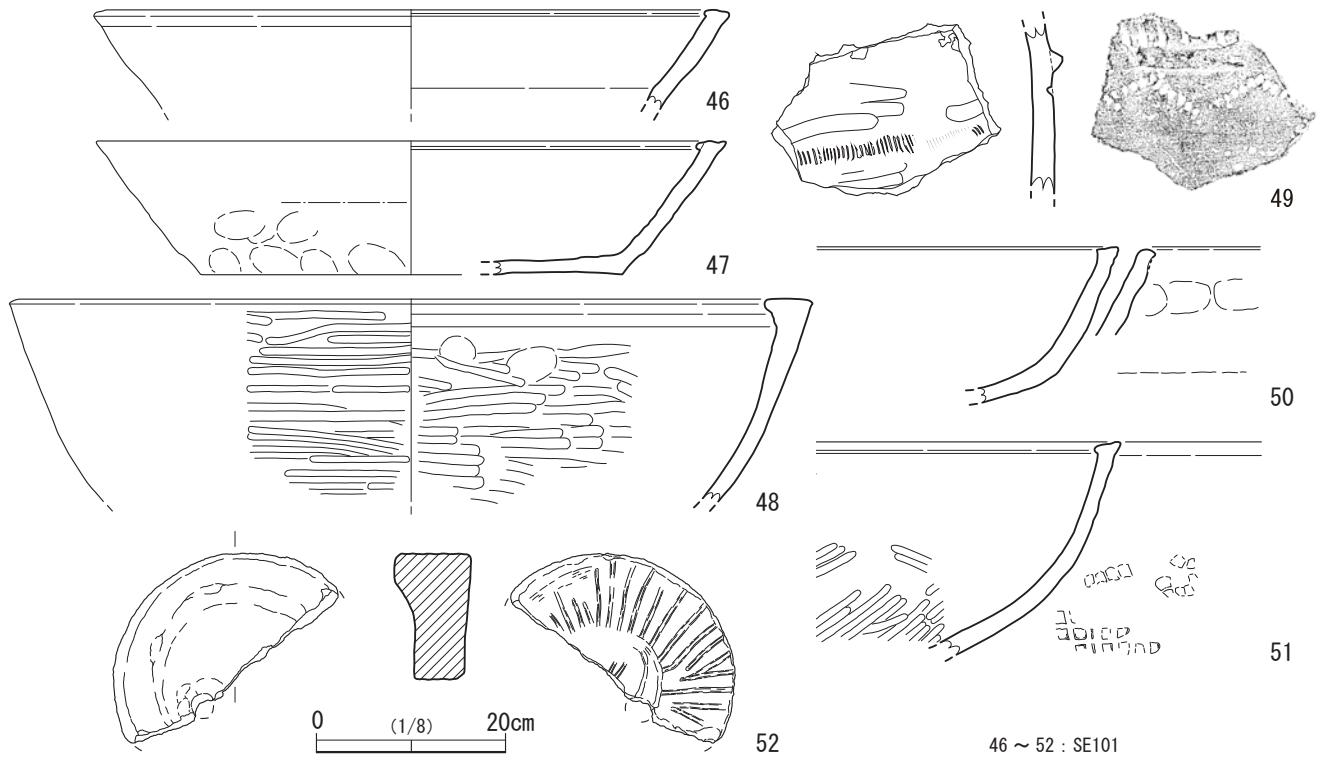
30～45は各土坑から出土した遺物である。30～32はS K 143出土の瓦質土器で、30・32は擂鉢である。30は内面に10条1単位の擂目を施す。32は同一個体だが接合できなかつた土器片を図上復元している。注口部を作り出し、内面放射状に、底部内面には「×」状に11条1単位の擂目を施す。31は足鍋の脚である。33・34はS K 119出土の瓦質土器の鍋、35・36は瓦質土器の火鉢でそれぞれS K 127とS K 149から出土した。35・36は外面にそれぞれ円形菊花と「X」字状のスタンプが連続で押捺さ



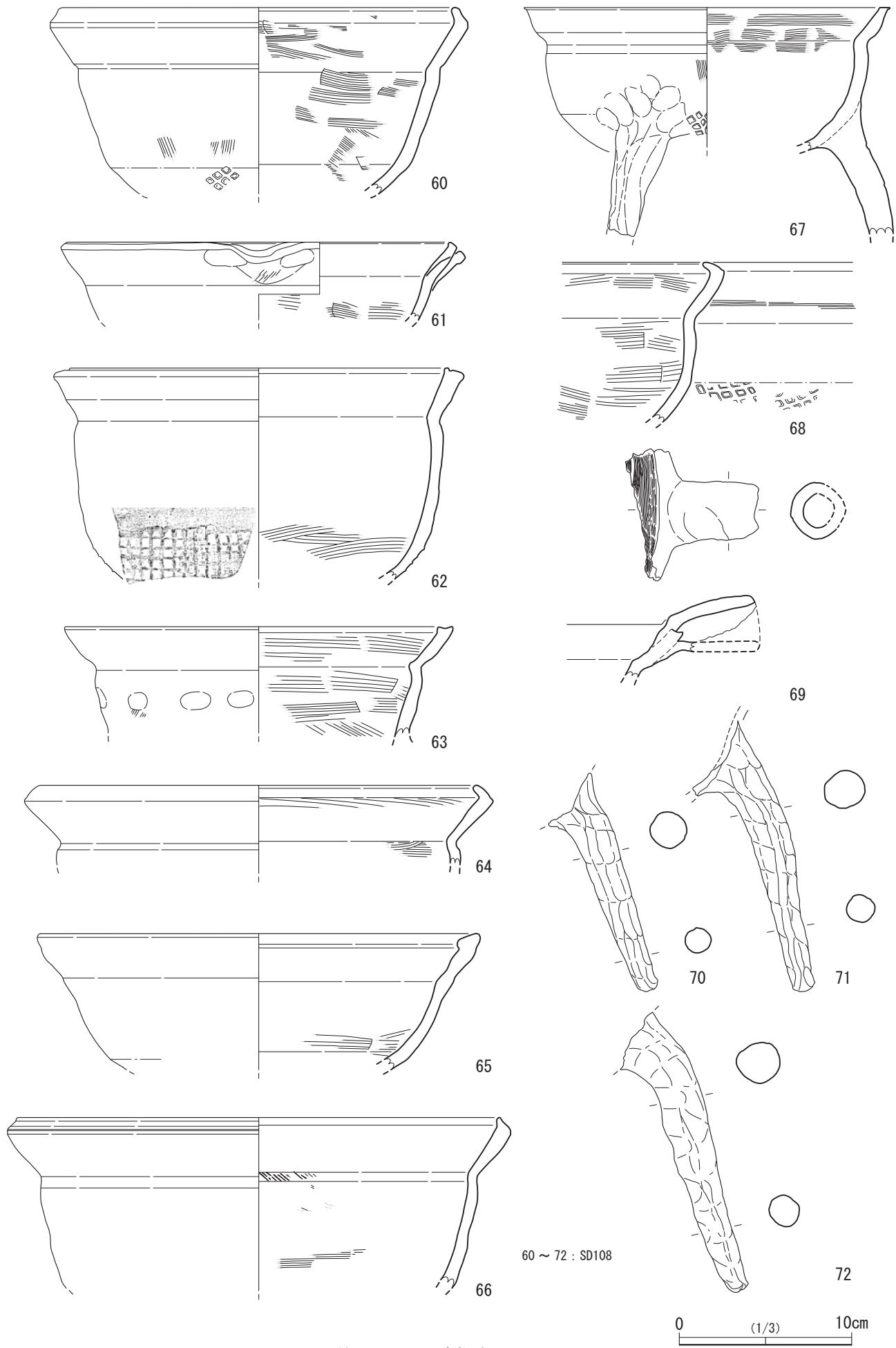
第18図 出土遺物実測図(1)



第19図 出土遺物実測図(2)



第20図 出土遺物実測図(3)



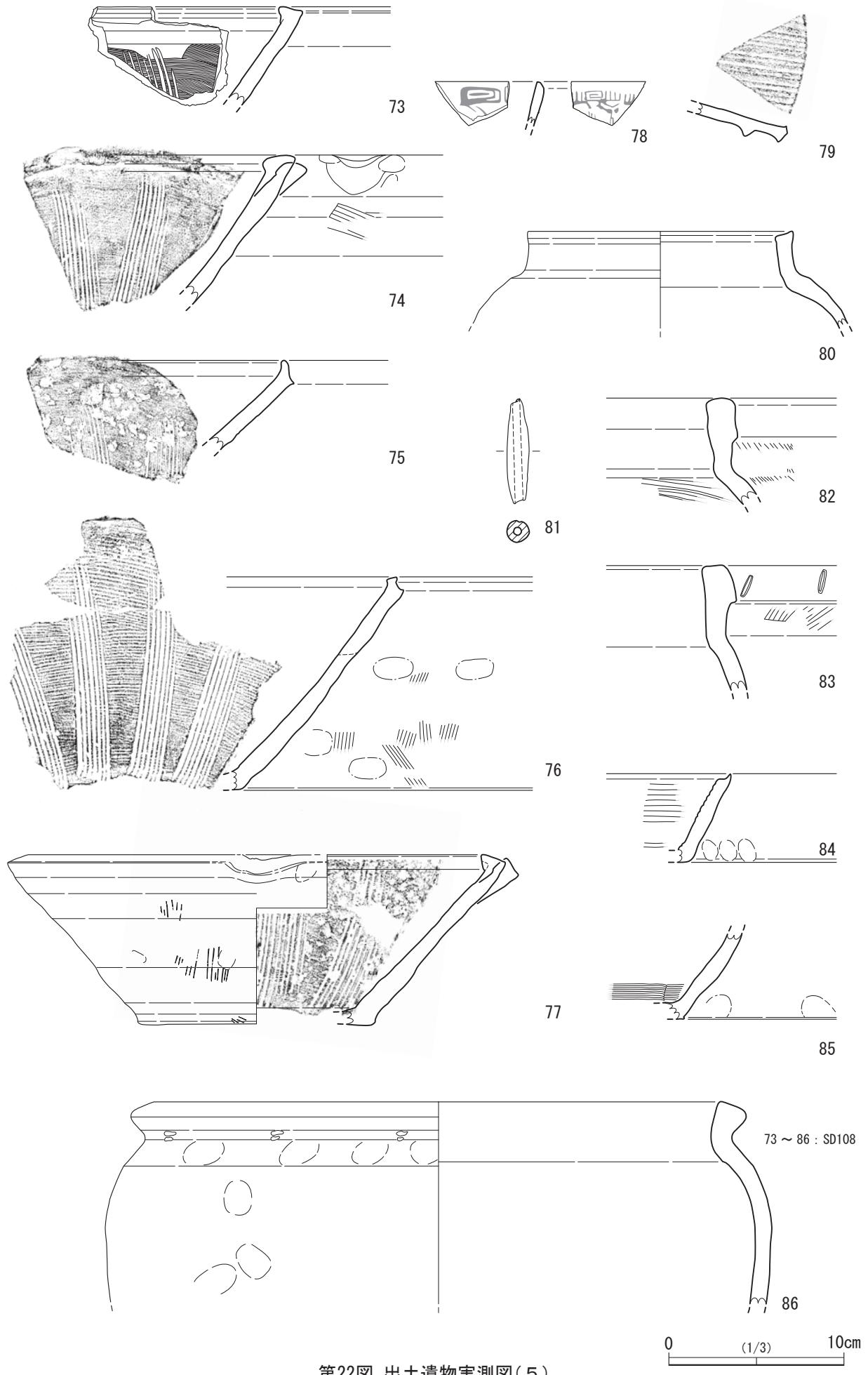
第21図 出土遺物実測図(4)

れる。37～40はSK123出土の瓦質土器で、37・38は足鍋、39は鉢で抉りがある。37は外面下端に脚接合痕が確認できる。40は擂鉢で、口縁端部が断面三角形を呈する。内面に10条1単位の擂目がある。41・42は瓦質土器の擂鉢で、それぞれSK140とSK120から出土した。41は内面に8条1単位、42は12条1単位の擂目を有する。43はSK150出土の瓦質土器の足鍋で、脚の脱落箇所にタタキ痕がある。44はSK113出土の硬質の管状土錐で紡錘形を呈する。45はSK142出土の鉄釘で断面方形である。

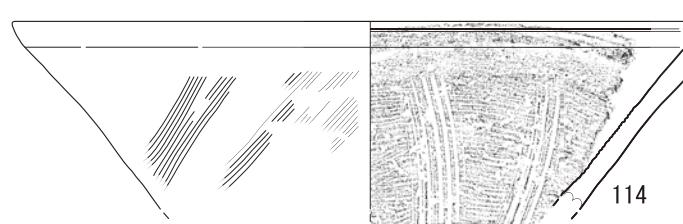
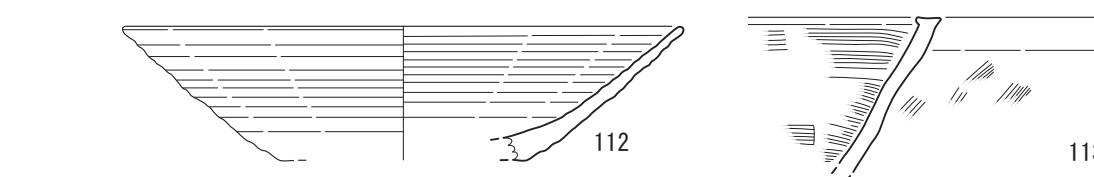
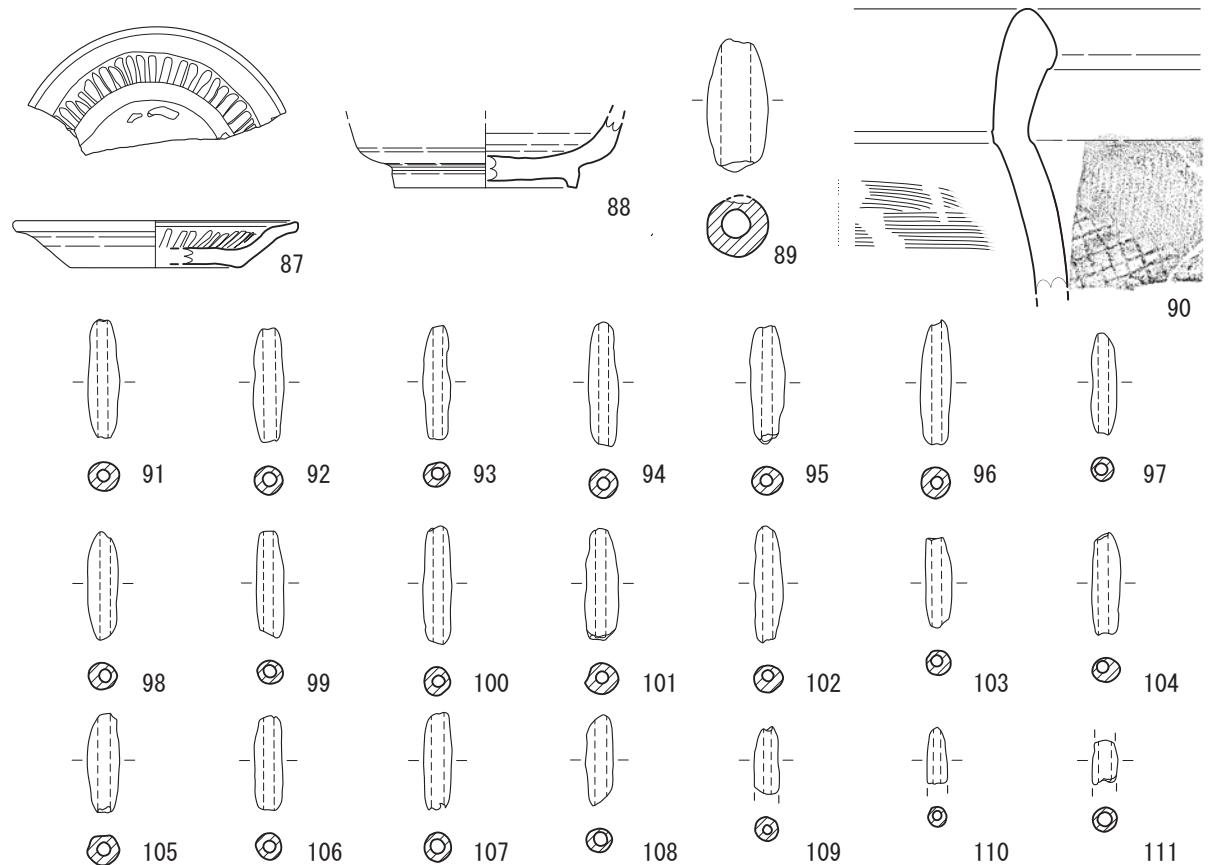
46～52は井戸出土遺物。46・50・51は鍋、47は鉢、48・49は火鉢でいずれも瓦質焼成である。48は内外面を丁寧にヘラミガキする。49は外面に突帯を貼り付け、突帯の上部に板状工具による長方形の刺突文、突帯下部に櫛歯状工具による列点刺突文を山形状に施す。50は注口部がわずかに残存する。51は鉢形で内面をミガキ調整したり、外面のハケ目や格子目タタキをナデ消したりと丁寧な調整をしているが、外面に煤が少量付着しているため、鍋と判断した。52は石臼の上臼で、礫岩製。重量4.02kgを測る。

53～86は各溝から出土した遺物である。53～59は瓦質土器で、53はSD102出土の足鍋、54・59は擂鉢でそれぞれSD113とSD110から出土した。59は内面に11条1単位の擂目を有し、口縁端部を内側に折り返している。55～58はSD109出土土器で、55は鍋、56は注口を有する擂鉢、57は円筒状の把手をもつ足鍋、58は足鍋の脚である。56は口縁端部の形が、在地特有の内側に肥厚するものでなく、外側に張り出しており、備前の影響を受けていると思われる。内面に11条1単位の擂目をもつ。60～72はいずれもSD108から出土した瓦質土器の鍋もしくは足鍋である。口縁端部を内側に屈曲させるもの(60・64・66・68)、口縁端部内側に肥厚帯を貼り付けたような状態のもの(65)、口縁端部が面をもつもの(62)、口縁端部が面をもち、外方に拡張するもの(63・67)、口縁端部が面をもち、上端で厚みを増すもの(61)がある。以上のように、SD108からは複数型式がまとまって出土している。66の外面に付着している煤を放射性炭素年代測定した結果、16世紀代という結果を得ることができた。これは岩崎仁志氏による、型式数の急増と乱立傾向を示す時期とまさに合致する(岩崎仁志1999「足鍋再考」『陶墳』第12号)。61は注口、69は円筒状の把手をもつ。73～86もSD108出土土器である。73～77は瓦質土器の擂鉢で、74と77は注口を作り出す。75・76は口縁端部が外側に拡張し、備前の影響を受けていると考えられる。内面の擂目は7条1単位(76)、8条1単位(73)、9条1単位(74・75)、10条1単位(77)のものがある。78は龍泉窯系の青磁碗で、口縁の内外面に退化気味の雷文を施し、内外面とも施釉される。1400年前後に比定される。79は瓦質土器の蓋で、上面に板目痕を残し、下面にかえりを貼付する。80は瓦質焼成の湯釜、81は土師質焼成の管状土錐で紡錘形を呈す。82・83は甕で、それぞれ瓦質・土師質焼成である。83は外面口縁部に刺突文を巡らす。84は瓦質土器の焙烙と思われる。85は瓦質土器の鉢、86は瓦質土器の火鉢で外面頸部に「二」状のスタンプ文を押捺する。

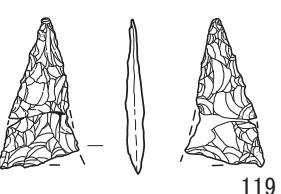
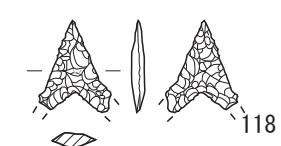
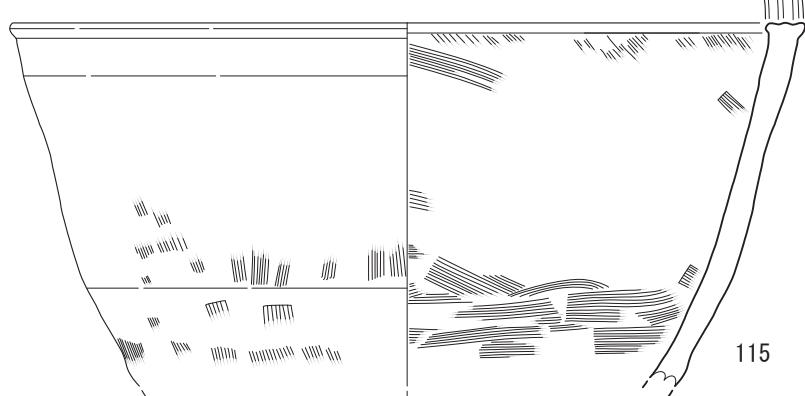
87～119は各柱穴から出土した遺物である。87はSP1078出土の瀬戸美濃系の折縁皿で、内面に丸ノミ状工具による刻線(ソギ)がはいる。内外面とも灰釉をかけた後、蛇の目釉剥ぎし、輪トチンによつて重ね焼きをした痕跡が残る。底部は回転削り出し成形による。型式学的特徴から16世紀末～17世紀初頃に比定される。88・89はSP1001出土遺物。88は内面は施釉、外面は削り出しの後、露胎である。内面にロクロ目を残す点、体部の腰が強く張る点から、青磁の水注かと思われる。福建省産で13世紀代に比定される。89は土師質焼成の管状土錐である。90はSP1017出土の瓦質土器の甕で、外面調整



第22図 出土遺物実測図(5)

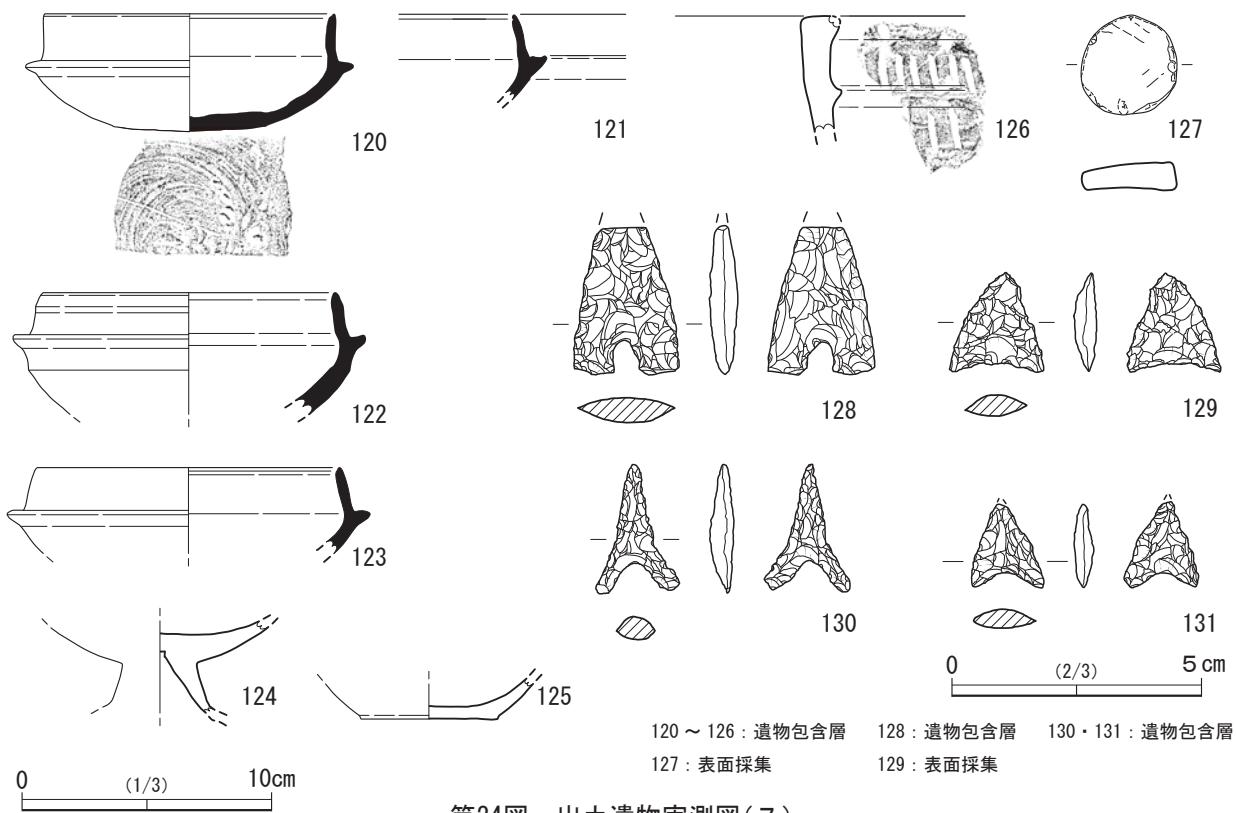


87 : SP1078
 88 - 89 : SP1001
 90 : SP1017
 91 ~ 111 : SP1111
 112 - 113 : SP1056
 114 : SP1041
 115 : SP1052
 116 : SP1027
 117 : SP1016
 118 : SP1035
 119 : SP1067



0 (1/3) 10cm

第23図 出土遺物実測図(6)



第24図 出土遺物実測図(7)

はハケ目と格子目タタキで行う。91～111はS P 1111から一括出土した管状土錐である。いずれも土師質焼成で、紡錘形を呈す。指オサエ痕が顕著に残っており、芯材に粘土を巻きつけて成形したことがわかる。91～93、97・98、101・107・111には化粧土が付着している。S P 1111からはこの管状土錐しか出土しなかったため、これらの年代的位置づけは不明。112は土師質焼成の鉢、113は瓦質焼成の鍋でどちらもS P 1056から出土した。114はS P 1041出土の瓦質土器の擂鉢で、口縁端部は断面三角形状を呈す。内面に9条1単位の擂目を施す。115は硬質の甕で、タタキ痕をもたず広口の形態をとる。S P 1052より出土。116はS P 1027出土の土師質の管状土錐、117はS P 1016出土の鉄釘である。鉄釘は断面方形だが、頭頂部は断面かまぼこ形を呈する。118は姫島産黒曜石製の石鎌。凹基無茎式で重量0.4g。119は安山岩製平基無茎式鎌で重量0.8g。いずれもS P 1035とS P 1067から出土したが、どちらも同時代の柱穴とは考えにくく、混在資料であると考えている。

120～131は包含層および表面採集の遺物である。120～125、130はS I 101およびS I 103直上の遺物包含層より出土した。120～123は須恵器の杯身で、120は外面底部にヘラ記号を有する。124は土師器の畿内系精製小型高杯で、本来はS I 101かS I 103に伴う遺物だった可能性が高い。125は土師器の杯で、底部に回転糸切り痕が残る。浅黄橙色の色調を呈し、軟質焼成である。130は姫島産黒曜石製の石鎌。凹基無茎式で重量0.7g。抉りが深い。126・128・131は遺物包含層より出土した遺物である。126は瓦質土器の火鉢。外面口縁部に板状工具による縦2列以上の刺突文を施し、突起部をつまみ出している。128は姫島産黒曜石製の石鎌。先端部が欠損している。重量は2.7gを測る。縄文時代早期の所産であろう。131は姫島産黒曜石製の石鎌。凹基無茎式で重量0.5g。抉りは浅い。127・129は表面採集時の遺物で、127は須恵器甕の肩～胴部の再加工と思われる土製円盤、129は凹基無茎式の石鎌で腰岳産黒曜石製と思われる。重量1.0g。

第2表 出土土器・土製品観察一覧表

捲 図 版	図 版 No.	出土 場所	種別	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調(内) にぶい橙色	主な調整(内) 口・頸:ヨコナデ 脇:指オサエ後ヨコハケ 口・頸:ヨコナデ 肩:タキカ 脇:指オサエ後タデハケ	備 考	
					口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)						
18	14	1	SI101	土師器	甕	15.6 × 14.3	17.1 残	—	密	軟質	褐灰色 にぶい橙色	口・頸:ヨコナデ 脇:指オサエ後ヨコハケ 口・頸:ヨコナデ 肩:タキカ 脇:指オサエ後タデハケ	粘土紐の細かい積み上げ痕が明瞭に残る 外面ハケ目は下→上、内面ハケ目は右→左
18	14	2	SI101	土師器	甕	—	10.7 残	2.9	密	軟質	コグ:灰色 赤橙色	脣:指オサエ後ヨコハケ 脇:指オサエ後ハケ目 脣:指オサエ後ヨコハケ	1と同一個体 底部内面にコグが円状に付着
18	14	3	SI101	土師器	複合口縁壺	(20.4)	4.4 残	—	密	やや軟質	灰黄色 灰黄色	ヨコナデ ヨコナデ	外面にヘラ状工具で斜格子をもつ鋸歯文
18	14	4	SI101	土師器	壺	—	12.9 残	—	密	やや軟質	浅黄橙色 にぶい黄橙色	指オサエ後ヨコハケ 指オサエ後ヨコハケ、ミガキ	
18	14	5	SI101	土師器	高杯	—	6.1 残	—	密	やや軟質	にぶい橙色 にぶい橙色	指オサエ、タテナデ 脚:指オサエ後タテナデ 脚頂:格子目刻み	精製器種の模倣
18	14	6	SI101	土師器	高杯	—	6.3 残	—	密	やや軟質	橙色 浅黄橙色	杯・脚端:ヨコナデ 脚:指オサエ 杯・脚端:ヨコナデ 脚:指オサエ後タテナデ	杯底部充填式
18	14	7	SI101	土師器	高杯	—	4.7 残	—	密	軟質	淡黄色 淡黄色	剥落により不明瞭 剥落により不明瞭	山陰系低脚高杯
18	14	8	SI101	土師器	台付鉢	—	2.2 残	—	密	やや軟質	杯:浅黄橙色 浅黄橙色	杯:摩滅により不明瞭 脚:指オサエ後ヨコナデ 摩滅により不明瞭	円孔透かし有
18	14	9	SI101	土師器	楕か高杯	(13.1)	3.3 残	—	密	やや軟質	橙色 にぶい橙色	指オサエ、ヨコナデ 指オサエ、ヨコナデ	
18	15	10	SI101	土師器	甕か	(13.7)	3.8 残	—	密	軟質	浅黄橙色 浅黄橙色	ヨコナデ 口:ヨコナデ 頸:タテハケ後ヨコナデ	
18	15	11	SI101	土師器	甕	(12.6)	2.1 残	—	密	軟質	灰白色 にぶい黄橙色	ヨコナデ ヨコナデ	
18	15	12	SI101	土師器	壺	—	3.2 残	4.5	密	やや軟質	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	剥落により不明瞭 指オサエ後ナデ	底部内外面一部黒色化
18	15	13	SI101	土師器	甕	—	3.1 残	—	密	やや軟質	橙色 橙色	剥落により不明瞭 口:ヨコナデ 頸:タテハケ後ヨコナデ	
18	15	14	SI101	土師器	甕	—	3.8 残	—	密	軟質	橙色 橙色	摩滅により不明瞭 摩滅により不明瞭	
18	15	15	SI101	土師器	甕	—	2.6 残	—	密	やや軟質	灰褐色 灰褐色	ヨコハケ ヨコハケ後ナデ消し	金雲母を含む SI101の他の出土土器と胎土が異なる
18	15	16	SI101	土師器	甕	—	3.9 残	—	密	やや軟質	にぶい黄橙色 にぶい橙色	指オサエ、ヨコナデ 頭:3本の沈線 肩:タキア後ヨコハケ	
18	15	17	SI101	土師器	複合口縁壺	—	8.5 残	—	密	やや軟質	褐灰色 褐灰色	口:ヨコナデ 肩:指オサエ後ヨコハケ 口:ヨコナデ 肩:ハケ目	頸部に斜線文を組み合わせた突堤貼付
18	15	18	SI101	土師器	高杯	—	1.2 残	—	密	軟質	灰白色 灰白色	ヨコナデ ヨコナデ	
18	15	19	SI102	土師器	甕	(17.0)	18.6 残	—	密	軟質	にぶい黄橙色 淡黄色	口・頸:ヨコナデ 脇:指オサエ・ヨコナデ 口・頸:ヨコナデ 肩:タキア 頸:タテハケ	布留甕模倣、粘土紐の積み上げ痕が明瞭に残る 脣部に煤が付着、カマドで使用したと思われる
18	15	20	SI102	土師器	甕か壺	—	4.8 残	—	密	やや軟質	灰黄色 灰黄色	ヨコナデ ヨコナデ	山陰系複合口縁壺が剥離か
18	15	21	SI102	土師器	高杯	—	3.5 残	—	密	やや軟質	淡黄色 淡黄色	ヨコナデ ヨコナデ	
18	15	22	SI103	土師器	器台	—	2.0 残	—	密	やや軟質	灰白色 にぶい黄橙色	ヨコナデ 摩滅により不明瞭	畿内系精製小型器台
18	15	23	SI103	土師器	高杯	—	1.8 残	—	密	やや軟質	橙色 にぶい赤褐色	ヨコナデ ヨコナデ	
18	15	24	SI103	土師器	器台か 高杯	—	3.4 残	—	密	やや軟質	橙色 橙色	剥落により不明瞭 ヨコナデ	外面丹塗り
18	15	25	SI103	土師器	高杯	—	1.8 残	(11.0)	密	軟質	橙色 橙色	剥落により不明瞭 ヨコナデ	円孔透かし有
19	16	26	SP1072 (SB112)	瓦質土器	足鍋	(25.0)	10.3 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	口:ヨコハケ後ヨコナデ 脇:ヨコハケ後ナデ 口:ヨコナデ 脇:タテハケ後ナデ 底:格子目タタキ	外面煤付着
19	16	28	SP1083 (SB103)	土師器	皿	—	0.8 残	(4.6)	密	やや軟質	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ロクロ回転ナデ後静止ナデ 体:ロクロ回転ナデ 底:回転糸切り後板目圧痕	
19	16	29	SP1074 (SB110)	瓦質土器	足鍋(脚)	—	15.5 残	—	密	やや軟質	鍋:灰色 黑色	鍋:ハケ目 指オサエ、ナデ	
19	16	30	SK143	瓦質土器	擂鉢	(28.9)	5.9 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	ヨコハケ 口:ヨコナデ 脇:タテハケ後ナデ、指オサエ	内面に10条1単位の擂目
19	16	31	SK143	瓦質土器	足鍋(脚)	—	10.4 残	—	密	やや軟質	— 一 指オサエ、ナデ		
19	16	32	SK143	瓦質土器	擂鉢	(30.6)	(10.5)	(14.2)	密	やや軟質	黃灰色 黃灰色	口:ヨコナデ 脇:ヨコハケ 底:ヨコハケ後ナデ消し 口:ヨコナデ 脇:タテハケ・指オサエ後ナデ 底:板目圧痕	内面に11条1単位の擂目 注口部有
19	16	33	SK119	瓦質土器	鍋	—	3.3 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	ヨコナデ ヨコナデ	
19	16	34	SK119	瓦質土器	鍋	—	2.8 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	ヨコナデ 剥落により不明瞭	
19	16	35	SK127	瓦質土器	火鉢	—	2.5 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	ヨコハケ後ナデ消し ヨコナデ	外面口縁部に円形菊花文のスタンプ
19	16	36	SK149	瓦質土器	火鉢	—	5.3 残	—	密	やや軟質	暗灰色 暗灰色	口:ヨコナデ 頸:指オサエ、ナデ 肩:ヨコハケ ヨコナデ	外面頸部に「X」字状のスタンプ
19	16	37	SK123	瓦質土器	足鍋	(24.6)	9.6 残	—	密	やや軟質	暗灰色 灰色	口:ヨコハケ後ヨコナデ 脇:ヨコハケ後ナデ 口:ヨコナデ 脇:タテハケ後ナデ、指オサエ 底:格子目タタキ	内面胴部上部に1条の沈線有 外面部に炭化物付着、外面部下端に脚接合痕有
19	17	38	SK123	瓦質土器	足鍋	(23.1)	11.8 残	—	密	やや軟質	灰白色 灰白色	口:ヨコナデ 脇:ヨコハケ後ヨコナデ 底:ヨコハケ後ナデ 口:ヨコナデ 脇:ヨコハケ後ナデ 底:格子目タタキ	内面胴部上部に1条の沈線有 外面部底部に少量煤付着
19	17	39	SK123	瓦質土器	鉢	(19.2)	4.4 残	(13.0)	密	やや軟質	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	体:ヨコハケ後ナデ消し、指オサエ 体:ヨコナデ、指オサエ 底:板目圧痕	一部抉り有
19	17	40	SK123	瓦質土器	擂鉢	—	5.4 残	—	密	やや軟質	灰白色 灰白色	口:ヨコナデ 脇:ヨコハケ ヨコナデ、指オサエ後ナデ消し	内面に10条1単位の擂目
19	17	41	SK140	瓦質土器	擂鉢	—	4.1 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	口:ヨコナデ 脇:ヨコハケ 口:ヨコナデ 脇:タテハケ	内面に8条1単位の擂目
19	17	42	SK120	瓦質土器	擂鉢	—	3.4 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	ヨコハケ 脣:ヨコハケ後ナデ消し、指オサエ 底:板目圧痕	内面に12条1単位の擂目

捕 図 版	國 版 No.	出土 場所	種別	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調(内) (外)	主な調整(内) (外)	備 考	
					口径 (復元値)	器高 (残存倉)	底径 (復元値)						
19	17	43	SK150	瓦質土器	足鍋	(25.0)	11.9 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	ヨコハケ 口：ヨコナデ 脊：タテハケ後ナデ、指オサエ 底：格子目タタキ	外面煤付着 脚脱落痕内にタタキ痕有
19	17	44	SK113	土製品	管状土錐	径 0.9	長さ 3.3 残	孔径 0.4	密	硬質	灰色	芯抜き取り 指オサエ、ナデ	須恵質焼成、紡錘形
20	17	46	SE101	瓦質土器	鍋	(25.3)	4.0 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	ヨコナデ ヨコナデ	
20	17	47	SE101	瓦質土器	鉢	(24.9)	5.3	(16.7)	密	やや軟質	灰白色 灰白色	ヨコナデ 口：ヨコナデ 脊：ナデ、指オサエ 底：板目圧痕	
20	17	48	SE101	瓦質土器	火鉢	(31.8)	8.0 残	—	密	やや軟質	灰色 暗灰色	口：ヨコナデ 脊上部：ヨコナデ後ヨコハケ 脊下部：ヘラミガキ ヘラミガキ	
20	17	49	SE101	瓦質土器	火鉢	—	6.8 残	—	密	やや軟質	灰色 赤灰色	ヘラミガキ、タテハケ ヨコナデ	外面に突帯貼付し、上部に板状工具で長方形の刺突文、下部に櫛齒状工具で山形状に列点刺突文
20	17	50	SE101	瓦質土器	鍋	—	6.2 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	口：ヨコナデ 口：ヨコナデ 脊：ハケ目後ナデ消し、指オサエ	注口部有
20	18	51	SE101	瓦質土器	鍋	—	8.4 残	—	密	やや軟質	灰白色 褐灰色	口：ヨコナデ 脊：ヨコハケ後ヨコナデ 底：ミガキ 口：ヨコナデ 脊：タテハケ後ナデ、指オサエ 底：格子目タタキ後ナデ	外面少量煤付着
20	18	53	SD102	瓦質土器	足鍋	(22.5)	9.0 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	ヨコハケ 口：ヨコナデ 脊：タテハケ後ナデ、指オサエ	外面下端に脚接合痕有 外面に少量煤付着
20	18	54	SD113	瓦質土器	擂鉢	—	5.3 残	—	密	やや軟質	灰色 灰白色	口：ヨコナデ 脊：ヨコハケ 口：ヨコナデ 脊：タテハケ後ナデ	内面に擂目
20	18	55	SD109	瓦質土器	鍋	(31.2)	8.0 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	ヨコハケ 口：ヨコナデ 脊タテハケ後ナデ	
20	18	56	SD109	瓦質土器	擂鉢	—	10.5 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	口：ヨコナデ 脊：ヨコハケ 指オサエ後ナデ消し	内面に 11 条 1 単位の擂目、注口部有 備前の影響を受ける
20	18	57	SD109	瓦質土器	足鍋	把手径 3.1	9.2 残	把手孔径 (1.7)	密	やや軟質	灰色 灰色	ヨコハケ後ナデ タテハケ後ヨコナデ	把手貼付
20	18	58	SD109	瓦質土器	足鍋(脚)	—	11.9 残	—	密	やや軟質	鍋：灰色 灰色	鍋内面：摩滅により不明瞭 指オサエ、ナデ	付け根に少量煤付着
20	18	59	SD110	瓦質土器	擂鉢	(30.6)	5.8 残	—	密	やや軟質	脣：灰白色 黄灰色	ヨコハケ ヨコナデ、指オサエ	内面に 11 条 1 単位の擂目 口縁端部を内側に折り返す
21	19	60	SD108	瓦質土器	鍋	(22.4)	10.7 残	—	密	やや軟質	暗灰色 暗灰色	ヨコハケ後ヨコナデ 口：ヨコナデ 脊：タテハケ後ナデ消し、指オサエ 底：格子目タタキ	外面に煤・炭化物付着
21	19	61	SD108	瓦質土器	鍋	(23.8)	4.5 残	—	密	やや軟質	暗灰色 灰色	ヨコハケ後ナデ タテハケ後ヨコハケ、指オサエ	注口部有
21	19	62	SD108	瓦質土器	鍋	(21.6)	12.1 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	口：ヨコナデ後ナデ 脊：ヨコナデ 底：ヨコハケ 口：ヨコナデ 脊：タテハケ後ナデ、指オサエ 底：格子目タタキ	
21	19	63	SD108	瓦質土器	足鍋	(22.4)	6.1 残	—	密	やや軟質	灰白色 黄灰色	ヨコハケ後ヨコナデ 口：ヨコナデ 脊：ハケ目後ナデ、指オサエ	外面煤付着 外面下端に脚接合痕有
21	19	64	SD108	瓦質土器	鍋	(25.0)	4.6 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	ヨコハケ後ヨコナデ ヨコナデ	
21	19	65	SD108	瓦質土器	鍋	(25.0)	7.8 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	口：ヨコナデ 脊：ヨコハケ後ヨコナデ 口：ヨコナデ 脊：タテハケ後ナデ消し、指オサエ	外面少量煤付着
21	19	66	SD108	瓦質土器	鍋	(27.8)	9.8 残	—	密	やや軟質	暗灰色 暗灰色	口：ヨコナデ 脊：ヨコハケ後ヨコナデ 口：ヨコナデ 脊：指オサエ後ヨコナデ	外面煤付着 放射性炭素年代測定資料
21	19	67	SD108	瓦質土器	足鍋	(21.0)	13.0 残	—	密	やや軟質	暗灰色 暗灰色	ヨコハケ後ヨコナデ 口：ヨコナデ 脊：タテハケ後ナデ消し 底：格子目タタキ	外面胴部に少量炭化物・煤付着
21	19	68	SD108	瓦質土器	鍋	—	9.1 残	—	密	やや軟質	灰白色 灰白色	ヨコハケ後ナデ消し 口：ヨコハケ後ナデ 脊：ヨコハケ、指オサエ、ナデ 底：格子目タタキ	
21	20	69	SD108	瓦質土器	鍋	把手径 3.3	4.2 残	把手孔径 1.9	密	やや軟質	灰色 灰色	ヨコハケ 指オサエ、ナデ	把手貼付
21	20	70	SD108	瓦質土器	足鍋(脚)	—	12.5 残	—	密	やや軟質	— 一 灰色 灰白色	鍋内面：摩滅により不明瞭 指オサエ、ナデ	接合部内面に鍋外表面の格子目タタキ痕有
21	20	71	SD108	瓦質土器	足鍋(脚)	—	15.7 残	—	密	やや軟質	— 一 灰色 灰色	鍋内面：摩滅により不明瞭 指オサエ、ナデ	
21	20	72	SD108	瓦質土器	足鍋(脚)	—	16.1 残	—	密	やや軟質	— 手づくね形成、指オサエ、ナデ		脚付け根に煤付着
22	20	73	SD108	瓦質土器	擂鉢	—	5.6 残	—	密	やや軟質	灰色 灰白色	口：ヨコナデ 脊：ヨコナデ後ヨコハケ ヨコナデ後ナデ	内面に 8 条 1 単位の擂目 口縁端部を内側に折り返す
22	20	74	SD108	瓦質土器	擂鉢	(35.4)	7.5 残	—	密	やや軟質	灰白色 灰色	口：ヨコナデ 脊：ヨコハケ 口：ヨコナデ 脊：ヨコハケ後ナデ、指オサエ	内面に 9 条 1 単位の擂目、注口部有 内面口縁端部に炭化物付着
22	20	75	SD108	瓦質土器	擂鉢	—	5.0 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	口：ヨコナデ 脊：ヨコハケ ヨコナデ	内面に 9 条 1 単位の擂目 備前の影響を受ける
22	20	76	SD108	瓦質土器	擂鉢	—	12.0	—	密	やや軟質	灰色 灰色	ヨコハケ 口：ヨコナデ 脊：タテハケ後ナデ、指オサエ	内面に 7 条 1 単位の擂目 備前の影響を受ける
22	20	77	SD108	瓦質土器	擂鉢	(25.6)	9.7	(13.1)	密	軟質	灰色 灰色	ヨコハケ 口：ヨコナデ 脊：タテハケ後ナデ、指オサエ 脊下端：ハケ目	内面に 10 条 1 単位の擂目、注口部有 口縁端部を内側に折り返す
22	20	78	SD108	青磁	椀	—	2.5 残	—	密	硬質	胎土：灰白色 釉薬：灰オリーブ	ロクロ回転ナデ ロクロ回転ナデ	龍泉窯系、内外面とも施釉 口縁部内外面に退化した雷文を施す
22	20	79	SD108	瓦質土器	蓋	—	1.2 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	ヨコナデ 板目圧痕	かえり貼付
22	20	80	SD108	瓦質土器	湯釜	(15.0)	5.2 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	口・頸：ヨコナデ 肩：ヨコハケ後ナデ消し 口・頸：ヨコナデ 肩：タテハケ後ナデ消し	
22	20	81	SD108	土製品	管状土錐	径 1.3	長さ 5.8	孔径 0.4	密	やや軟質	にぶい赤褐色	芯抜き取り ねじりナデ	土師質焼成、紡錘形
22	20	82	SD108	瓦質土器	甕	—	6.0 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	口・頸：ヨコハケ後ヨコナデ 肩：ヨコハケ 口・頸：ヨコナデ 頸・肩：タテハケ後ナデ消し	
22	20	83	SD108	土師質土器	甕	—	7.0 残	—	密	軟質	にぶい橙色 橙色	摩滅により不明瞭 摩滅により不明瞭	外面口縁部に刺突文
22	21	84	SD108	瓦質土器	焙烙か	—	5.0	—	密	やや軟質	灰色 灰色	ヨコハケ後ヨコナデ 口：ヨコナデ 体下端：指オサエ後ヨコナデ 底：板目圧痕	
22	21	85	SD108	瓦質土器	鉢	—	4.9 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	胴：ヨコハケ 底：ヨコナデ 胴：タテハケ後ヨコナデ、指オサエ	
22	21	86	SD108	瓦質土器	火鉢	(32.0)	11.4 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	口・頸：ヨコナデ 肩：指オサエ後ナデ消し 口：ヨコナデ後ナデ 肩：ヨコハケ後ナデ消し、指オサエ	外面頸部に「二」字状のスタンプ

攝 図 版	No.	出土 場所	種別	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調(内) 色調(外)	主な調整(内) 主な調整(外)	備考	
					口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)						
23	21	87	SP1078	陶器	皿	(11.4)	1.9	(6.7)	密	やや軟質	胎土：灰白色 釉薬：オリーブ灰	体：ロクロ回転ナデ 見込み：蛇の目釉剥ぎ 底：ロクロ削り出し後蛇の目釉剥ぎ	瀬戸美濃系の折縁皿 外面とも施釉(灰釉)し、輪トチンで重ね焼き
23	21	88	SP1001	青磁	水注か	—	2.6 残	(7.2)	密	硬質	胎土：灰白色 釉薬：灰オリーブ	ロクロ回転ナデ 脇：ロクロ回転ナデ 底：ロクロ削り出し	福建省産か 内面・高台外面まで施釉、外底露胎
23	21	89	SP1001	土製品	管状土錐	径 2.4	長さ 5.3	孔径 1.2	密	やや軟質	黄色	芯抜き取り ナデ	土師質焼成、紡錘形
23	21	90	SP1017	瓦質土器	甕	—	11.3 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	ヨコハケ 口・頸：ヨコナデ 脇：タテハケ、格子目タタキ	
23	21	91	SP1111	土製品	管状土錐	径 1.3	長さ 4.7	孔径 0.4	密	やや軟質	橙色 化粧土： 明赤褐色	芯抜き取り 指オサエ、ナデ	端部に化粧土付着 土師質焼成、紡錘形
23	21	92	SP1111	土製品	管状土錐	径 1.2	長さ 4.4	孔径 0.5	密	やや軟質	にぶい橙色 化 粧土：橙色	芯抜き取り 指オサエ、ナデ	化粧土が部分的に付着 土師質焼成、紡錘形
23	21	93	SP1111	土製品	管状土錐	径 1.1	長さ 4.5	孔径 0.4	密	やや軟質	明褐灰色 化粧 土：橙色	芯抜き取り 指オサエ、ナデ	化粧土が部分的に付着 土師質焼成、紡錘形
23	21	94	SP1111	土製品	管状土錐	径 1.2	長さ 4.8	孔径 0.4	密	やや軟質	灰白色	芯抜き取り 指オサエ、ナデ	土師質焼成、紡錘形
23	21	95	SP1111	土製品	管状土錐	径 1.4	長さ 4.6 残	孔径 0.4	密	やや軟質	橙色	芯抜き取り 指オサエ、ナデ	土師質焼成、紡錘形
23	21	96	SP1111	土製品	管状土錐	径 1.2	長さ 4.7	孔径 0.4	密	やや軟質	浅黄橙色	芯抜き取り 指オサエ、ナデ	土師質焼成、紡錘形
23	21	97	SP1111	土製品	管状土錐	径 1.0	長さ 4.0	孔径 0.4	密	やや軟質	橙色 化粧土： 赤橙色	芯抜き取り 指オサエ、ナデ	端部に化粧土付着 土師質焼成、紡錘形
23	21	98	SP1111	土製品	管状土錐	径 1.2	長さ 4.3	孔径 0.4	密	やや軟質	橙色 化粧土： 赤橙色	芯抜き取り 指オサエ、ナデ	端部に化粧土付着 土師質焼成、紡錘形
23	21	99	SP1111	土製品	管状土錐	径 1.1	長さ 4.2	孔径 0.4	密	やや軟質	橙色	芯抜き取り 指オサエ、ナデ	土師質焼成、紡錘形
23	21	100	SP1111	土製品	管状土錐	径 1.1	長さ 4.6	孔径 0.4	密	やや軟質	橙色	芯抜き取り 指オサエ、ナデ	土師質焼成、紡錘形
23	21	101	SP1111	土製品	管状土錐	径 1.4	長さ 4.3 残	孔径 0.4	密	やや軟質	橙色 化粧土： 明赤褐色	芯抜き取り 指オサエ、ナデ	化粧土が部分的に付着 土師質焼成、紡錘形
23	21	102	SP1111	土製品	管状土錐	径 1.2	長さ 4.6	孔径 0.4	密	やや軟質	浅黄橙色	芯抜き取り 指オサエ、ナデ	土師質焼成、紡錘形
23	21	103	SP1111	土製品	管状土錐	径 1.0	長さ 3.5 残	孔径 0.4	密	やや軟質	褐灰色	芯抜き取り 指オサエ、ねじりナデ	土師質焼成、紡錘形
23	21	104	SP1111	土製品	管状土錐	径 1.1	長さ 4.0 残	孔径 0.4	密	やや軟質	橙色	芯抜き取り 指オサエ、ナデ	土師質焼成、紡錘形
23	21	105	SP1111	土製品	管状土錐	径 1.3	長さ 3.8 残	孔径 0.5	密	やや軟質	橙色	芯抜き取り 指オサエ、ナデ	土師質焼成、紡錘形
23	21	106	SP1111	土製品	管状土錐	径 1.1	長さ 3.7 残	孔径 0.4	密	やや軟質	橙色	芯抜き取り 指オサエ、ナデ	土師質焼成、紡錘形
23	21	107	SP1111	土製品	管状土錐	径 1.1	長さ 3.8 残	孔径 0.5	密	やや軟質	橙色 化粧土： 赤橙色	芯抜き取り 指オサエ、ナデ	化粧土が部分的に付着 土師質焼成、紡錘形
23	21	108	SP1111	土製品	管状土錐	径 1.1	長さ 3.3 残	孔径 0.5	密	やや軟質	橙色	芯抜き取り 指オサエ、ナデ	土師質焼成、紡錘形
23	21	109	SP1111	土製品	管状土錐	径 1.0	長さ 2.6 残	孔径 0.3	密	やや軟質	灰白色	芯抜き取り 指オサエ、ナデ	土師質焼成、紡錘形
23	21	110	SP1111	土製品	管状土錐	径	長さ 0.8 残	孔径 —	密	やや軟質	橙色	芯抜き取り 指オサエ、ナデ	土師質焼成、紡錘形
23	21	111	SP1111	土製品	管状土錐	径 1.0	長さ 1.6 残	孔径 0.5	密	やや軟質	橙色 化粧土： 赤橙色	芯抜き取り 指オサエ、ナデ	化粧土が部分的に付着 土師質焼成、紡錘形
23	21	112	SP1056	土師質土器	鉢	(21.9)	4.8	(9.8)	密	やや軟質	灰白色 灰黃褐色	ロクロ回転ナデ 体：ロクロ回転ナデ 底：ヨコナデ	
23	21	113	SP1056	瓦質土器	鍋	—	6.1 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	ヨコハケ タテハケ後ヨコナデ	
23	21	114	SP1041	瓦質土器	擂鉢	(30.1)	7.4 残	—	密	やや軟質	黄灰色 黄灰色	口：ヨコナデ 脇：ヨコハケ タテハケ後ヨコナデ	内面に9条1単位の擂目
23	21	115	SP1052	瓦質土器	甕	(31.3)	14.4 残	—	密	硬質	灰色 灰色	ヨコハケ 口：ヨコナデ 脇：タテハケ後ヨコナデ	
23	22	116	SP1027	土製品	管状土錐	径 1.0	長さ 5.5	孔径 0.4	密	やや軟質	灰白色	芯抜き取り ねじりナデ	土師質焼成、紡錘形
24	22	120	包含層	須恵器	杯(身)	(11.5)	4.7	(6.0)	密	硬質	灰色 灰色	ロクロ回転ナデ 体：ロクロ回転ナデ 底：回転ヘラケズリ	外面部にヘラ記号有
24	22	121	包含層	須恵器	杯(身)	—	3.4 残	—	密	硬質	灰色 灰色	ロクロ回転ナデ ロクロ回転ナデ	
24	22	122	包含層	須恵器	杯(身)	(11.6)	4.8 残	—	密	硬質	灰色 灰色	ロクロ回転ナデ 体：ロクロ回転ナデ 底：回転ヘラケズリ	
24	22	123	包含層	須恵器	杯(身)	(12.0)	3.3 残	—	密	硬質	灰白色 灰白色	ロクロ回転ナデ ロクロ回転ナデ	
24	22	124	包含層	土師器	高杯	—	3.5 残	—	密	軟質	橙色 橙色	摩滅により不明瞭 摩滅により不明瞭	畿内系精製小形(低脚)高杯
24	22	125	包含層	土師器	杯	—	1.6 残	(5.4)	密	軟質	淡黄橙色 淡黄橙色	ロクロ回転ナデ 体：ロクロ回転ナデ 底：回転糸切り	
24	22	126	包含層	瓦質土器	火鉢	—	4.5 残	—	密	やや軟質	灰色 灰色	摩滅により不明瞭 ヨコナデ	外面口縁部に板状工具による縦2列以上の刺突文、突帯部をつまみ出す
24	22	127	表面採集	須恵器	土製円盤	直径 3.9	厚さ 1.2	—	密	やや軟質	灰白色 灰白色	ナデ ハケ後ナデ	須恵器甕肩～胴部の再加工

第3表 出土石器・石製品観察一覧表

挿 図 版	No.	出土場所	種別	器種	法量(cm)(残存値)			重量(g)	石材	備 考	
					長さ	幅	厚さ				
20	18	52	SE101	石製品	石臼	直径 (28.6)	—	8.2	4.02kg	礫岩	粉挽き臼の上臼片 上面 - 下面に粉の供給口が貫通
23	22	118	SP1035	石器	石鏸	1.8	(1.4)	0.3	0.4	姫島産黒曜石	凹基無茎式
23	22	119	SP1067	石器	石鏸	3.0	1.5 残	0.3	0.8	安山岩	平基無茎式
24	22	128	包含層	石器	石鏸	2.9 残	2.1	0.55	2.7	姫島産黒曜石	抉りは深い、先端部欠損、両面より丁寧に加工 縄文早期か(8,000 ~ 1万年前)
24	22	129	表面採集	石器	石鏸	2.0	1.9	0.4	1.0	腰岳産黒曜石か	凹基無茎式、抉りは浅い
24	22	130	包含層	石器	石鏸	2.6	1.7	0.45	0.7	姫島産黒曜石	凹基無茎式、抉りは深い 表裏両面から丁寧に加工
24	22	131	包含層	石器	石鏸	1.7	1.4	0.35	0.5	姫島産黒曜石	凹基無茎式、抉りは浅い

第4表 出土金属製品観察一覧表

挿 図 版	No.	出土場所	種別	器種	法量(cm)(残存値)			重量(g)		備 考
					長さ	幅	厚さ			
19	16	27	SP1083 (SB103)	銭貨	嘉祐通寶か	直径 2.4	—	—	2.1	ほぼ完形 最初の文字は不明瞭
19	17	45	SK142	鉄製品	釘	(5.45)	0.35	0.3	2.1	断面は方形を呈する 頭部を欠損する 木質は残存せず
23	22	117	SP1016	鉄製品	釘	9.9	1.3	1.3	9.5	断面は方形を呈する 頭部はゆるやかに屈曲する

IV 西尾崎1地区調査の成果

1 遺構

西尾崎地区周辺は小さな丘陵と谷筋が交互に入り出する地形的特徴を有し、1地区は南から北に伸びる丘陵縁辺部上に立地する。調査区北側は西から東の方向へ標高9mを超える山田川が天井川となつて流れる。標高は調査区の西側で約8.0m、東側で約5.5mであり、地形は西から東へ向かって緩やかに傾斜する。調査区は大きく北側と南側に分けられる。南側は北側と同じ花崗岩風化砂質土・粘質土で形成されるが、近世以降の耕地化による人為的削平のためか、有意な遺構は確認されなかった。遺構の集中する北側の調査区はほぼ中央を流れる用水路により、2つに分けられている。そのうち標高の高い西半では、層序が表土→耕作土→盤土→客土→堆積土→旧耕作土→旧盤土→堆積土→地山となっており、かつて耕作地を造り変えた様子が見てとれる。東半は層序が概ね、耕土→盤土→堆積土→遺物包含層となるが、一部この遺物包含層上面を遺構面とするところがある。なおこの遺物包含層には中世の遺物が含まれないため、古代までに堆積した層であると判断した。

今回の調査では、掘立柱建物跡7棟、土坑6基、溝8条、柱穴約520個を検出した。遺構の密度は調査区の中央付近が最も高く、東部や西部にかけて徐々に希薄となる。以下、主なものについて取り上げる。

(1)掘立柱建物跡

今回復元できた7棟の掘立柱建物はすべて中央から東側に分布する。棟方向には規則性があり、ほぼ北東から南西の方向を向くものと、北から南の方向を向くものとに大別できる。

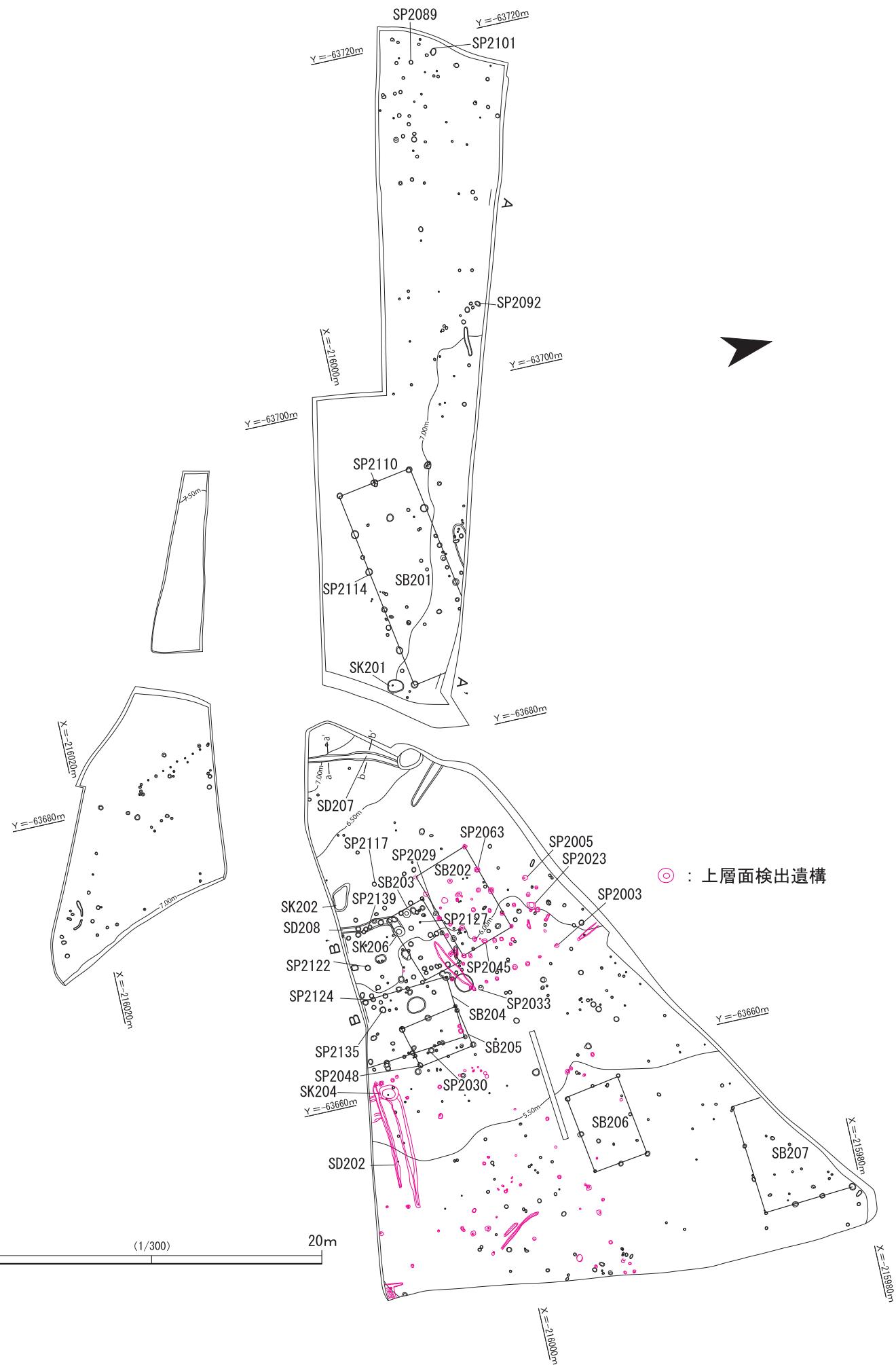
S B201(第27図 図版25) ほぼ中央に位置する大型の建物で、桁行3間(7.4m)×梁行2間(4.4m)、床面積32.56m²を測る。棟方向はN81°Eである。東面、西面に2面の廂を付設していたと考えられる。建物を構成するS P2110から須恵器杯(1・2)、S P2114から棒状土錐(3)、また他の構成柱穴から土師器等が出土した。出土遺物から古代前半の建物と考えられる。

S B202(第27図 図版26) ほぼ中央に位置し、唯一、遺物包含層上の遺構面で確認できた建物である。桁行3間(5.7m)×梁行2間(3.3m)、床面積18.81m²を測る。棟方向はN71°Eである。構成柱穴S P2045から土師器皿(4)、S P2063から須恵器杯(5)、また他の構成柱穴から黒曜石剥片等が出土した。出土遺物には10世紀代以降の土師器皿(4)も含まれるが、棟方向などから古代前半の建物と判断した。

S B205(第28図 図版26) 東部に位置する建物で、桁行2間(3.6m)×梁行1間(2.7m)、床面積9.72m²を測る。棟方向はN13°Wである。構成柱穴S P2048から土師器皿(6)、また他の構成柱穴から土師器等が出土した。出土遺物から中世前半の建物と考えられる。

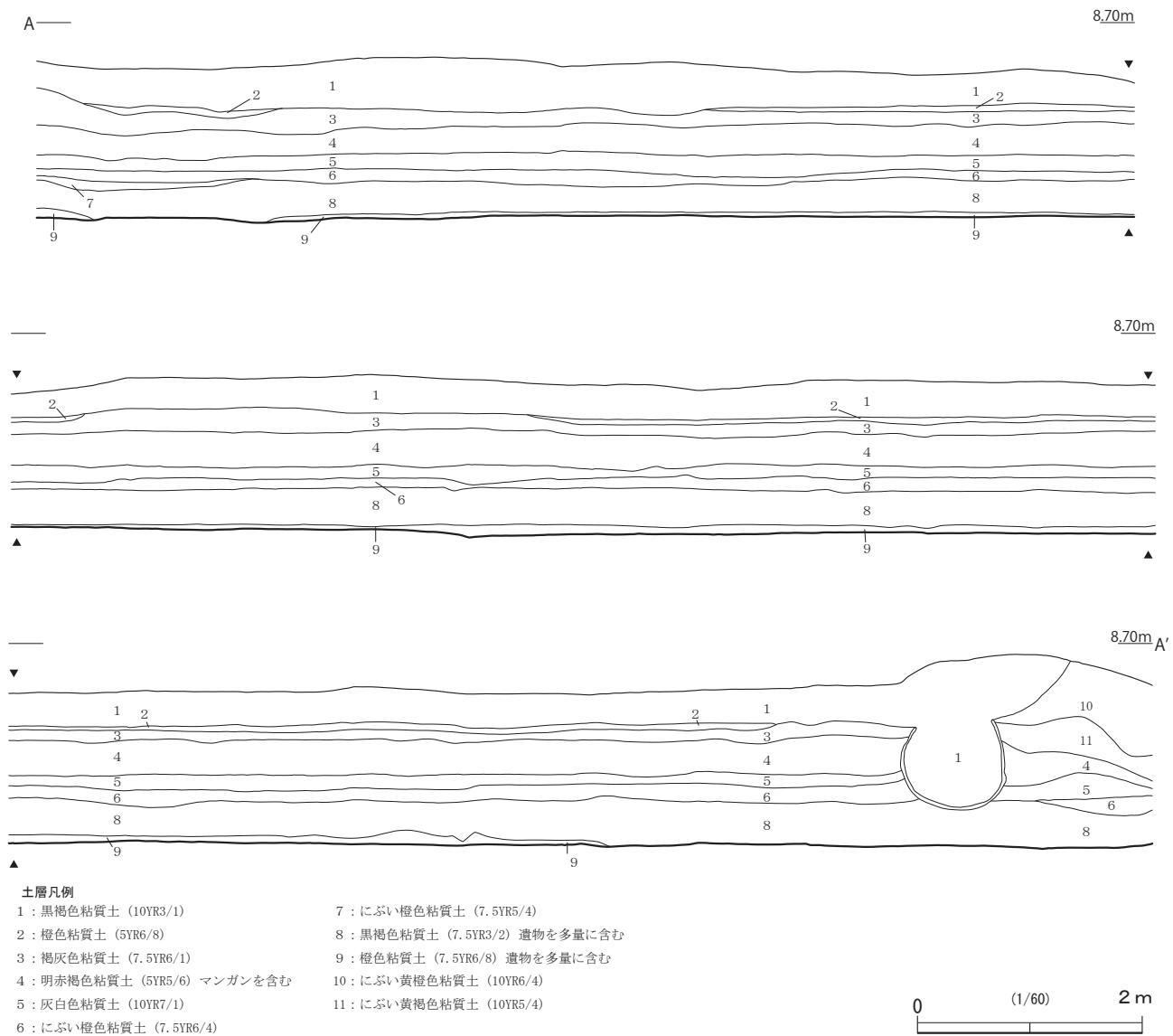
S B206(第28図 図版27) 東部に位置する建物で、桁行2間(4.9m)×梁行2間(3.2m)、床面積15.68m²を測る。棟方向はN83°Eである。構成柱穴から土師器、須恵器等が出土した。出土遺物から古代前半の建物と考えられる。

S B207(第28図 図版27) 北東部に位置する建物で、桁行3間(5.3m)×梁行2間(4.2m)、床面積

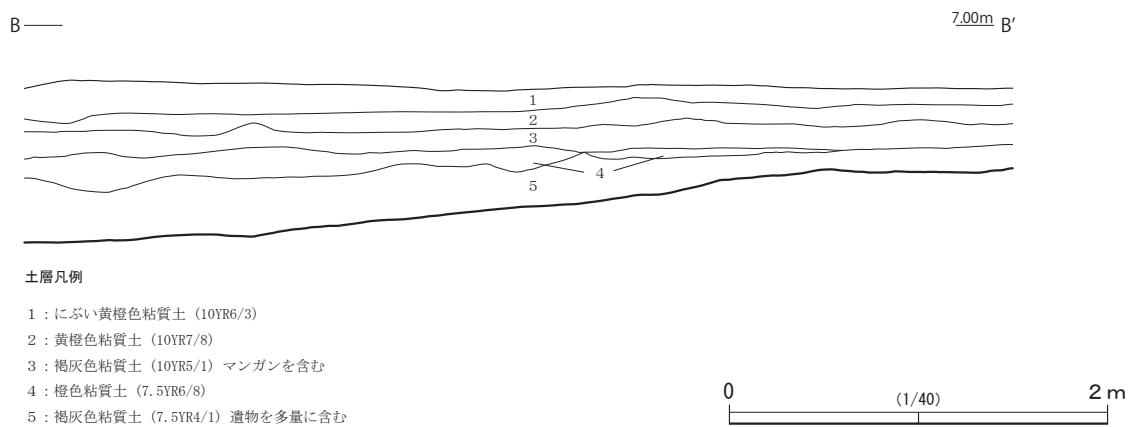


第25図 西尾崎1地区遺構配置図

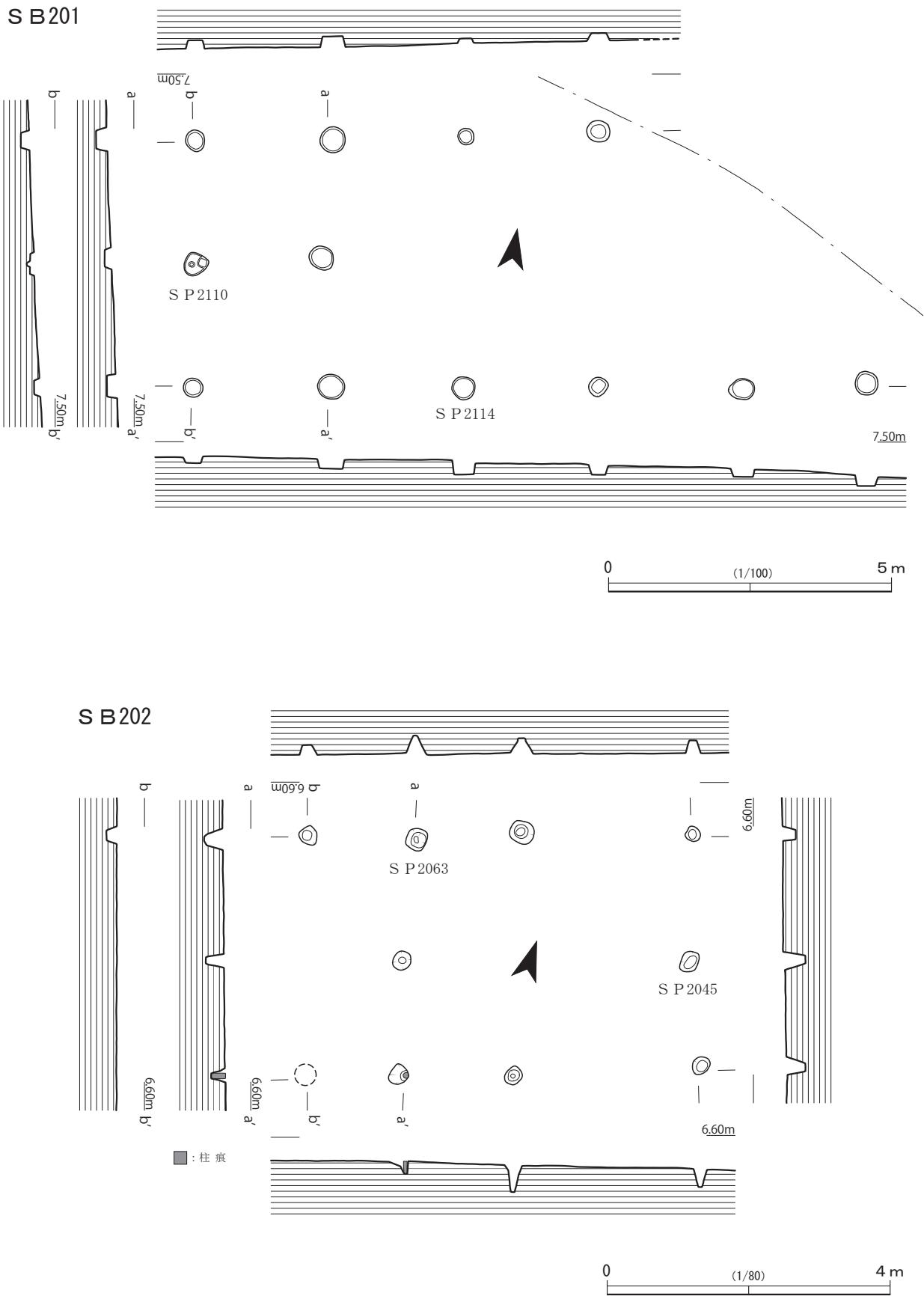
西尾崎 1 地区北壁土層断面図



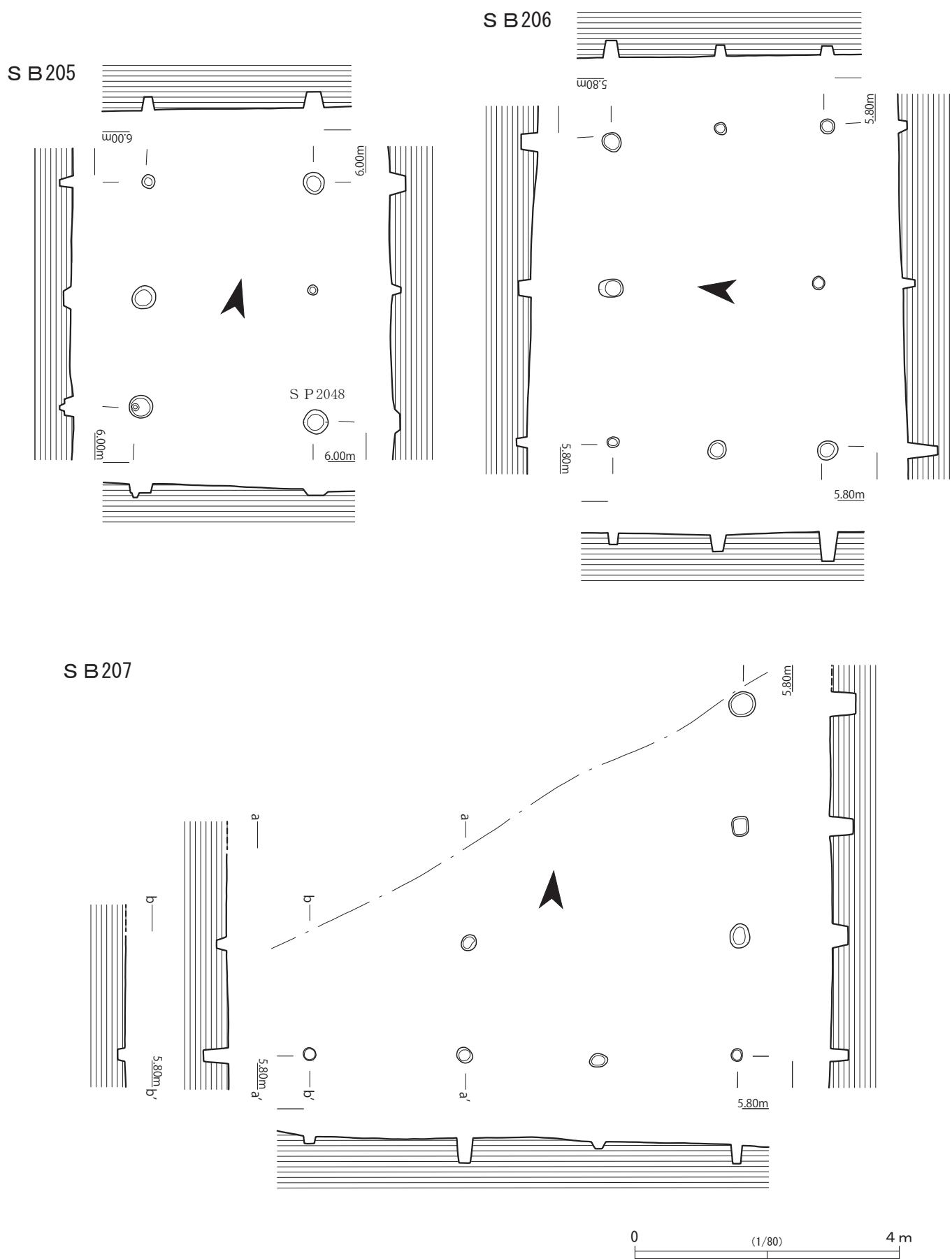
西尾崎 1 地区南壁土層断面図



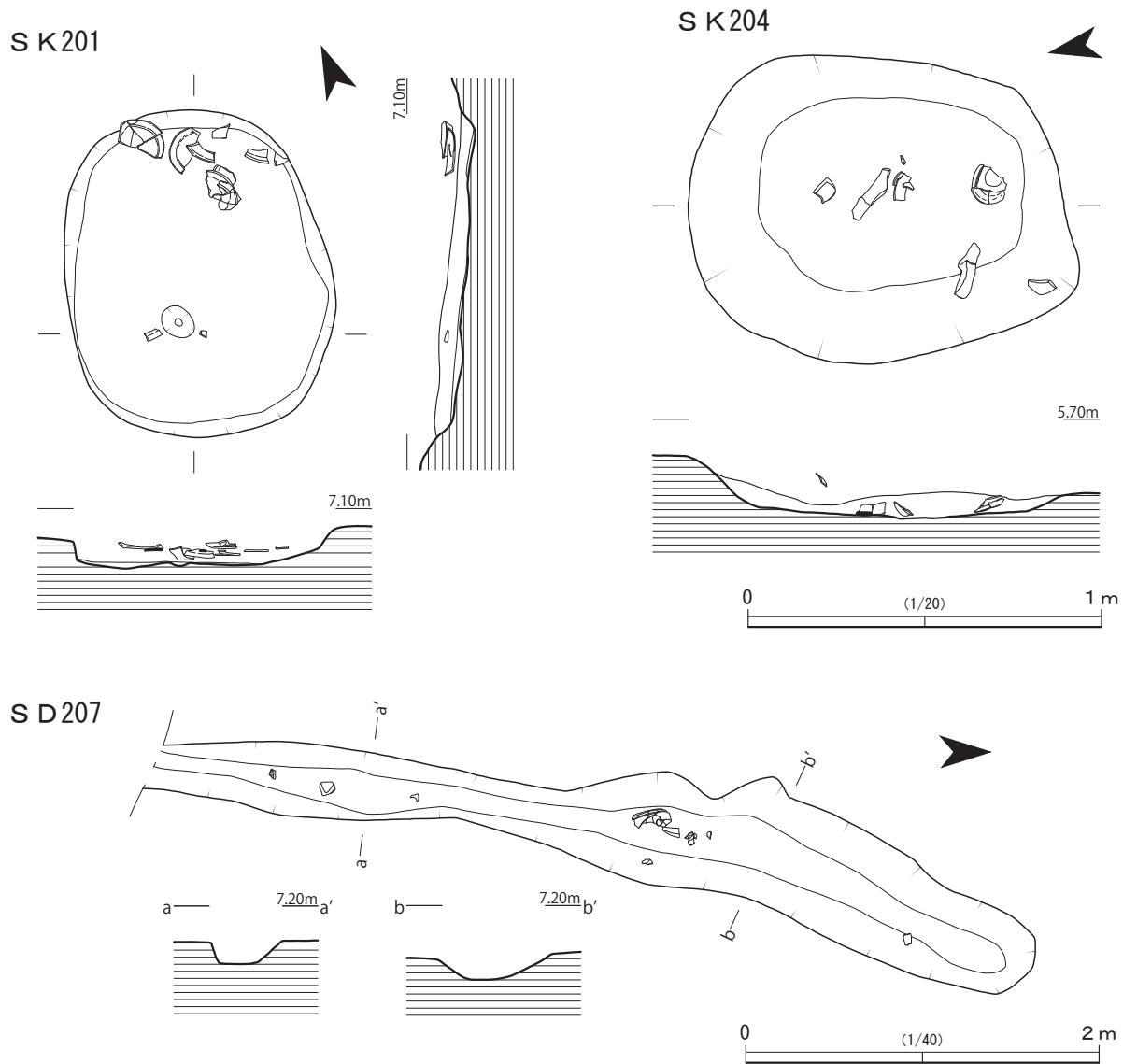
第26図 西尾崎 1 地区土層断面図



第27図 S B201・202実測図



第28図 S B205・206・207実測図



第29図 SK 201・204・SD 207実測図

22.26m²を測る。棟方向はN 4° Wである。出土遺物はなく、建物の時期は不明である。

(2) 土坑

6基の土坑が検出された。中央部と東部に集中し、南部と西部に少ない。深さが5～20cm程度のものが多く、列をなして配置されたものは確認できなかった。以下、主なものについて取り上げる。

SK 201(第29図 図版27) 中央部に位置し、平面形は橢円形を呈する。規模は長軸93cm、短軸76cm、深さ8cmを測る。検出面に近い位置で、須恵器杯(7・8)が出土した。出土遺物から8世紀後半～9世紀初頭の遺構であると考えられる。

SK 204(第29図 図版27) 東部の上層遺構面の溝中で確認され、平面形は橢円形を呈する。規模は長軸106cm、短軸86cm、深さ15cmを測る。埋土中から土師器杯(10)、土師器碗(11)が出土した。出土遺物から古代後半期の遺構と考えられる。

(3) 溝

8条の溝が検出された。いずれも数cm～14cmと浅く、方向に明確な規則性は見られない。また出

土遺物も小片のものが多く、時期や年代も不明なものが多い。

S D 207(第29図 図版28) 中央部に位置し、南から北へ走行する。確認長は5.11m、幅27～62cm、深さ12～14cmである。埋土中から土師器杯(16)、土師質土器足釜(17)が出土した。出土遺物から中世前半期の遺構とみられる。

(4)柱穴

検出された柱穴は520個あまりで、南部に少なく、東部に集中している。沖ノ下1地区に比べて遺物を含む柱穴が多く、約3割にあたる159個の柱穴から遺物が出土している。以下、主なものを取り上げる。

S P 2110(S B 201)(第30図 図版28) 西部に位置し、S B 201を構成する柱穴の一つである。規模は径38～47cm、深さ15cmを測る。上面に近い位置で須恵器杯(1・2)が出土した。出土遺物から8世紀後半～9世紀初頭に比定される。

S P 2063(S B 202)(第30図 図版28) 中央部の上層遺構面で確認され、S B 202を構成する柱穴の一つである。規模は径31～33cm、深さ26cmを測る。検出面に近い位置で須恵器杯(5)が出土した。出土遺物から8世紀後半～9世紀初頭の遺構と考えられる。

S P 2048(S B 205)(第30図 図版28) 東部に位置し、S B 205を構成する柱穴の一つである。規模は径27～34cm、深さ39cmを測る。埋土中位で土師器皿(6)が出土した。出土遺物から14世紀の遺構と考えられる。

S P 2003(第30図 図版28) 中央部の上層遺構面で確認され、規模は径22～26cm、深さ39cmを測る。埋土中から土師器杯(26・34・35・36・37)、須恵器が出土した。これらの遺物から中世前半期の遺構であると考えられる。

S P 2023(第31図 図版28) 中央部の上層遺構面で確認され、平面形は不整円形を呈し、規模は長軸54cm、短軸38cm、深さ43cmを測る。埋土上位で土師器皿(29・30)、土師器杯(31)が出土した。出土遺物から14世紀の遺構とみられる。

S P 2030(第31図 図版28) 東部のS B 205内に位置し、規模は径33～34cm、深さ23cmを測る。埋土中位から青磁碗(32)、須恵器甕、土師器が出土した。これらの出土遺物から12世紀後半に比定される。

S P 2033(第31図 図版29) 中央部に位置し、規模は径27～30cm、深さ33cmを測る。埋土中位から瓦質土器大甕(42)が出土し、埋土下位から土師器碗と須恵器甕が出土した。出土状況から古代後半期の遺構であると考えられる。

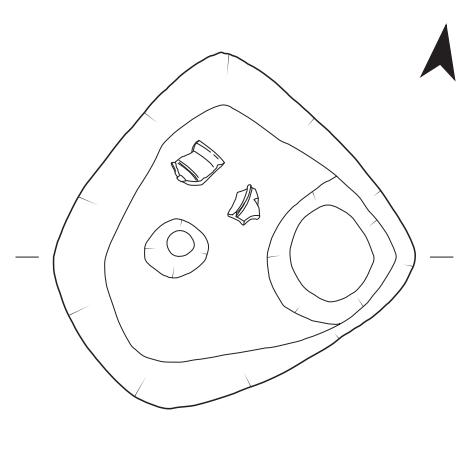
S P 2092(第31図 図版29) 西部に位置し、平面形は橢円形を呈し、規模は長軸47cm、短軸29cm、深さ13cmを測る。埋土上位から須恵器杯(38)が出土した。出土遺物から8世紀後半～9世紀初頭に比定される。

S P 2122(第31図 図版29) 中央部に位置し、規模は33～34cm、深さ40cmを測る。埋土中から土師器皿(24)、瓦質土器(25)が出土した。出土遺物から14世紀の遺構とみられる。

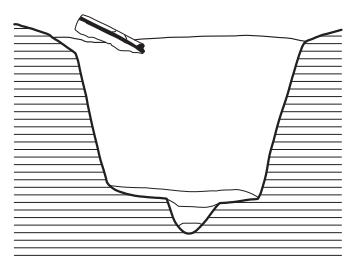
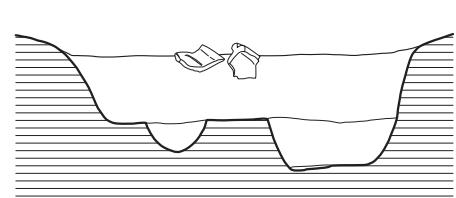
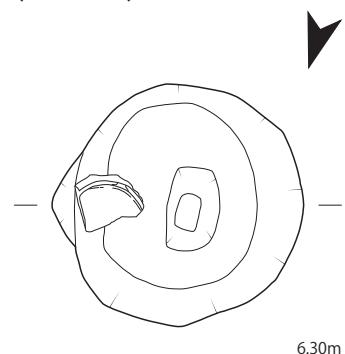
S P 2124(第32図 図版29) 中央部に位置し、規模は径24～31cm、深さ31cmを測る。二段掘りがされており、埋土下位で土師器が出土したが、小片のため詳細な年代を決定する資料とはならなかった。

S P 2135(第32図 図版29) 中央部に位置し、規模は径33～37cm、深さ24cmを測る。底面に近い位置から瓦質土器足鍋(41)が出土した。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

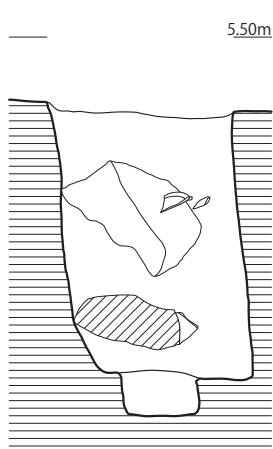
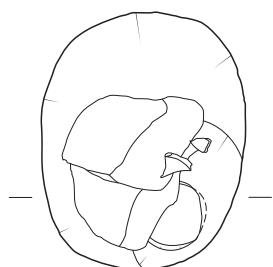
S P 2110 (S B 201)



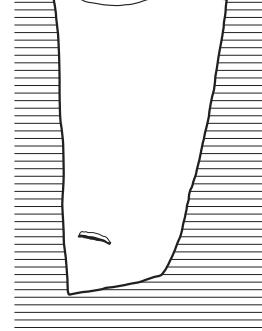
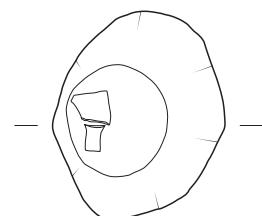
S P 2063 (S B 202)



S P 2048 (S B 205)

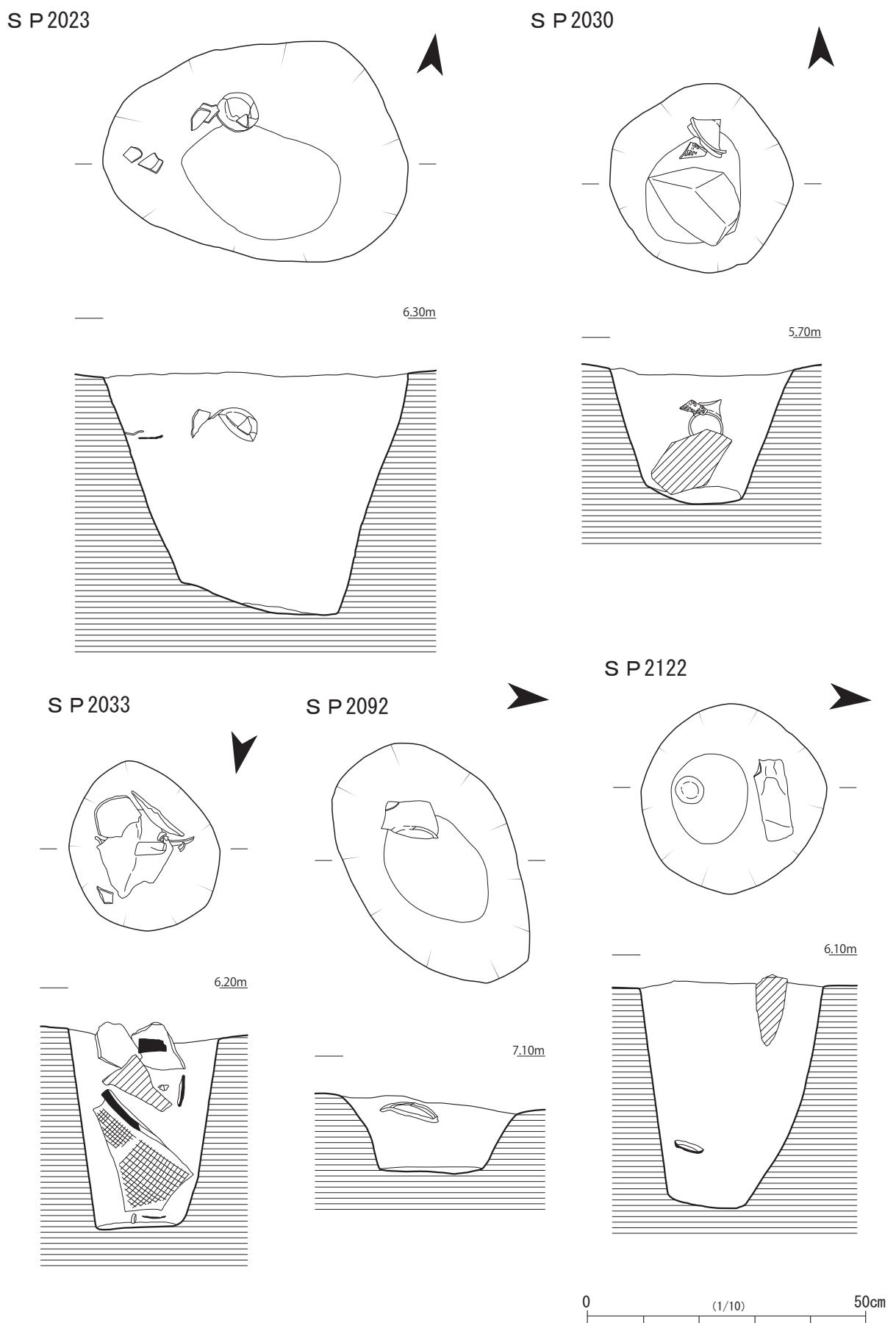


S P 2003

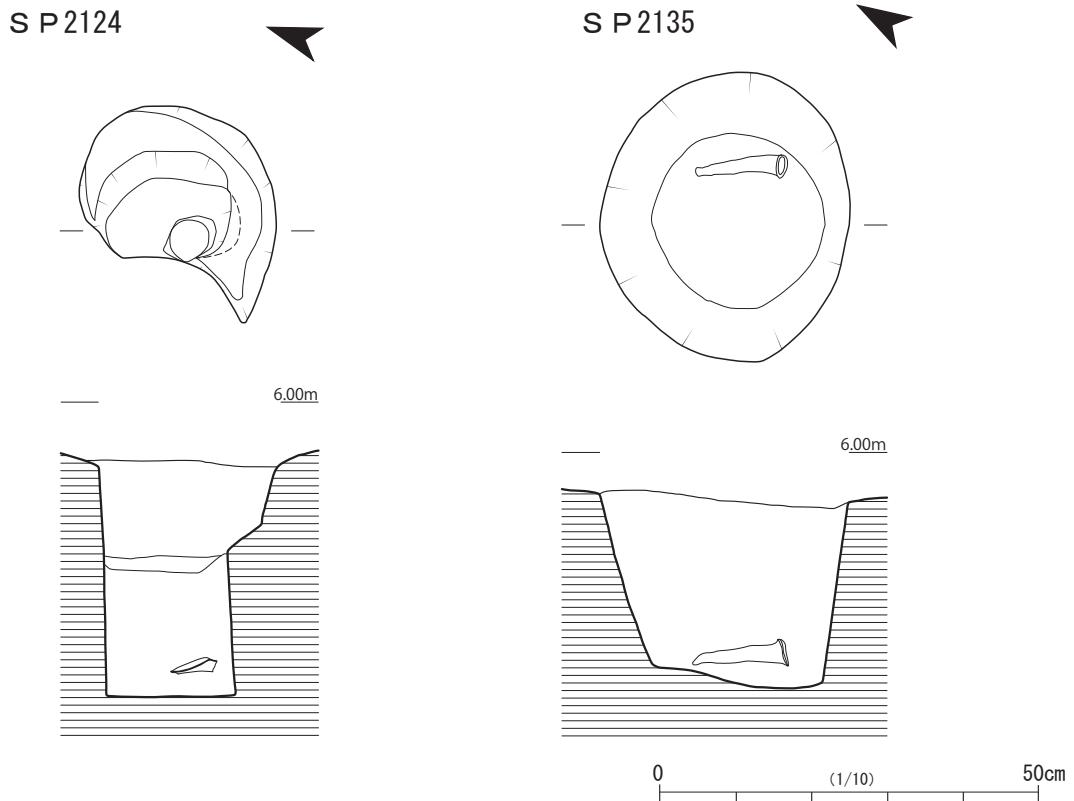


0 (1/10) 50cm

第30図 S P 2110 (S B 201) · 2063 (S B 202) · 2048 (S B 205) · 2003 実測図



第31図 SP 2023・2030・2033・2092・2122実測図



第32図 SP 2124・2135実測図

第5表 掘立柱建物跡一覧表

規模・面積の()は残存規模

遺構番号	規模(間)	棟方向	柱間		面積 (m ²)	出土遺物	備考 (※:調査区外へ続く可能性あり)
			桁行	梁行			
			建物の南東隅から (m)	建物の南東隅から (m)			
SB 201	3×2	N 81° E	7.4(2.5・2.4・2.5)	* 4.4(2.2・2.2)	32.56	土師器 須恵器 土錐	東面に廂(2.2 m)、 西面に廂(2.4 m) *柱間南北隅から 古代前半
SB 202	3×2	N 71° E	* 5.7 (2.7・1.5・1.5)	3.3(1.5・1.8)	18.81	土師器 須恵器 姫島産黒曜石剥片	*遺構検出時柱穴の位置 による推定 古代前半
SB 203	2×1	N 72° E	4.1(1.9・2.2)	2.3	9.43	土師器	
SB 204	(1)×2	N 6° W	2.5	3.7(1.9・1.8)	(9.25)	須恵器 土師質土器	北面に廂(1.4 m)
SB 205	2×1	N 13° W	3.6(1.9・1.7)	2.7	9.72	土師器 土師質土器	中世前半
SB 206	2×2	N 83° E	4.9(2.4・2.5)	3.2(1.6・1.6)	15.68	土師器 須恵器	古代前半
SB 207	3×2	N 4° W	5.3(1.8・1.7・1.8)	4.2(2.1・2.1)	22.26		西面に廂(2.3 m) ※

2 遺物

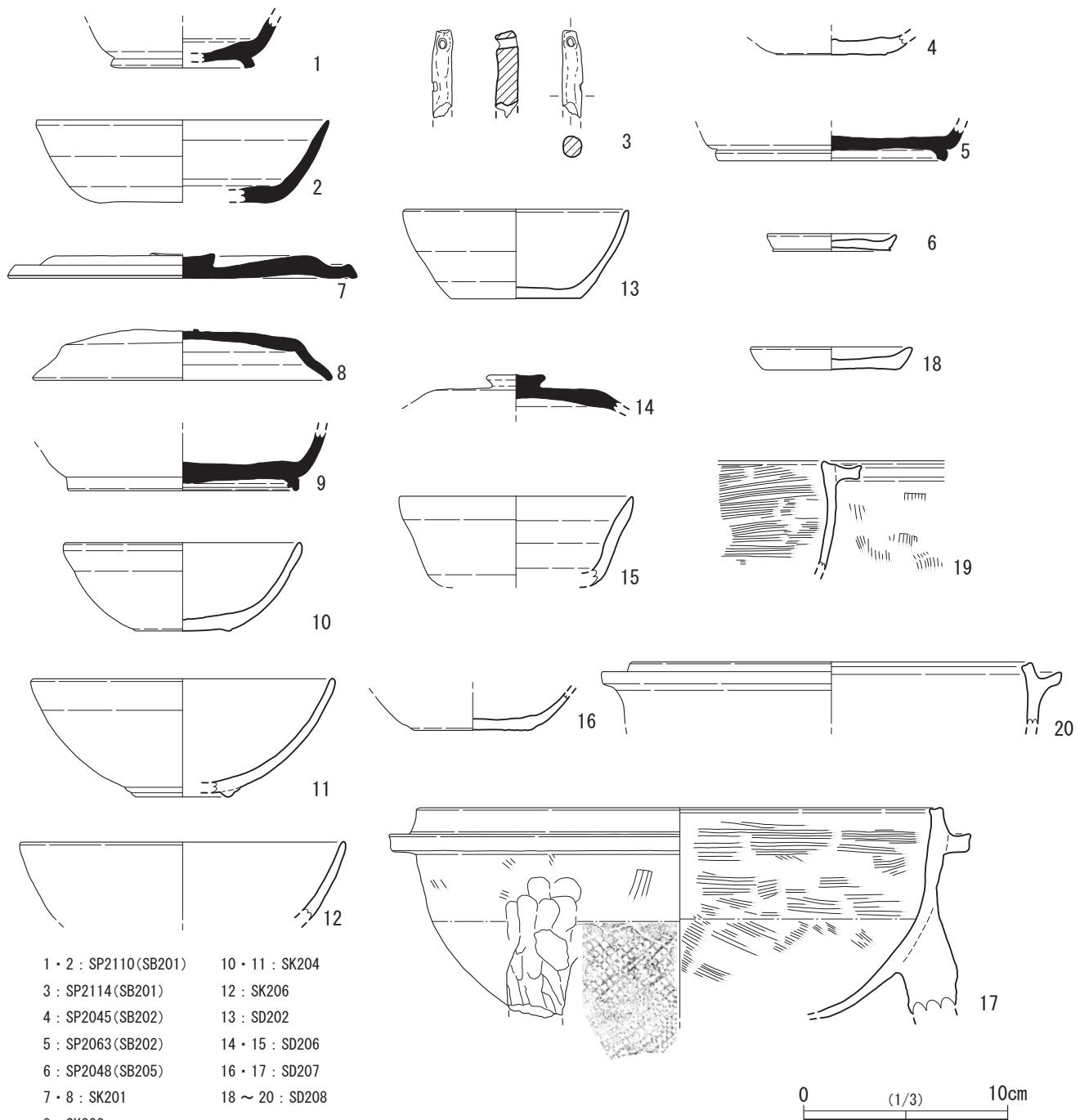
西尾崎1地区で出土した主な遺物は、土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器で、このほかに青磁と土錐がある。年代は、おおむね古代～中世前半の時期幅におさまる。特に、須恵器は杯B類が多く出土し、型式学的な特徴から8世紀後半～9世紀初頭に比定される。以下、遺物についての主な特徴を述べる。なお、詳細については、遺物観察表に掲載しているので併せて参照されたい。

1～6は掘立柱建物の各柱穴から出土した遺物である。1～3はSB201出土で、1・2は須恵器の杯身である。どちらも底部切り離しは回転ヘラ切り技法によるが、1は断面四角形の高台を有する。3は棒状土錐である。指オサエやナデによる成形の後、端部を裁ち落として仕上げている。片面穿孔である。4・5はSB202出土土器。4は土師器皿で底部回転糸切り、5は須恵器杯身で底部回転ヘラ切り後高台を貼付する。6はSB205出土の土師器皿で底部に回転糸切り痕を残す。

7～12は各土坑出土の土器である。7・8はSK201出土の須恵器の杯蓋。7は回転ナデの後静止ナデを行う丁寧なつくりだが、8は頂部に回転ヘラ切り痕を残したままで焼成は不良。灰白色の色調を呈する。7には一部に重ね焼きした際のものと思われる変色が確認できる。9はSK202出土の須恵器の杯身で、底部回転ヘラ切り後に高台を貼り付ける。内部に空気が入り込み、見込みに凹凸がある。10・11はSK204出土の土師器の杯と椀である。10は底部に回転糸切り痕が残る。11は底部切り離し技法は摩滅により不明で、高台を貼り付けている。12はSK206出土の土師器の杯と思われる。内湾気味に立ち上がり、灰白色の色調を呈する。

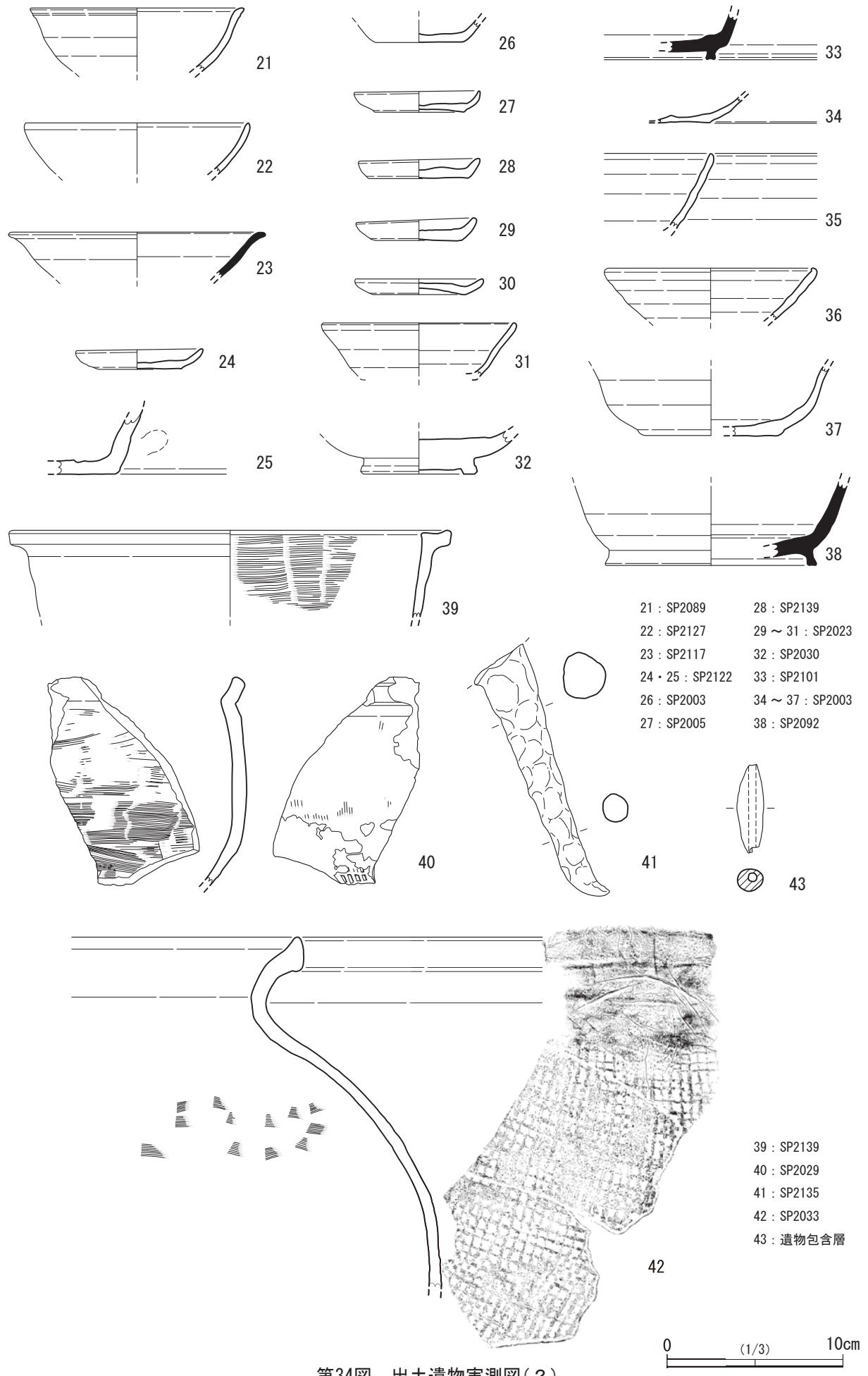
13～20は各溝出土の土器である。13はSD202出土で、底部に回転糸切りの際の粘土塊が付着している。箱型で橙色の色調を呈する、中世前期に特徴的な在来系の土師器杯である。14は須恵器の杯蓋、15は土師器の杯でどちらもSD206からの出土。14は焼成不良のため、内面がにぶい橙色の色調を呈する。16・17はSD207出土の土師器杯と土師質土器の足釜である。16の底部切り離しは回転糸切りによる。17の足釜は丁寧なつくりで器壁が薄く仕上げられている。格子目タタキを一部ナデ消すという、在地系煮炊具の初期の特徴をもつ。外面に煤、内面にコゲが付着している。18～20はSD208出土の土器である。18は土師器皿で回転糸切り痕を残す。19・20はどちらも瓦質焼成の羽釜である。20は内面のヨコハケを丁寧にナデ消している。

21～42は各柱穴出土の遺物群である。24・27～30の土師器皿はいずれも法量が近似し、橙色系の色調を呈する。いずれも中世前期に比定される。21はSP2089出土の土師器。口縁端部が外反するため、椀と判断した。灰白色の色調を呈し、軟質焼成である。22はSP2127出土の土師器の杯で、体部が内湾気味に立ち上がる。23はSP2117出土の須恵器の杯身で、口縁端部が外反する。24・25は土師器皿と瓦質の焙烙と思われるもので、ともにSP2122出土。土師器皿は内外面が一部黒色化し、二次焼成を受けたものと思われる。25も体部から底部にかけて一部黒色化している。26はSP2003出土の土師器の杯、27・28は土師器の皿でそれぞれSP2005とSP2139より出土した。29～31はSP2023出土遺物。29・30は土師器の皿、31は土師器の杯で体部が斜め上方に直線的に立ち上がる形態を呈する。32はSP2030出土の青磁の椀である。底部は肉厚で、高台部疊付けおよびその内部は露胎である。二次焼成を受けているため、高台が橙色の色調を呈する。12世紀後半頃に比定される。龍泉窯系。



33はS P 2101出土の須恵器の杯身で高台を貼り付ける。34～37はS P 2003出土の土師器の杯である。34～36は橙色の色調を呈すが、37のみ灰白色の色調を呈し、軟質焼成である。38はS P 2092出土の須恵器の杯身で底部に高台を貼り付ける。39は土師質土器の羽釜でS P 2139より出土した。40はS P 2029出土の瓦質土器の鍋である。口縁部の型式的特徴や内外面のヨコハケをナデ調整により消す傾向から、14世紀後半頃の所産と考えられる。41は瓦質の足鍋の脚でS P 2135より出土した。端部が外反している。42は瓦質焼成の大甕でS P 2033より出土した。外面胴部をタテハケの後格子目タタキで調整している。

43は遺物包含層より出土した管状土錐である。土師質焼成で紡錘形を呈する。



第34図 出土遺物実測図(2)

第6表 出土土器・土製品観察一覧表

掲 図 版	図 版 No.	出土 場所	種別	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調(内) (外)	主な調整(内) (外)	備 考	
					口径 (復元値)	器高 (残存値)	底径 (復元値)						
33	30	1	SP2110 (SB201)	須恵器	杯(身)	—	2.0 残	(6.0)	密	硬質	灰色 灰色	体：回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 胴：回転ナデ 底：回転ヘラ切り後貼付高台	
33	30	2	SP2110 (SB201)	須恵器	杯(身)	(14.2)	4.0	(8.8)	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナデ 体：回転ナデ 底：回転ヘラ切り	
33	30	3	SP2114 (SB201)	土製品	棒状土錐	径 1.1	長さ 4.2 残	孔径 0.5	密	やや軟質	— 橙色	— 指オサエ、ナデ 端：裁ち落とし	土師質焼成 片側穿孔
33	30	4	SP2045 (SB202)	土師器	皿	—	0.9 残	5.3	密	やや軟質	橙色 橙色	摩滅により不明瞭 底：回転糸切り	
33	30	5	SP2063 (SB202)	須恵器	杯(身)	—	1.5 残	(11.0)	密	硬質	灰白色 灰白色	回転ナデ後静止ナデ 胴：回転ナデ 底：回転ヘラ切り後貼付高台	
33	30	6	SP2048 (SB205)	土師器	皿	(6.1)	0.9	(5.7)	密	やや軟質	橙色 橙色	回転ナデ 体：回転ナデ 底：回転糸切り	
33	30	7	SK201	須恵器	杯(蓋)	16.7	1.1	—	密	硬質	中心部：灰色 端部：灰白色 中心部：灰色 端部：灰白色	回転ナデ後静止ナデ 回転ナデ後静止ナデ、つまみ貼付	外面一部変色(重ね焼き痕跡)
33	30	8	SK201	須恵器	杯(蓋)	14.3	2.4	11.4	密	やや軟質	灰白色 灰白色	回転ナデ後静止ナデ 体：回転ナデ 頂：回転ヘラ切り後ナデ	
33	30	9	SK202	須恵器	杯(身)	—	2.8 残	11.2	密	硬質	灰白色 灰白色	見込み：回転ナデ後静止ナデ 胴：回転ナデ 底：回転ヘラ切り後貼付高台	内部に空気が入り、見込みが歪む
33	30	10	SK204	土師器	杯	(11.4)	4.3	(4.6)	密	軟質	橙色 橙色	体：回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 胴：回転ナデ 底：回転糸切り後ナデ	
33	30	11	SK204	土師器	椀	(14.5)	5.7	(4.4)	密	軟質	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ 底：摩滅により不明瞭、貼付高台	
33	30	12	SK206	土師器	杯	(15.6)	3.8 残	—	密	やや軟質	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	
33	30	13	SD202	土師器	杯	(10.8)	4.3	(6.3)	密	軟質	橙色 橙色	摩滅により不明瞭 摩滅により不明瞭 底：回転糸切り	底部に回転糸切り時の粘土塊有
33	30	14	SD206	須恵器	杯(蓋)	—	1.4 残	—	密	硬質	にぶい橙色 灰褐色	回転ナデ後静止ナデ 回転ナデ後静止ナデ、つまみ貼付	焼成不十分のため、赤みを帯びる
33	30	15	SD206	土師器	杯	(11.3)	4.4 残	—	密	やや軟質	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	
33	30	16	SD207	土師器	杯	—	1.8 残	(5.6)	密	軟質	橙色 橙色	回転ナデ 体：回転ナデ 底：回転糸切り	
33	31	17	SD207	土質土器	足釜	(25.2)	10.2 残	—	密	やや軟質	浅黄橙色 浅黄橙色	ヨコハケ 口縁：ヨコナデ 脇：タテハケ後ナデ、指オサエ 底：格子目タタキ後ナデ消し	外面煤、内面コゲ付着
33	31	18	SD208	土師器	皿	(7.9)	1.1	(6.6)	密	やや軟質	橙色 橙色	モロハケ 底：回転糸切り	
33	31	19	SD208	瓦質土器	羽釜	—	5.3 残	—	密	やや軟質	オリーブ黒色 オリーブ黒色	ヨコハケ 口縁：ヨコナデ 脇：タテハケ後ナデ、指オサエ	
33	31	20	SD208	瓦質土器	羽釜	(19.5)	3.0 残	—	密	やや軟質	オリーブ黒色 暗灰色	ヨコハケ後ナデ消し ヨコナデ	
34	31	21	SP2089	土師器	椀	(11.9)	3.4 残	—	密	軟質	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	
34	31	22	SP2127	土師器	杯	(12.5)	2.8 残	—	密	やや軟質	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	
34	31	23	SP2117	須恵器	杯(身)	(14.0)	2.6 残	—	密	硬質	灰白色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
34	31	24	SP2122	土師器	皿	7.1	1.1	4.7	密	やや軟質	橙色 橙色	回転ナデ 体：回転ナデ 底：回転糸切り	内外面黒色化
34	31	25	SP2122	瓦質土器	焙烙か	—	3.4 残	—	密	やや軟質	灰白色 灰白色	ヨコナデ ヨコナデ 脇：タテハケ、指オサエ後ナデ消し 底：板目圧痕	外面一部黒色化
34	31	26	SP2003	土師器	杯	—	1.2 残	(4.9)	密	やや軟質	橙色 橙色	回転ナデ 体：回転ナデ 底：回転糸切り	
34	31	27	SP2005	土師器	皿	7.1	1.1	5.1	密	やや軟質	橙色 橙色	回転ナデ 体：回転ナデ 底：回転糸切り	
34	31	28	SP2139	土師器	皿	6.8	1.0	5.6	密	やや軟質	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ 体：回転ナデ 底：回転糸切り	
34	31	29	SP2023	土師器	皿	6.7	1.1	4.8	密	やや軟質	橙色 橙色	モロハケ モロハケ	
34	31	30	SP2023	土師器	皿	(7.1)	0.9	(5.1)	密	やや軟質	橙色 橙色	モロハケ モロハケ	
34	32	31	SP2023	土師器	杯	(10.8)	2.9 残	(6.5)	密	やや軟質	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	
34	32	32	SP2030	青磁	椀	—	2.4 残	6.2	密	硬質	胎土：灰白色 釉薬：灰白色	回転ナデ 体：回転ナデ 底：ロクロ削り出し	龍泉窯系、二次焼成を受ける 内面のみ施釉、高台露胎
34	32	33	SP2101	須恵器	杯(身)	—	2.3 残	—	密	硬質	灰白色 灰白色	体：回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 体：回転ナデ 底：摩滅により不明瞭、貼付高台	
34	32	34	SP2003	土師器	杯	—	1.3 残	—	密	やや軟質	橙色 橙色	見込み：回転ナデ後静止ナデ 体：回転ナデ 底：回転糸切り	
34	32	35	SP2003	土師器	杯	—	4.2 残	—	密	やや軟質	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	
34	32	36	SP2003	土師器	杯	(11.6)	2.9 残	—	密	やや軟質	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	
34	32	37	SP2003	土師器	杯	—	3.8 残	(7.5)	密	軟質	灰白色 灰白色	体：回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 体：回転ナデ 底：摩滅により不明瞭	
34	32	38	SP2092	須恵器	杯(身)	—	4.5 残	(11.8)	密	硬質	灰色 灰色	体：回転ナデ 見込み：回転ナデ後静止ナデ 体：回転ナデ 底：回転ナデ後貼付高台、板目圧痕	
34	32	39	SP2139	土質土器	羽釜	(24.4)	4.9 残	—	密	やや軟質	浅黄橙色 にぶい橙色	ヨコハケ 口縁：ヨコナデ 脇：タテハケ後ナデ、指オサエ	
34	32	40	SP2029	瓦質土器	鍋	—	11.7 残	—	密	やや軟質	黄灰色 黒褐色	口：ヨコナデ 脇：ヨコハケ後ナデ消し 口：ヨコナデ 脇：タテハケ後ナデ消し 底：格子目タタキ	外面煤付着
34	32	41	SP2135	瓦質土器	足鍋(脚)	—	14.2 残	—	密	やや軟質	— 暗灰色	— 手づくね形成、指オサエ、ナデ	
34	32	42	SP2033	瓦質土器	大甕	—	19.8 残	—	密	やや軟質	灰白色 灰白色	口・頸：ヨコナデ 脇：ヨコハケ 口・頸：ヨコナデ 脇：タテハケ 脇：タテハケ後格子目タタキ	
34	32	43	包含層	土製品	管状土錐	径 1.5	長さ 4.9	孔径 0.4	密	やや軟質	— 灰黄色	芯抜き取り 指オサエ、ナデ	紡錘形 土師質焼成

V まとめ

1 はじめに

下津令遺跡は南北1.2km、東西数百mにおよぶ広大な遺跡であり、谷を挟む各段丘上に営まれた複数の遺跡から構成されている。今回の発掘調査により、沖ノ下1地区は古墳時代および中世の集落跡であること、また西尾崎1地区は古代から中世にかけての集落跡であることを確認することができた。しかし、下津令遺跡の発掘調査は次年度以降も継続して行われる予定であり、遺跡全体の性格は今後の調査の結果を待って判断する必要がある。以下、両地区で検出された特徴的な遺構・遺物を取り上げ、今年度の調査成果のまとめとしたい。

2 沖ノ下1地区について

沖ノ下1地区では、縄文時代のものと認められる遺物を確認できたが、明確な遺構を伴っておらず、定住が開始されたとは言い難い。人々が定住した明確な痕跡が認められるのは、古墳時代に入ってからである。この時期に方形堅穴建物跡S I 101とS I 103が築造される。このうちS I 101は中央に炉をもち、屋外に周溝を備えた古墳時代前期の特徴的な建物跡である。屋外周溝をもつ住居は下関市高野遺跡、吉永遺跡、田布施町開明遺跡などで確認されているが、これまで県中央部では類例に乏しい。なおS I 101・S I 103は放射性炭素年代測定の結果では弥生時代後期に存在した可能性を指摘されているが、出土遺物は一部に終末期の土器が含まれるもの、古墳時代の土師器が多く、古墳時代前期の建物と判断した。これまで防府市大道地区では、古墳時代以前の集落跡は見つかっていなかった。堅穴建物跡が見つかったことにより、少なくとも古墳時代前期には台道地区に人々が定住していたことが明確となった。

なお、S I 101内とS I 103内の床面には性格不明のS X 101とS X 102が認められ、同様の構造をもつことから、どちらも同じ用途をもつ遺構と考えられる。出土状況からは建物廃絶後、甕などの大型土器を伏せて周囲を燃焼させた可能性もあり、建物廃絶に伴う何らかの祭祀儀礼の痕跡をとどめたものとも考えられるが、現在のところ、類例に乏しく推測の域を出るものではない。

また1地区中央に位置する方形堅穴建物跡S I 102は左右の袖と長い煙道をもつ造り付けカマドを備えている。本格的なカマドをもつ堅穴建物としては、山口市白石遺跡の山口大学教育学部附属山口小学校の試掘調査で発見された堅穴建物とともに、県内では最も古い5世紀前半のものと考えられ、カマドが導入された時期の様相を知る上でも重要である。建物跡のカマド内と床面からは在地色を残す布留式の甕が出土した。

古代については遺物の出土は認められたが、集落の痕跡は確認出来なかった。後述する西尾崎1地区は沖ノ下1地区よりも標高が1～2m程高く、古代の遺構が確認されていることから、その理由の1つとして平安海進期に沖ノ下1地区近辺まで海水面が湾入りし、安定した居住環境ではなかつた可能性も指摘しておきたい。

中世に入ると掘立柱建物跡や土坑の数が増加し、集落の隆盛期を迎える。復元された15棟の掘立柱建物跡は棟方向が南北を意識するものと東西を意識するものとの2つに分けられるが、出土遺物や建

物の重複関係などから、全体的な集落の構造や時期ごとの面的広がりをとらえるまでには至っていない。ただ、掘立柱建物跡のうち、S B 115はS D 108が建物に合わせるように屈曲して流れ、今回検出した建物跡の中で面積は最大である。また隣接するS B 108は2面の廂を持ち、柱穴も大きい。これら調査区西側の2棟は、集落内での有力者層に関わる建物跡である可能性が考えられ、集落の中心はさらに1地区の西に広がっていたことが予想される。

またこのS D 108から出土した土器群は中世後期の良好な一括資料である。特に瓦質土器は、様々な形式の鍋または足鍋の他、擂鉢、甕、湯釜、火鉢などが廃絶後の溝に大量に廃棄されていた。この地域の瓦質土器のセット関係を知り、編年を考える上で重要な資料と考えられる。さらに調査区北西部のS P 1111からは小片も含め21本の管状土錐がまとめて出土した。このことは、この地域で漁を生業の一つとしていたことを示すにとどまらず、漁具の保管方法の一端を表す可能性もある。

3 西尾崎1地区について

今回の調査では8～9世紀の須恵器が出土しており、今のところ西尾崎1地区周辺への定住開始時期とみられる。7棟の掘立柱建物は棟方向が北から70～80°東へ傾く古代に存立したと考えられる建物群と、西～10°程度傾く中世に存立したと考えられる建物群とに大きく分けられる。このうち標高約5.3mのS B 206は古代の建物の中で最も低い位置にあるが、平安海進期にもこの標高までは海面が及んでいなかったことを示している。また調査区西側のS B 201は2面の廂をもつ古代前半期の大型掘立柱建物跡であり、集落の中心的な建物の一つであった可能性がある。このS B 201やS K 201など西側には古代の遺構や遺物が多く、中世のものは東側に集まっていることなどから、この地区で見れば時代の推移とともに生活空間は西から東へ移っていったと考えられる。しかし、1地区は西尾崎地区の調査面積全体の39%に過ぎないため、今後の調査によって異なる様相が出てくる可能性もある。

遺構の密集する調査区東側では掘立柱建物跡の他、土坑、溝などが確認された。出土遺物には、古代の須恵器、中世の足鍋の他、県内では足鍋に先行して13世紀代に生産され始める羽釜が多く、足釜も見られた。集落の中心時期は古代から中世前半と考えられ、この地域での初現期の瓦質土器の様相を知る上で、良好な資料となる遺物が多い。

4 おわりに

今回の調査により、下津令遺跡の沖ノ下1地区および西尾崎1地区の歴史的変遷を明らかにする上で貴重な資料を得ることができた。しかし下津令遺跡の北東1kmに位置する上り熊遺跡に見られたような組織的統制のとれた集落構成までは見られず、調査区内には墓も検出されていない。今後、今回の調査区の北西部に広がる下津令遺跡の他地区の発掘調査が進められれば、遺跡の性格や特徴がより明確にされるものと期待したい。

引用・参考文献

- 山口県『山口県史 資料編 考古1』(2000) 山口県『山口県史 資料編 考古2』(2004)
防府市史編纂委員会『防府市史 資料II 考古資料 文化財編』(2004)
下関市教育委員会『秋根遺跡』(1977) 山口大学『山口大学構内遺跡調査研究年報III』(1985)
山口県埋蔵文化財センター『吉永遺跡(III-東地区)』(1999)・『高野遺跡(北地区)』(1999)・『上り熊遺跡I』(2008)
・『上り熊遺跡II』(2009)・『上り熊遺跡III』(2010)・『開明遺跡 尾尻遺跡』(2013)

(付編)

下津令遺跡発掘調査に伴う放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、下津令遺跡の発掘調査で検出された遺構や遺物に関する年代情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定を実施する。

1 試料

放射性年代測定を実施する試料は沖ノ下1地区で検出された遺構内から出土した炭化材と土器付着炭質物の6点である(表1)。

分析対象とした炭化材については、試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察する。その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)、木材組織については、林(1991)や伊東(1995-1999)を参考にする。その結果、試料1・3・4の炭化材は、針葉樹のマツ属複維管束亜属に同定された。試料2および試料5については保存状態が悪く、種類は不明であった。以下にマツ属複維管束亜属の解剖学的特徴等を記す。

- ・マツ属複維管束亜属(*Pinus* subgen. *Diploxyylon*) マツ科

試料はいずれも年輪界で割れている。軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

表1 分析試料一覧

	出土地点	形態	出土状況	分析の目的
1	沖ノ下1地区 壇穴建物跡 S I 101 埋土	炭化材片	壇穴建物跡 S I 101 の中央炉内から土器片に混じて埋土中から出土。	S I 101 の年代を比定する参考資料とするため。
2	沖ノ下1地区 壇穴建物跡 S I 102 埋土(カマド中およびその周辺)	炭化材片	壇穴建物跡 S I 102 のカマドおよびカマド付近の埋土中から出土。	S I 102 の年代を比定する参考資料とするため。
3	沖ノ下1地区 壇穴建物跡 S I 103 埋土	炭化材片	壇穴建物跡 S I 103 の床面に近い埋土下部から出土。	S I 103 の年代を比定する参考資料とするため。
4	沖ノ下1地区 壇穴建物跡 S I 101 内の不明遺構 S X 101 の焼土	炭化材片	壇穴建物跡 S I 101 内の不明遺構 S X 101 は高さが6～9cm程度の円形の焼土に囲まれており、その焼土上から採取。	S X 101 の年代を比定する参考資料とするため。また、壇穴建物 S I 101 と不明遺構 S X 101 の関連を考える資料とするため。
5	沖ノ下1地区 壇穴建物跡 S I 103 内の不明遺構 S X 102 の焼土	炭化材片	壇穴建物跡 S I 103 内の不明遺構 S X 102 は最大高16cmの円形の焼土に囲まれており、その焼土上から採取。	S X 102 の年代を比定する参考資料とするため。また、壇穴建物 S I 103 と不明遺構 S X 102 の関連を考える資料とするため。
6	沖ノ下1地区 溝 S D 108	土器付着物	溝 S D 108 埋土中の溝廃絶時に埋められたとみられる状態で瓦質土器鍋が出土。その鍋外側から採取。	瓦質土器鍋のこの地域での編年観との比較対照、および鍋が出土した溝 S D 108 の年代を比定する参考資料とするため。

2 分析方法

分析は、いずれも AMS 法で実施する。試料表面の汚れをピンセット、超音波洗浄など等により物理的に除去する。塩酸や水酸化ナトリウムなどを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する(AAA処理)。水酸化ナトリウム処理については、試料の損耗がおこるため、注意深く行う。定法では1Nの塩酸ならびに水酸化ナトリウムを用いるが、試料の損耗状況によっては水酸化ナトリウムの濃度を薄くする場合がある。この処理を行った場合は「AaA」と記載する。

試料を燃焼させたあと、不純物(水など)を取り除き、精製されたCO₂を得る。これを還元してグラファイトを生成する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、小型タンデム加速器にて測定する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C /¹²Cの測定も行うため、この値を用いてδ¹³Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0を用いる。なお暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動および半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年較正は、測定誤差σと2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とはσや2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

3 結果

放射性炭素年代測定および暦年較正結果を表2に示す。また竪穴建物および竪穴建物内の不明遺構から出土した炭化材の暦年較正結果の比較を図1に示す。

各遺構の補正年代と暦年較正年代(2σ確率1位の値)をみると、竪穴建物S I 101の中央炉内の炭化材が1860±20BP(cal AD 85–221)、S I 101内の不明遺構S X101の炭化材が1890±20BP(cal AD 66–173)を示す。両者の年代値は誤差範囲内で一致している。

竪穴建物S I 102のカマド近辺の炭化材片は、1590±20BP(cal AD 419–537)を示し、今回の竪穴建物跡の中で最も新しい年代を示す。

竪穴建物S I 103の炭化材片は1890±20BP(cal AD 65–172)、S I 103内の不明遺構S X103の炭化材片が1830±20BP(cal AD 129–237)を示す。両者の年代値は近似する値を示し、上記のS I 101およびS X101の年代値とも近似する。

溝S D108から出土した瓦質土器鍋の外壁に付着していた炭質物は、310±20BP(cal AD 1512–1601)を示す。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

地点、層位 試料状態	処理 方法	測定年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) BP	暦年較正結果					Code No.			
					分散度	cal BC/AD		cal BP					
S I 101 中央炉内 炭化材片	AAA	1890 ± 20	-26.71 ± 0.25	1860 ± 20 (1861 ± 20)	σ	cal AD 90 - cal AD 99	cal BP 1,860 - 1,851	0.104	IAAA- 132129				
					2 σ	cal AD 123 - cal AD 176	cal BP 1,827 - 1,774	0.648					
						cal AD 191 - cal AD 212	cal BP 1,759 - 1,738	0.247					
S I 102 カマドと その近辺 炭化材片	AAA	1640 ± 20	-28.08 ± 0.22	1590 ± 20 (1586 ± 20)	σ	cal AD 423 - cal AD 434	cal BP 1,527 - 1,516	0.145	IAAA- 132130				
					2 σ	cal AD 454 - cal AD 470	cal BP 1,496 - 1,480	0.187					
						cal AD 487 - cal AD 534	cal BP 1,463 - 1,416	0.668					
S I 103 床面付近 炭化材片	AAA	1900 ± 20	-25.95 ± 0.22	1890 ± 20 (1888 ± 20)	σ	cal AD 419 - cal AD 537	cal BP 1,531 - 1,413	1.000	IAAA- 132131				
					2 σ	cal AD 84 - cal AD 128	cal BP 1,866 - 1,822	1.000					
						cal AD 65 - cal AD 172	cal BP 1,885 - 1,778	0.967					
S I 101 内 S X 101 炭化材片	AaA	1940 ± 20	-28.04 ± 0.23	1890 ± 20 (1887 ± 20)	σ	cal AD 193 - cal AD 210	cal BP 1,757 - 1,740	0.033	IAAA- 132132				
					2 σ	cal AD 84 - cal AD 128	cal BP 1,866 - 1,822	1.000					
						cal AD 66 - cal AD 173	cal BP 1,884 - 1,777	0.962					
S I 103 内 S X 102 炭化材片	AAA	1900 ± 20	-28.79 ± 0.24	1830 ± 20 (1832 ± 21)	σ	cal AD 192 - cal AD 210	cal BP 1,758 - 1,740	0.038	IAAA- 132133				
					2 σ	cal AD 138 - cal AD 160	cal BP 1,812 - 1,790	0.323					
						cal AD 165 - cal AD 199	cal BP 1,785 - 1,751	0.484					
溝SD108 瓦質土器鍋 付着炭質物	AAA	320 ± 20	-25.84 ± 0.28	310 ± 20 (310 ± 20)	σ	cal AD 201 - cal AD 214	cal BP 1,749 - 1,736	0.193	IAAA- 132134				
					2 σ	cal AD 129 - cal AD 237	cal BP 1,821 - 1,713	1.000					
						cal AD 1,522 - cal AD 1,574	cal BP 428 - 376	0.789					
						cal AD 1,618 - cal AD 1,634	cal BP 332 - 316	0.211					
						cal AD 1,496 - cal AD 1,506	cal BP 454 - 444	0.026					
						cal AD 1,512 - cal AD 1,601	cal BP 438 - 349	0.745					
						cal AD 1,616 - cal AD 1,646	cal BP 334 - 304	0.229					

1) 処理方法の AAA は、1N の塩酸ならびに水酸化ナトリウムを用いる、酸処理-アルカリ処理-酸処理を示す。試料の損耗状況によっては水酸化ナトリウムの濃度を薄くする場合がある。この処理を行った場合は「AaA」と記載する。

2) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用した。BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。

3) 暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0 (Copyright 1986–2010 M Stuiver and PJ Reimer) を使用。暦年の計算には、補正年代の括弧内に示した 1 桁目を丸める前の値を使用。年代値は、1 桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。統計的に真の値が入る確率は σ が 68.3%、2 σ が 95.4% である。相対比は、 σ 、2 σ のそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

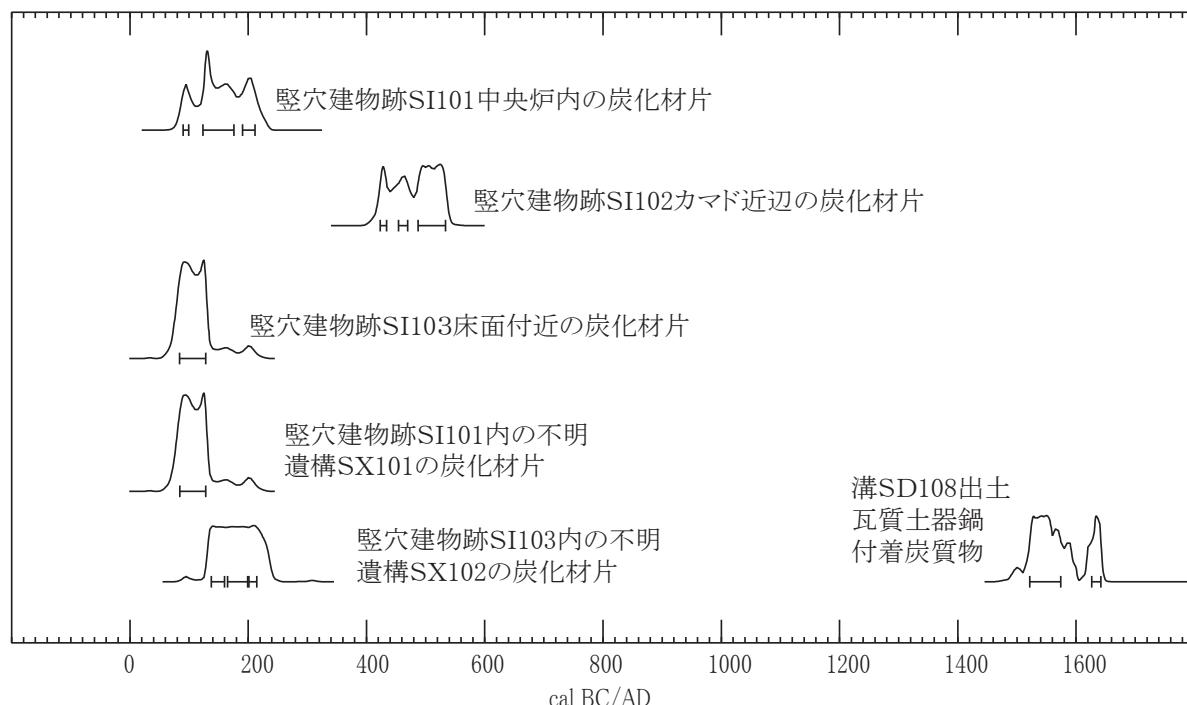


図1 暦年較正結果の比較

4 考察

今回調査を行った沖ノ下1地区で検出された堅穴建物跡および堅穴建物内の不明遺構から出土した炭化材の年代値をみると、堅穴建物跡 S I 101 と S I 103、および S I 101 内の不明遺構 S X 101、S I 103 内の不明遺構 S X 102 の年代値は、近似する年代値を示した。暦年較正年代で 1 世紀～3 世紀前半

の年代を示している。これらのことから、竪穴建物 S I 101およびS I 103、および各建物内の不明遺構は、ほぼ同時期に存在した可能性が推定される。また、これらの遺構の年代値は、西本編(2007)による弥生時代とその前後期の¹⁴C年代値の集成と比較すると、弥生時代後期に比定される。ただし、木材は外側に二次肥大成長を繰り返しながら年輪を蓄積していくため、中心の年輪ほど、古い年代値を示すことから、今回のような炭化材片の場合、最外年輪に相当するとは限らないので多少の誤差が生じていることを考慮する必要がある。今回の炭化材片のうち、樹種が明らかになった S I 101、S I 103、S X 101の炭化材は、生育適応範囲が広い、成長の早い陽樹で、二次林の代表的な樹種でもあるマツ属複維管束亜属(いわゆるニヨウマツ類)であった。このことから、S I 101、S I 103、S X 101については、炭化材片の年代値と伐採・利用された年代との誤差は、陰樹で年輪が緻密な常緑広葉樹のように大きくはない可能性が高く、伐採・利用年に近いと思われる。

一方、竪穴建物 S I 102は今回調査を行った竪穴建物跡の中で最も新しい年代値を示した。暦年較正結果から、5世紀～6世紀初頭の年代が推定される。

溝 S D 108から出土した瓦質土器鍋の付着炭質物の年代値は、暦年較正結果から16世紀頃の年代を示している。

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所. 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 III. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 西本豊弘 編, 2007, 新弥生時代のはじまり第2巻 縄文時代から弥生時代へ. 雄山閣, 185p.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 島地謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

沖ノ下1地区図版



調査区遠景(北から)

図版 1



調査前遠景(北から)



調査区全景(東から)

図版2



調査区近景



S I 101 上層床面完掘(北東から)



S I 101 下層床面遺物出土状況(北東から)

図版 4



S I 101 爐 遺物出土状況(南東から)



S X 101 検出状況(東から)

図版 5



S I 102 遺物出土状況(南から)



S I 102 カマド 検出状況(西から)

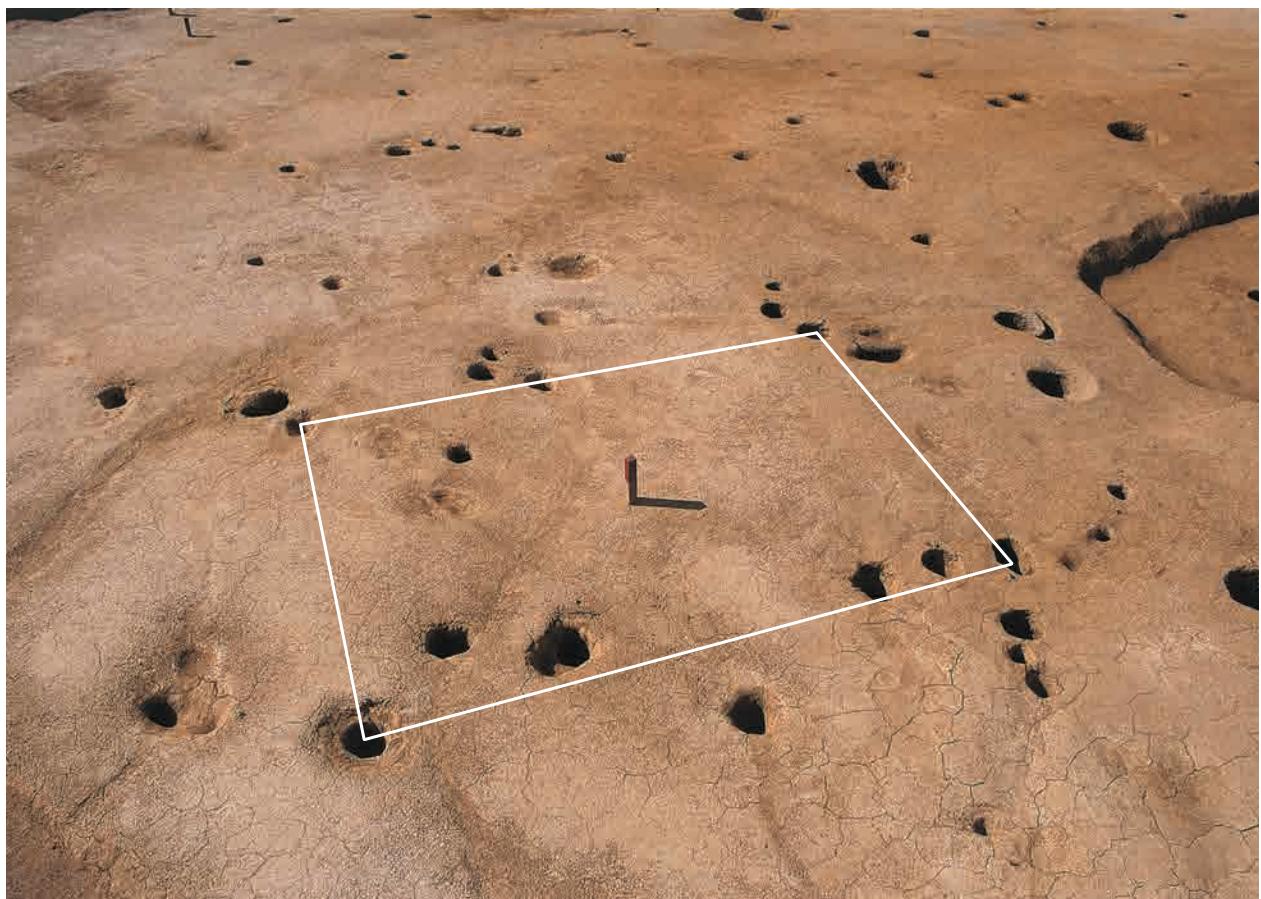
図版 6



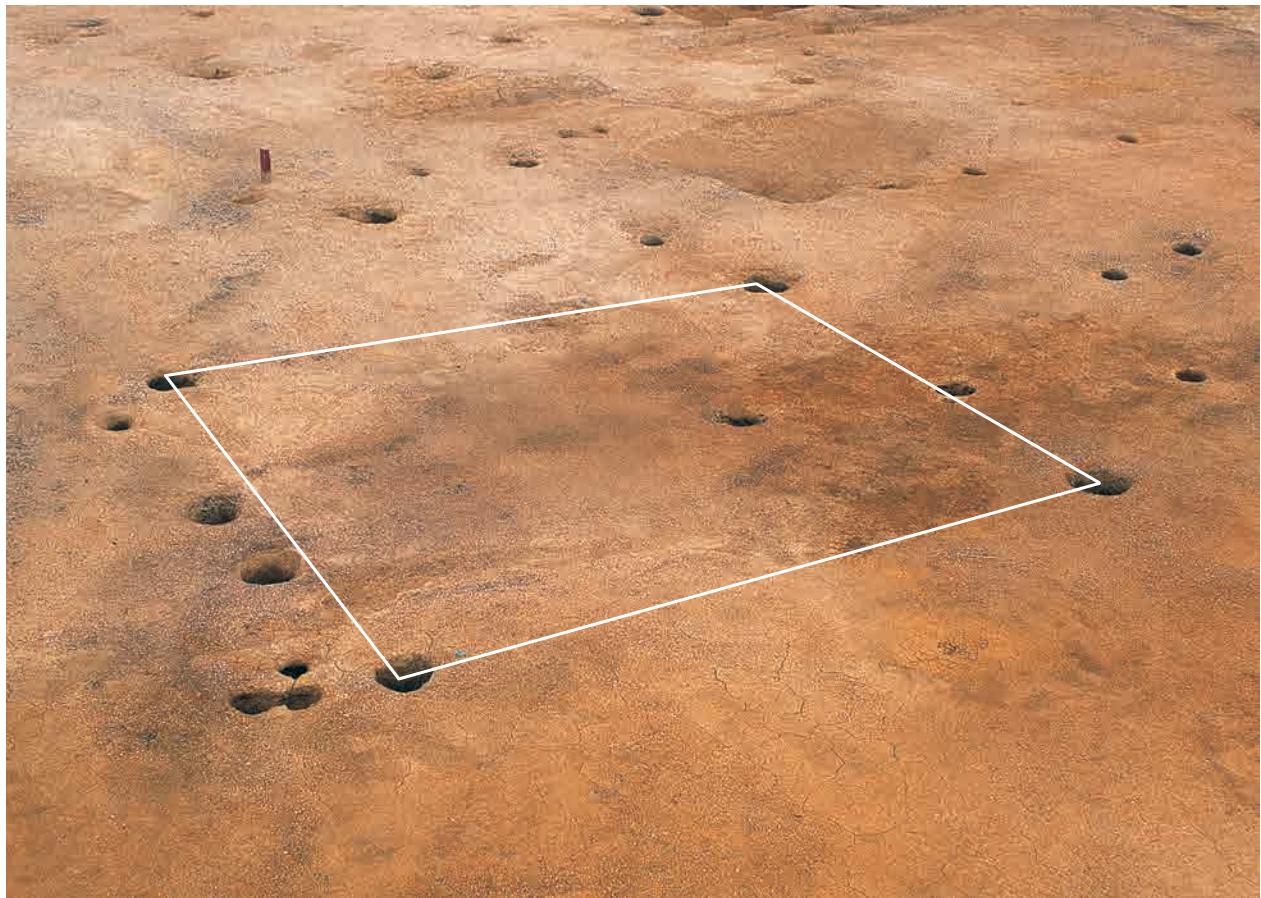
S I 103 完掘(南西から)



S X 102 検出状況(南西から)



S B 102 完掘(南東から)

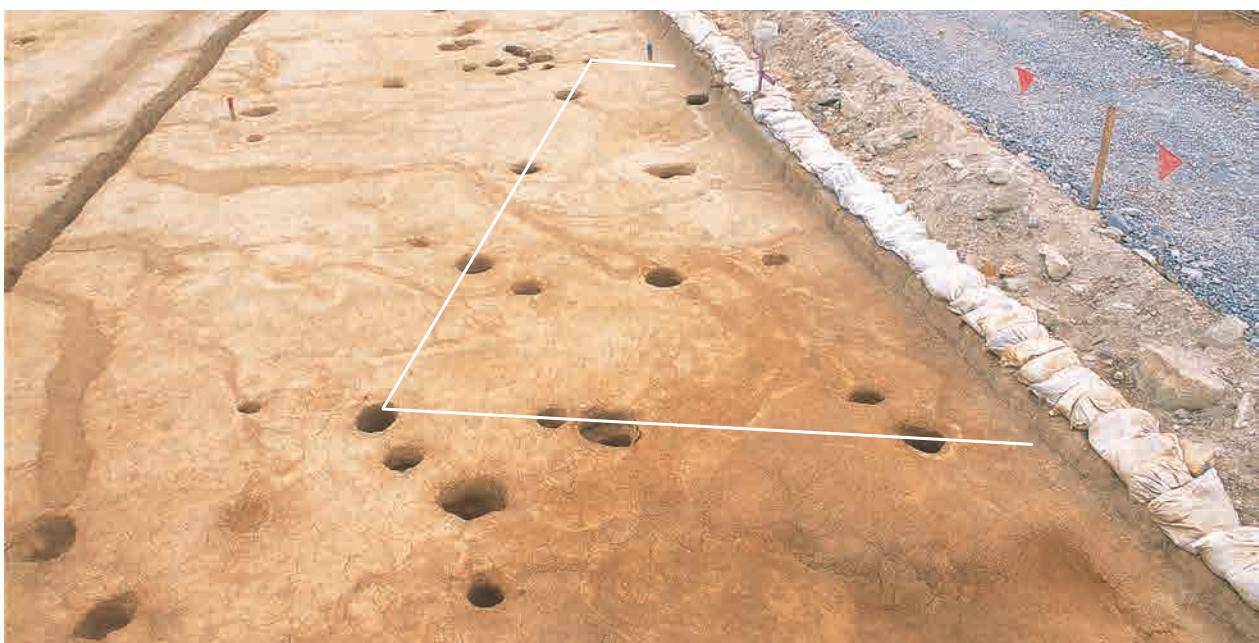


S B 110 完掘(南西から)

図版 8



SB 103 完掘(南東から)



SB 108 完掘(北から)

図版 9



SB 115 完掘(東から)



SB 112 完掘(南から)



SK 123 遺物出土状況(南東から)

図版 10



SK 113 遺物出土状況(北から)



SK 131 遺物出土状況(西から)



SK 134 完掘(南から)



SK 148 完掘(東から)



SK 150 遺物出土状況(南東から)



SK 151 遺物出土状況(西から)



SD 102 完掘(南西から)



SD 108・109 遺物出土状況(南西から)

図版 12



S E 101 完掘(南から)



S P 1001 遺物出土状況

図版 13



SP 1074(SB 110)遺物出土状況



SP 1072(SB 112)遺物出土状況



SP 1017 遺物出土状況



SP 1039 遺物出土状況



SP 1041 遺物出土状況



SP 1042 遺物出土状況



SP 1056 遺物出土状況



SP 1078 遺物出土状況

図版 14



出土遺物(1)

図版 15



出土遺物(2)

図版 16



出土遺物(3)



出土遺物(4)

図版 18



出土遺物(5)



出土遺物(6)

図版 20



出土遺物(7)

図版 21



出土遺物(8)

図版 22



出土遺物(9)

西尾崎 1 地区図版





調査前遠景(北東から)



調査区全景(北から)

図版 24



調査区全景



調査区北壁



調査区南壁

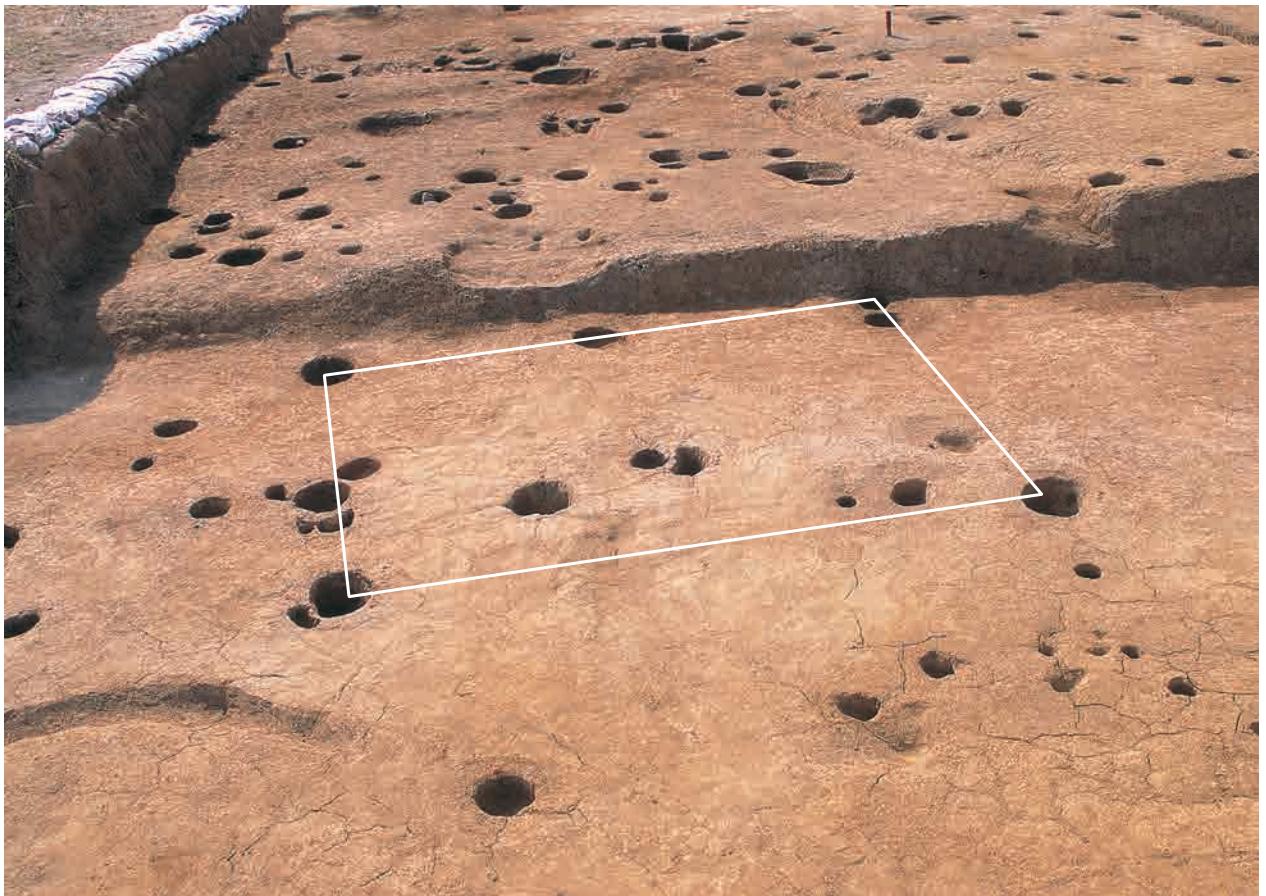


SB 201 完掘(西から)

図版 26



SB 202 完掘(南から)



SB 205 完掘(東から)



SB 206 完掘(南から)



SB 207 完掘(西から)



SK 201 遺物出土状況(南から)

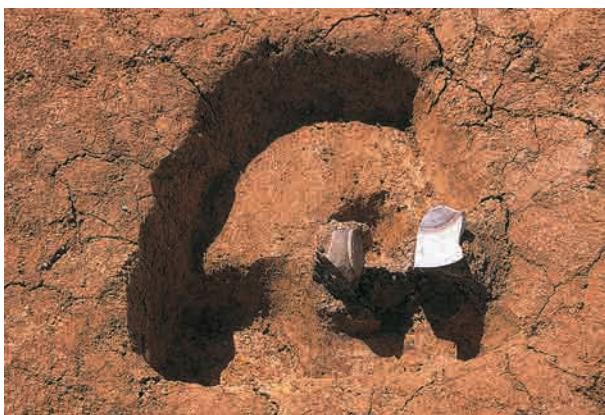


SK 204 遺物出土状況(東から)

図版 28



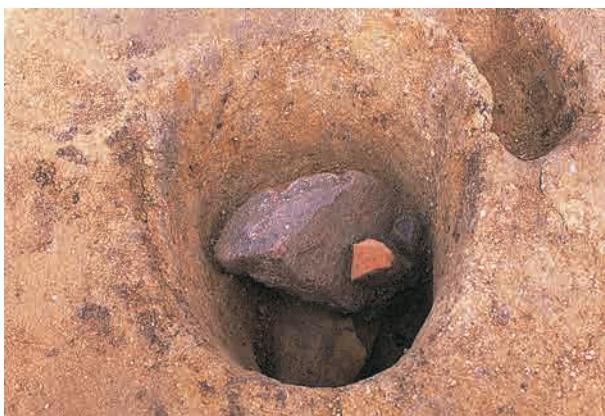
S D 207 遺物出土状況(西から)



S P 2110(S B 201)遺物出土状況



S P 2063(S B 202)遺物出土状況



S P 2048(S B 205)遺物出土状況



S P 2003 遺物出土状況



S P 2023 遺物出土状況



S P 2030 遺物出土状況



SP 2033 遺物出土状況



SP 2092 遺物出土状況



SP 2122 遺物出土状況



SP 2124 遺物出土状況



SP 2135 遺物出土状況

図版 30



出土遺物(1)



出土遺物(2)

図版 32



出土遺物(3)

報告書抄録

ふりがな	しもつりょういせき1（おきのした1ちく・にしおさき1ちく）		
書名	下津令遺跡1（沖ノ下1地区・西尾崎1地区）		
副書名			
卷次			
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告		
シリーズ番号	第86集		
編集著者名	光永辰男 水津亜希子 大重優花		
編集機関	山口県埋蔵文化財センター		
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL083-923-1060		〒747-0808 山口県防府市桑山2丁目1番1号 TEL 0835-25-2532
発行年月日	西暦2014年3月24日（平成26年3月24日）		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもつりょういせき 下津令遺跡 (沖ノ下1地区)	やまぐちけん 山口県 ほうふし 防府市 おおあざだいどう 大字台道	352063		34° 2' 54"	131° 28' 42"	20130430 ～ 20131105	2,812 m ²	ほ場整備
しもつりょういせき 下津令遺跡 (西尾崎1地区)	やまぐちけん 山口県 ほうふし 防府市 おおあざだいどう 大字台道	352063		34° 2' 59"	131° 28' 40"	20130430 ～ 20131105	1,144 m ²	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
下津令遺跡 (沖ノ下1地区)	集落	古墳 中世	堅穴建物 掘立柱建物 土坑 井戸 溝 柱穴 約1090個 性格不明遺構 2基	3棟 15棟 23基 1基 15条 約1090個 2基	土師器 須恵器 瓦質土器 陶器 磁器 土製品 石器・石製品 金属製品	屋外周溝が巡る古墳時代前期の堅穴建物 カマドをもつ古墳時代中期の堅穴建物
下津令遺跡 (西尾崎1地区)	集落	古代 ～ 中世	掘立柱建物 土坑 溝 柱穴 約520個	7棟 6基 8条 約520個	土師器 須恵器 瓦質土器 磁器 土製品	

要約	下津令遺跡沖ノ下1地区は丘陵の先端に立地する古墳時代および中世を主体とする集落跡である。古墳時代の遺構として、前期と中期の方形堅穴建物跡が3棟確認された。前期の建物跡の1つには屋外周溝が巡り、中期の建物跡からはカマドが検出された。本格的なカマドをもつ堅穴建物跡としては県内でも古い時期のものと考えられる。建物跡からは庄内式併行期の高杯や器台、布留式の甕などが出土し、防府市縁辺部の大通地区で古墳時代には人々が定住していたことが明らかになった。また中世の掘立柱建物跡も確認され、溝からは瓦質土器を中心とする中世後期の一括資料が出土した。
	また西尾崎1地区は丘陵縁辺部上に立地する古代から中世にかけての集落跡である。掘立柱建物跡が検出された他、土坑、溝などから須恵器や瓦質土器などが出土し、継続的に集落が営まれていたことが確認された。

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第86集

下津令遺跡1

2014年3月24日

編集・発行 公益財団法人 山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号

防府市教育委員会
〒747-0808 山口県防府市桑山2丁目1番1号

印 刷 アロ一印刷株式会社
〒751-0818 山口県下関市卸新町10-3